Dreams don't come true ～夢も希望もありゃしない～

富士篠崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｒｅａｍｓ　ｄｏｎ't　ｃｏｍｅ　ｔｒｕｅ　～夢も希望もありゃしない～

【Ｎコード】
Ｎ４６５２Ｓ

【作者名】
富士篠崎

【あらすじ】
「これは代々フェンデ家で受け継がれてきたことなんだが……フェンデ家の長男は一人前――１８歳になると旅に出なければならないんだ」
いつもと変わらない朝。いつもと変わらない日常。しかし父であるアイルのその発言からアレンの日常は大きく崩れ始めた。
魔物や魔法が存在する――そんな、下手すれば死と隣合わせの世界で、果たしてアレンは無事に旅を終えることが出来るのか？（※本

作は異世界転移モノではありません）

第1話　旅の仲間を見つけよう（前書き）

本作品はオリジナルですが、他の作者様の作品と設定やキャラの名前が被ってしまっている可能性があります。その点は何卒ご容赦ください

第1話　旅の仲間を見つけよう

アレン・フェンデは、所謂どこにでもいる普通の青年である

中肉中背の体格に一般的に見て整ってると言えなくもないがカッコイイかどうかと問われれば１０人中９人が「まぁ……うーん……」と答える程度の顔立ち

性格は少々子供っぽく、好きな食べ物は甘いもので嫌いなものは苦い物全般。そのせいか同年代の女の子よりどちらかというと少々御歳を召した女性陣に可愛がられることの方が人生において多かった

そんな特に特徴というほど特徴がない青年であるアレン。その生活サイクルもまた平凡そのものだった

朝は日が昇ると同時に起きる――と見せかけてそれから3時間はぐっすりと眠り、大体の人間が活動を始めるであろう時間にようやく起きて朝食を食べる

朝食を食べた後は適当に着替えて街へ繰り出し、そこで日雇いの仕事などを途中昼休憩を挟みながら夕方までこなして、日が暮れる頃には自宅で両親と供に夕食をとる

そのあとは思春期の男子特有の本を読んだり思春期の男子特有の妄想をしたり幼少の頃父親からもらった木刀で日課の素振りをしたりと自由に過ごし、一日の締めに風呂で汗を流してから死んだよう

に眠る

――そんな傍から見れば少々だらしないような生活を16歳の時から続けて早2年

つい3日前に18歳の誕生日を迎えたばかりのアレンは、いつものように朝ご飯のブルーベリージャムをたっぷり塗った食パンをもっさもっさと食べていた

いつもと変わらない朝食の時間。一昨日、昨日と特にこれといって何もなかった時間

テーブルを挟み両親がアレンと向き合う形で座っている。アレンが起きてくる前に朝食を済ませていたのか、両親の前にはそれぞれコーヒーの入ったカップだけが置かれていた

普段アレンが起きる頃には既に仕事に出かけている父親と、朝は何かと忙しそうにしている母親が何故か今日は自分と同じテーブルについている。それは此処最近では見ることのなかった光景だ

珍しいこともあるもんだ――とアレンは咀嚼しながら思う。しかしそれ以上は特に気にすることもなく自分の前に置かれた牛乳でパンを流し込むと、そのまま2枚目のパンに噛り付いた

確かに朝食時にこうして家族全員が揃うことはあまりない。だが、逆に言ってしまえばたったそれだけのこと。それにあくまで朝食時に揃うのが珍しいというだけで夕食時には基本的に家族全員が揃う。わざわざそこまで気にするほどのことでもない

だからアレンの意識は目の前の両親ではなく食事に向いていた

だから最初は父親に何を言われたのか理解出来なかった

――旅に出ろ？

第1話　旅の仲間を見つけよう

「えっと……今なんて？」

寝起きのまだぼんやりとした頭がそうさせたのか、気づいた時にはアレンはそんな言葉を口にしていた

問い掛けはテーブルを挟んで正面に座る両親に向けてのもの。真剣な表情の二人に対し今の自分はさぞ間の抜けた顔をしているに違いない。だが、これで呆けるなと言う方が無理な話だった

アレンの問いにアイル――アレンの父親は

「確かに急にこんなこと言われてかなり困惑していると思う。だが、おちちゅいて聞け」

「……」

突っ込まない、突っ込めない。それ以上に気になることがあった

からだ

「お前はこの間の誕生日で１８歳になった。つまり世間でいう一人前の大人になったわけだ」

「まぁ……そうだけど。でもそれが今さっきの発言となんの関連が？」

「これは代々フェンデ家で受け継がれてきたことなんだが……フェンデ家の長男は一人前――１８歳になると旅に出なければならないんだ」

「……はい？」

半分になった食パンがアレンの手から滑り落ちる。そしてそのままべちゃり、と皿に紫色のスタンプをつくった

「ちょ、ちょっと待って。旅ってなんだよ。俺そんなの初耳なんだけど」

「そりゃそうだ。聞かれたことないし」

そう言ってアイルは妻のクローディアが淹れたコーヒーを啜る

だが、そんないい加減な言葉で納得出来るアレンではない

「いやいや、聞かれてないとか既にそういう問題じゃないだろ。いきなりこれからの人生を左右するようなカミングアウトされた俺の気持ちはどうなるんだよ」

「うーんやっぱり母さんが淹れてくれたコーヒーは最高だなぁ」

「話を聞けよクソ親父がぁアアア！！」

「――アレン」

アイルの隣、クローディアが今にもアイルに掴みかかりそうなアレンの名前を呼んだ

「突然のことで頭が混乱してるのはわかるわだってあなた頭悪いものね。でも、お父さんの気持ちもわかってあげて。お父さんだって好きで自分の馬鹿息子を旅に出すわけじゃないのよ。……勿論私だってそう。でもフェンデ家に生まれた以上、避けては通れない道なの」

「なんかところどころに蔑みの言葉が混じってるような気がするんだけど気のせいじゃないよね？　あともう俺が旅に出ることは確定なの？」

「まーだ駄々こねているのかお前は。いいか、ただ何の考えもなく旅をしてこいと言ってるんじゃない。旅を通してお前にはやらなければいけないことがあるんだ」

「……なんだよそのやらなきゃいけないことって。まさか絵本みたく勇者になって悪の魔王でも倒してこいとか言うんじゃないだろうな」

アレンの言葉にアイルは溜息をついて悲しそうに目を伏せると

「我が息子ながら随分可愛げがなくったものだ……。その絵本に出

てくる勇者に憧れて「僕もいつかこの絵本に出てくる勇者みたくなる！」ってお父さんがあげた木刀で素振りを始めた頃は可愛かったのになぁ……どこで育て方間違えたんだろ。母さんわかる？」

「お父さんがアレンのいない間に部屋に侵入してベッドの下に隠してある本をジャンル毎に机の上に並べたあの時からじゃないですか？」

「マジで？　あの時かー……」

「あれ親父の仕業だったのかよ！　てっきり母さんがやったものだとばっかり思ってたわ！　つか人がいない時に何してんだよ！」

「いや、父親として息子のそういう趣向も把握しておかなければなるまいと思ってな。だが、お前も順調にお父さんと同じ道を歩んでいるみたいで安心したぞ。思わず何冊か借りることになるとは……流石のお父さんも予想外だった」

「あアぁあああアア知りたくなかった新事実が続々とォおおおおおおお！！」

アレンは叫ぶ。もう旅がどうとかいうレベルの話ではなかった

恥ずかしさと怒りが頭の中でぐるぐると渦巻いて思わず床に頭を叩きつける

「馬鹿ねそんなことしてそれ以上馬鹿になったらどうするの。今でさえギリギリ紙一重なのに引き返せなくなるわよ」

「もう実の息子にかける言葉じゃないからねそれ！」

「さて、息子を適度に弄ったところでそろそろ話を戻そうか」

「どの面下げてんなことほざいてんだクソ親父！」

「それで金髪巨乳の価値についてだが」

「しかも戻ってねぇじゃねーか！」

＊＊＊＊＊

初夏の日差しがアレンを照らす。まだそんなに日は高くないせいかほどよく涼しい風が吹いていて、心なしか足取りもいつもより軽く感じるようだった

「……普段ならな」

アレンの足取りは恐ろしく重かった。まるで靴に鉛でも入っているかのような感覚で一歩一歩がとても辛い

それでもさっきまでは無理矢理テンションを上げようと舗装された石畳の道でスキップなんぞをしていたのだが、二歩目で空しくなったので断念した

「何故こんなことになった……俺が一体何をした……」

全世界の不幸を一身に背負ったような表情でアレンは空を見つめる

もし神という人物が存在するならば、どうして自分はこんな目に遭わなければならないのか

「――さっきも言ったが、お前にはフェンデ家の長男として旅に出てやらなければいけないことがある」

「……もうこの際旅に出ることは気にしない。……で、その“やらなければいけないこと”ってなんなんだよ」

「旅をしていればいずれわかる。もし仮にわからなかったとしても旅が終わる頃には目的を達成してるはずだ」

「はぁ!?　まさかそんな理由で旅に出ろってのか!?　冗談じゃねえぞ!」

「準備のことなら心配するな。必要なものは既に用意してある」

「問題はそこじゃねぇよ!」

「……」

上を向いていることでかろうじて零れ落ちない水滴を拭いながら自分の置かれた状況を嘆く

確かに子供の頃、旅というものに憧れを持ったことはあった

だがそれはやっぱり昔の話なわけで、今になって旅に出ろと言われてもはいそうですかと二つ返事出来るわけがない

それをどこで間違えたのか今こうして僅かばかりの手荷物を持って旅に出るべく歩いている。否、歩かされていると言った方が正しいか。旅に出たのはアレン自身の意思だが本意ではない

「あのクソ親父め……覚えてろよ」

アレンの歩みに力が戻る

とにもかくにも、あの家を出た以上もう後戻りは出来ない。ならば非常に不本意だがあの父親が言っていた“やらなければならないこと”をやりきってしまうしかないのだ

「……お、着いた着いた」

そうしてポジティブにスキップしたりネガティブにコサックしてる内にアレンはいつの間にか目的地に到着していた

「失礼しまーす」

扉を開くとカランコロンと音がなる。と、同時に漂う胃袋を刺激する美味しそうな香りがアレンの鼻に届く

「いらっしゃい。……あら、アレンじゃない」

「こんにちわレイラさん」

右手にトレードマークのタバコを持ち相変わらずの調子でアレンを出迎えてたのは年齢不祥の美人な女性。名前をレイラという

「この時間ってことはちょっと遅めの朝ご飯かしら？」

「いえ、今日は別件で此処に」

レイラは街の中心部にある此処の酒場を経営している。といっても酒場として機能しているのは夜だけで、昼間はもっぱら定食屋だったりする。そしてアレンも割と此処の常連である。名前を覚えられていたのもそのせいだ

「別件？　……もしかしてお酒？」

一瞬レイラの表情が固まる

「いやいや、朝っぱらからお酒なんて飲みませんから。とりあえずいつものください」

「はいはい」

注文してから1分と経たずしてカウンター席にコトンと置かれる白い液体。通称ホットミルク

ほのかにハチミツが入ったそれはアレンのお気に入りの飲み物。此処に来る度に毎回注文していたらいつの間にか「いつもの」で通るようになっていた

「ズズ……うん、相変わらずうまあまだ」

「で、その別件っていうのは？」

「おっとそうでした。まぁその前にちょっとした事情説明が」

青年説明中……

「へぇ……そんなことがあったの」

「そうなんですよ。いくらなんでも急過ぎると思いません？　あ、ホットミルクお代わりください」

「はいはい」

アレンが（本の部分を除いた）事情を説明し終えると、それを黙って聞いていたレイラはふーっと煙を吐いた

だが、アレンの言わんとすることはわかったらしく2杯目のホットミルクを鍋で温めながら

「つまり話を聞く限りその別件っていうのは“仲間捜し”なんでしょ？」

アレンが此処へ来た目的をぴしゃりと言い当てた

――仲間。それは旅をする上で1番大事（個人的に）なものである。というか一歩外に出れば魔物が蔓延るこの世界。一般人となんら変わらないアレンの細腕一本で乗り越えられるほど甘くはない。スライムクラスならまだしも大型の獣相手だと運が良くて重傷で済むレベルである。そんな人間が一人旅などアグレッシブな自殺と何も変わらない

だから基本的に人が街間を移動する場合は護衛を雇ったり、屈強な仲間と共に行き来することが殆どだったりする。勿論中には一人で悠々と旅をする人もいるらしいが、鏡を見れば嫌というほど現実が見える

「此処の酒場はそういう人達が集まってくるんですよね？」

そういう人達というのは前述の通り、護衛を雇いたい人やその護衛の任を待つ戦士、アレンと同じで仲間を捜す人などのことだ。一番人が多くなるのは酒場となる夜だが、今もそれっぽい人はちらほら見受けられる

「それはそうだけど……でも本当にそれでいいの？」

「え、何か問題がありましたか？」

「そうじゃなくて、本当に今旅に出るのかってこと。急な話だったんでしょ？」

「あー……」

流れ作業のように家を出て来たせいか、確かにまだ話をされてか

ら1時間も経ってない

だがあのやりとりを思い出すと、とてもじゃないが家に戻ろうとは思えなかった

「……ま、なんとかなるんじゃないですかね？　人生何事も諦めが肝心って言いますし」

「……まるで他人事みたく自分のことを言うのね。でもアレンがそう言うのなら私に止める権利はないわ」

「止めてもいいんですよ？　私を置いて行かないでって泣きながらしがみついてきてもいいんですよ？」

実際引っ込みがつかないだけでアレンの気持ち自体は諦め５０の帰りたい５０で全くのイーブン。背中を軽く一押しされるだけで一気にどちらかに片寄ってしまう可能性だってなくは

「ホットミルク出来たわよ」

「わぁい」

思考を中断、ホットミルクのいい匂いが鼻に届いた

「で、どんな仲間が欲しいの？　此処にいるだけでも結構な人数がいるけど」

「あぁ、そうでした。仲間を捜しに来たんでしたね。んー…やっぱり俺は（一緒にいるだけでエロいハプニングが起きそうな金髪ウェーブのスタイル抜群な美人の優しいお姉さんみたいな）女の人がい

いです」

「……口から白いの零れてるわよ」

「最近どうも口の閉まりが悪くて。それでどうですか？　丁度いい人いますか？」

「残念だけど今は女性で仲間を捜してる人はいないわ」

「ガッデム……」

カウンターに熱烈な接吻をかわすよう突っ伏す。ほのかに木の味がした

「……露骨な落ち込みようね。そんなに女性が良かったの？」

「麦茶とめんつゆ間違って飲んだ時よりショックがでかいです……」

その時、カランコロンと新たな来客の知らせが耳に届いた

アレンが何気なく音のした方に視線を向けるとそこには二人の人影があった。一人は外ハネ気味の赤髪を肩の辺りで切り揃えた女性。武道家のような軽装に身を包んでいて歳は恐らくアレンと同じくらい。そしてもう一人は魔術師が着るようなローブで頭まですっぽり覆った年齢はおろか性別不明の人物。ただ、こちらは赤髪の女性より頭一つ分ほど小さい

「あら、初めてのお客さんね。いらっしゃい。空いてるとこに適当に座って」

一見怪しさマックスな二人組だが、レイラはいつもの調子で二人を席を案内する

そして二人はアレンから一席空けてカウンターに座った

「ここって酒場よね？　二人分の食事を頼めるかしら」

「メニューは色々あるけど何にする？」

「そっちのオススメでいいわ。あ、片方は肉類多めでお願い」

「はいはい。ちょっと待ってね」

赤髪の女性とそんな短いやりとりをするとレイラはテキパキと二人分の食事の用意を始める

今まで話していた相手もいなくなりアレンは途端に暇になる。仕方ないので横目で赤髪の生足をチラ見……ではなく、ローブを被った方に目を向ける

魔術師…かどうかは不明だが、ローブを纏う人間は基本的に魔術師というのが世間一般の認識であると、一般人部門代表のアレンは思っている

だが、魔術師はその絶対数が少ない。１０００人に一人、素養がある人間が生まれるかどうかの世界だ。わざわざ大陸の外れにあるこんな辺鄙な街に来るなんてことは考えられなかった

そして正体はどうであれ当然酒場にいる他の連中からも奇異の視線を向けられる

「（……やっぱり恥ずかしいですよ）」

「（何言ってるのよ今更。どこもこんな調子だったじゃない）」

近くにいるアレンにすらも聞こえないような小さな声で会話する二人

一瞬アレンは聞き耳をたてそうになったが、レイラからアイコンタクトで無粋なことはするものじゃないわと、お叱りを受けた

「はい、お待たせ」

レイラはそのまま二人の前に料理を置いた

赤髪には魚介類たっぷりのパエリア。ローブの方には大きめのステーキに食べやすいように薄くスライスしたフランスパンとサラダ。お待たせと言いつつも注文を受けてからこれだけの量を作るのに１０分も掛かっていない

「……わぁ」

「……へぇ」

目の前に置かれた料理を見て二人が感嘆の息を漏らした。しかしその一瞬をアレンは聞き逃さない

年齢不祥性別不明だと思っていたローブの方の声を冷静に分析。数秒後、アレンの煩悩が弾き出した答えは予想外のものだった

「（――女の子か。１４、５歳の）」

何故声だけで性別はおろか詳しい年齢までわかるのか、甚だ疑問に思うところだが、敢えて言うのであれば紳士の嗜みである

「（アレンも気付いたみたいね）」

「（な、何がですか。自分の隠れた性癖とかにですか）」

「（違うわよ。あの子達のこと）」

料理を作り終えたレイラに耳打ちのように囁かれて若干アレンは戸惑い気味になる

「（……レイラさんは気付いてたんですか？）」

「（これでも色々な人間を見てきたからね。それにローブを着てるけどあの子は魔術師なんかじゃないわ）」

気になっていたところをズバズバと言ってのける。流石のアレンでもそこまでわからなかったというのに

「（でも魔術師じゃないならどうしてローブなんて着てるんですか？）」

顔を隠してるのだからわざわざ目立ちたいわけでもあるまい。しかしそれでは思惑と服装が矛盾していた

「（そこまではわからないけど、きっと人に言えない事情があるのよ）」

「（事情……）」

レイラの言葉を反芻する

――顔を隠さねばならない事情がある人間、というか女の子。とりあえず一番最初に思い付いたのが指名手配中の犯罪者という線。次に何処かの国から家出してきたお姫様という線。前者も後者もそれならば顔を隠してる理由が成立する

ただ、やはりどちらも可能性としては低い。というかしっくり来ない。お姫様ならまだしも１４、５歳の女の子が指名手配までされるような犯罪を犯すだろうか

「（ねぇ、アレン）」

「（なんですか？）」

「（あの子達を仲間にすれば？）」

「（……はい？）」

「（一緒に旅をする仲間を捜してるんでしょ？　二人とも女の子だしちょうどいいじゃない。それにどう見ても旅の途中よこの二人）」

レイラの視線の先。二人の持ち物である大きな麻のズタ袋が二つ床に置いてあった

「（いやいや、確かにそうかもしれませんけど、お互い素性も知らないんですよ？）」

ローブを着ている方が女の子であるとわかっただけで、その他のことに関しては何もわかっていない

「（此処には仲間を捜しに来てるんでしょ？　素性なんか気にしてたら仲間なんて出来っこないわよ）」

「（う……ごもっともな意見で。で、でも、俺は良くても向こうがそうとは限らないじゃないですか）」

向こうは年頃の女二人旅。途中たまたま立ち寄ったメシ屋でいきなり同年代の男に仲間にしてくれと言われて怪しまないはずがない

それに女の子二人で旅をしているということは、二人はかなりの実力を有している可能性が高い。戦力になればこそすれ、足手まといが増えることになんのメリットがあろうか

「（俺の言っていることは間違ってないですよねレイラさん？）」

「――って訳なんだけど、彼今仲間を捜してるらしいのよね」

「レイラさーん！？」

華麗にスルーされた上に、レイラは二人に事細かくアレンが旅に出る羽目になった事情を説明していた

「……」

「……」

「（やだ…なにこれ恥ずかしい……）」

二人が手を止めアレンを下から上まで品定めするかのようにじっくりと見つめてくる

「（……どう？）」

「（特に“ソレ”らしい匂いはしないので、少なくとも悪い人じゃないみたいです）」

「（じゃあ安全ってこと？）」

「（今のところは、と言ったところでしょうか。こればっかりは私にもわかりません。ですが少々気になることが……）」

「（気になること？）」

「（はい。実は――）」

アレンはなんとも言えない居心地の悪さを感じていた

「あ、あのー……」

視姦――否、視漢に耐え切れなくなったアレンは二人に声をかける

「――そこのあんた」

「は、はい」

同じくらいの歳のはずなのに赤髪に気圧されついジェントルマン語（敬語）で返すアレン

「本当に私達の仲間になりたいの？」

「え……」

答えにくい質問をされる

そもそも最初に仲間云々の話を持ち掛けたのはレイラであって、アレンとしては出来ることなら金髪（以下略　のお姉さんがいいのだ。だが、この機会を逃すと次がいつになるかわからないというのもまた事実である

「（でもなぁ……）」

そんな安易かつテキトーな理由で仲間になりたいと言っていいものだろうか、とアレンは悩む。アレンにとっては女の子二人という良条件だがこの二人にしてみれば単なる見知らぬ男でしかない

やはり此処は自分が紳士的にひとつ断りを入れるべきなのではないだろうか、いやきっとそうだそうに違いない

そう決心してからアレンは口を開いて

「はい！　仲間になりたいです！」

――あれ、俺今なんて言った？

第2話　話をする時は順序立ててから

「ちょっとついてきて」

と赤髪に言われ、アレンがやってきたのは街から少し離れた場所にある広い空き地だった

此処には元々大きな宿屋があったのだが客足が少ないということで中心街の方に移転することが決まり、取り壊されてから未だ誰も手付かずの更地となっていた

なので普段はもっぱら街の子供達の遊び場となっているが、今日に限ってはこの場にいるアレン達3人の他には人っ子一人いない

「此処なら大丈夫そうね」

「えっと……何が？」

言われるがままに訳もわからずホイホイと着いてきたアレン。店から出る時にレイラから「頑張ってね」と言われたが、何を頑張ればいいのか皆目見当もつかなかった

そして赤髪のスカートのようなよくわからないもののスリットから見えるスパッツと生足を見るべきか否かも迷っていた

「それじゃ早速始めるわよ」

赤髪はドサっと麻の袋を地面に置くと、俗にいうファイティングポーズの構えをとった。それを見てローブの方は二人から距離をとった

「始めるって……一体何を？」

「――フッ！」

それはまさしく一瞬の出来事

掛け声と共に赤髪から放たれたハイキックがアレンの眼前数センチの所を掠めていった

数瞬遅れてブォン！という風切り音が耳に届き、風圧で切り飛ばされた前髪が3本、ひらひらと地面に落ちた

「……へ？」

アレンはなんとも気の抜けた声を出す

目の前で起きたことに頭が追いついていない

「さっさと構えなさい。次は当てるわよ」

赤髪は少し離れた所でトントンと軽いステップを踏んでいる

「ちょ、ちょっと待った。先に状況の説明を――って、うおおお！？」

宣言通り二度目のハイキック。しかし今度は確実に頭に直撃する軌道を描いている

「（や、やば――）」

瞬間、鈍い音が鳴り響いた

第2話　話をする時は順序立ててから

「――あら、やるじゃない」

「あ、あぶねぇ……」

――間一髪。今ほどその言葉がふさわしい状況もないだろう

アレンは顔を動かさずに視線だけそちらへ向ける

顔の僅か数センチ横に迫っていた赤髪の蹴り。それをギリギリと軋む音をたてながらも防いだ木刀

「まさか私の蹴りを木刀なんかで受けるなんてね。普通だったら折れてるわよソレ」

「……なんでも結構立派な木から創られたものらしいからな。そこらへんの木刀よりは丈夫なんだろうよ」

一見普通に話しているアレンだが、その心情はとても穏やかなものではなかった

今の説明も幼少の頃、木刀を貰った際に父親から聞いたことをそのまま言っただけ

反射的に荷物から木刀を取り出して防いでいなければ、先程の鈍い音は自分の頭から発せられるところだったのだ

「……で、一応もう一度聞くけど、なんで俺達はこんなことしてんの？」

赤髪と距離をとり、上手く回らない頭から捻り出した言葉でアレンは会話を繋ぐ

すると赤髪はきょとんとアレンを見つめて

「なんでって……仲間になりたいんでしょ？　ならその実力を確かめようと思うのは普通のことじゃない」

「なんの説明もせずに蹴りを入れるのは普通じゃないと思うがな」

「……男のくせにいちいち細かいわね。私に勝てば仲間にしてあげるって言ってるのよ。この寛大な処置に何か文句でもあるの？」

言ってなかった。そんなこと一言も言ってなかった

試しに酒場で会ってから今までの会話を思い出してみるがアレンの脳にはそんなやりとりは記憶されていない

「いやまぁ……俺は別にそれでいいんだけどさ。そんな独断で決めちゃっていいもんなのか？　もう一人の子はその話を知ってるのか？」

「もう一人？　……あぁ、ルゥのことね。あの子なら大丈夫よ」

赤髪が少し離れた所にいるルゥと呼ばれたローブの少女に視線を向ける

未だ魔術師かどうかは不明確だが、一人離れた所でぽつんと立っている姿はなんとなくお座りしたまま主人を待つ小犬を彷彿とさせた

「それで結局どうするのよ。殺るの？　殺らないの？」

「……そりゃ仲間にしてくれるってんなら一応はやるけどさ」

赤髪の言い方になにやら不穏な気配を感じてしまうのは何故だろうかとアレンは思った

「そ。でも仲間にするのは私に勝てたらの話だけどね。勘違いしないでよ？」

「わかってるって。あと今の台詞ちょっと照れながら言ってみて。そしたら今よりもっとモチベーションが上がる気がするから」

「なに訳のわからないこと言ってるのよ。蹴るわよ」

「やめて死んじゃうからやめて」

対峙した赤髪との距離は約5メートル。遠からずも近からずと言ったところだった

「そういえば、あんたの得物はそれでいいの？」

「それでいいのって言われても、これ以外に何も持ってないし」

アレンの手には先程赤髪の蹴りを防いだ木刀が握られている

まだアレンが純真な子供時代の時から素振りに使われていたそれは、長年使ってきたおかげで手にしっくり馴染む――かと思えば実際そこまででもないというなんとも微妙な感じになっていた

素振りに使っていたことは確かだが、今直面しているような実践紛いのことには使ったことがない。勿論剣の腕前など言わずもがなだ

「（果たして俺はこの赤髪の女に勝てるのだろうか……）」

自分の実力を把握しているからこそのアレンの呟きである

赤髪の攻撃を受けたのは一度だけ。しかしそれだけで赤髪の実力が自分より上に位置することは明確であった。さっきの蹴りも恐らく手加減されていたから受けることが出来たのだ。もしあの時、本気の蹴りを放たれていたら今頃頭と胴体が繋がっていたどうかも怪しい

「何ぶつぶつ言ってるの。そろそろ始めるわよ」

「……あれ、そっちは武器使わねーの？」

木刀を持つアレンに対し赤髪は丸腰のまま先程と同じ構えをとっていた。当然アレンはそのことについて赤髪に問いかける

「私はそんなものに頼ったりしないし、使う必要もないわ。武器はこの拳と蹴りで十分」

「え、でもそれじゃあそっちが不利になるだろ」

剣と素手の闘いでどっちが有利かなんて戦いの素人であるアレンでさえわかる

威力にしもリーチにしても、普通に考えて剣の方が上である。この状況を端から見れば１０人が１０人、アレンが卑怯者と答えるくらいに優劣があった

「もし気になるならハンデと思ってくれていいわよ。あんたとしてもそっちの方がいいでしょ？」

「そりゃ願ってもないことだけどさ」

本当にそれでいいのだろうか、とアレンの中の良心っぽいものが躊躇いを見せる

いくら実力差があるとはいえ、これでは仮に勝負に勝ったところでアレン自身が納得出来ない可能性があった。いっそ同じように素手で戦った方がまだ負けたとしても納得が出来るのではないかと思えるほどだ

そんなアレンの葛藤を感じとったのか、赤髪は呆れたように

「あー、なんかひとつ誤解してるみたいだから教えてあげるけど」

「――え？」

予備動作は殆どなかった

赤髪は地面を蹴ると、一瞬消えたかと思うほどの速度で5メートルもの間合いを詰めた

ザンッと地面を踏み締める音。その音がアレンの耳に届いた時には赤髪は既にアレンの間合いに入っていた

アレンが驚きに声をあげる間もなく、赤髪は移動の速度を利用した右ストレートを放つ

完全に不意を突かれたアレンは一瞬で今から反撃に講じたところで間に合わないと悟り、咄嗟に両腕を交差させて衝撃を和らげようとする

「――がっ！？」

ドンッ！という衝撃が腕に走ったかと思えば、そのまま身体ごと数メートル弾き飛ばされアレンは倒れるように背中から地面に落下にした

ガードで殺しきれなかった衝撃分地面を転がり、ようやく止まった時にはガードした両腕は勿論のこと、その先にある肋骨や内蔵にまで激痛が走った

「――私は強いわよ？　多分あんたが思ってる以上にね」

聞きようによっては一種の驕りのようにも思える台詞だが、今の一撃はそれを裏付けるには充分過ぎた

「く、くそ……」

赤髪の拳をガードした腕は辛うじて骨まではいってないようだが、あくまでそれだけ。痛みに腕が震え木刀を握る手にも力が入らない。それどころか肋骨や内臓が呼吸さえもするなといわんばかりに痛む

だが、それでも木刀を杖代わりにしながらなんとか立ったのはひとえにアレンのプライドによるものだ

「あら、これも耐えるの？　一応手加減はしたつもりだけどさっきのよりは全然本気だったのに」

意外そうに。しかし、やや関心した要素をを含ませながら赤髪は言った

赤髪の立場からしてみれば今の一撃は大怪我させないように、かつ戦意を喪失させることが出来るギリギリのラインの攻撃だ

しかしギリギリといえど、直接その身に食らえば大の男でさえ気を失いかねない程の威力を誇る。当然アレンのような男に耐えられるはずがない――そう考えていた

「（でも現にこうして立ってるし、さっきのと今の不意打ちにもしっかり反応してた……うーん、防御に関してだけならそこそこってところかしら）」

ただの優男から少々認識を改める必要があるかもしれない、と赤髪は１０メートル程離れたところにいるアレンに向かって声をかける

「あんた、戦闘の経験はどのくらいあるの？」

「――ねぇよ」

「……え？」

アレンの答えに赤髪は信じられないといった表情を浮かべる

今、この男はなんと言った？

「だから生まれてこの方戦ったことなんか一度もないって言ってんだよ。今日この時までな。……あーもう身体中痛ぇし。昔母さんの高い化粧品を間違えてぶちまけた時以来だぞ命の危機を感じたのは」

あの時は修羅を見たぜ……とアレンは呟く

赤髪はそんなアレンを見て更に混乱する

「戦ったことがないって……まさかそれで私の攻撃を防いだっていうの？」

「これが防いだように見えるのかお前は。どう見ても満身創痍だろうが」

「本当に満身創痍だったらそんな軽口叩ける訳ないでしょ。……本当によくわからない奴ね」

酒場で交わした会話を思い出す。あのローブの少女は悪い人ではないと言った

その言葉通り確かに悪人ではない。それはこれまでのやりとりでなんとなく理解していた

実力は未知数だが、これでもし自分に勝つようなことがあるならばその時は――そこまで考えてから赤髪は首を横に振った

「（……何を考えてるのかしら私は。あの子は自分の手で護るって決めたでしょ）」

もう考えることはしない

赤髪は軽く息を吸ってからフッと吐き出し、足だけにしか使っていなかったその“氣”を身体全体に張り巡らせる

魔力とは違い純粋に鍛錬をこなした者しか使えないそれは赤髪の身体を覆うように広がり、ぼんやりとした光を放つ

ただそれは肉眼で確認することは出来ない。氣を目に集中させてようやく認識出来るものだ

現にアレンには赤髪がただ突っ立ってるようにしか見えていない

「……なんだ？」

アレンは赤髪からピリピリと肌を焼くような威圧を感じていた

今まで感じたことのない感覚に背筋に冷や汗を流す

「言っておくけど、次の一撃はさっきまでのとは比べ物にならないわよ」

スッと、重心と落として赤髪は構えた。その両目はアレンをしっかり捕らえている

決して冗談ではない。まるでそう体言するかのような威圧感だった

「本当はここまでするつもりはなかったんだけど、あんたが予想外にしぶといから仕方ないわ」

「……それは一応褒められていると受け取ってもいいのか？」

苦笑いを浮かべながらアレンは木刀の握りしめた

心音がはっきりと聞こえる。戦いの経験がないアレンでさえ、身体が、本能が、危険を察知していた

「……最後にひとつ聞いておきたいんだけど」

「……どうぞ」

「なんであんたは私達の仲間になりたいと思ったの？　別に私達じゃなくてもあそこは酒場なんだから仲間を捜してる連中なら他にいくらでもいたでしょ」

真意を確かめるように赤髪は真剣な表情でアレンに問い詰める

確かにそれは最もな疑問だった

だが、それ故にアレンは言葉に詰まった

「（ど、どうする……）」

出来れば一緒にいるだけでエロいハプニングが起きそうな感じの金髪ウェーブのスタイル抜群な美人の優しいお姉さんがよかった――なんて馬鹿正直に話せばどうなるかくらいアレン自身にもわかっていた

赤髪も顔こそかなり可愛い部類に入るが、スタイルに関しては悪い意味で年齢に相応しくない成長度合いで、ローブの少女に至っては顔すらわからない。しかし酒場で「仲間になりたいです！」と叫んでしまっただけに、今この場だけでも赤髪を納得させられるような理由が必要だった

「（考えろ。考えろ俺）」

普段あまり使うことのない脳をここぞとばかりにフル回転させ、1秒に1個のペースで理由を挙げては却下を繰り返す

そうして、１０秒程たっぷり沈黙してから

「お、お前みたいな可愛い子と一緒に旅がしたいなーと思って……」

「……」

「……」

空気が凍った

赤髪はおろか、ローブの少女までもがアレンを呆然と見つめていた

「（どうだ……？）」

恐る恐る赤髪の反応を確認する

「――ふ、」

「ふ？」

羞恥か、それとも怒りか、赤髪の顔が徐々に朱を帯びていく

そして顔も含め、頭全体が真っ赤に染まった頃

「――ふざけるんじゃないわよ！」

赤髪は叫んだ

身体全体に纏っていた氣が更に膨れ上がり、ドン、と赤髪を中心に半径3メートル程のクレーターを形成する

それを見て、今まで以上に感じる威圧感にアレンは思った

――やべぇ、選択肢間違えた、と

「一度でも仲間にしていいかもしれないと考えた私が馬鹿だったわ……やっぱりあんたは此処で抹殺した方が世の中の為ね」

「極論過ぎるだろ！　俺はただ自分の正直な気持ちを述べただけだ！」

正確には違うのだが、真意を話すわけにもいかない

「だとしたら余計に悪いわよ！　か、可愛いからとか……理由が不純過ぎるのもいいとこじゃない！」

「え、逆にこれ以上に純粋な理由ってなくね？　素直じゃん、欲望に」

「――死ね！」

そう言って赤髪は１０メートルもの距離をわずか一蹴りで詰め寄った

「ちょ、ま、ぎゃあああああああ！？」

先程と同じ右ストレート。しかし内包する威力は桁違いの一撃を、アレンは横に転がるように回避した

「なんで避けるのよ！」

「避けなきゃ本当に死ぬだろうが！　馬鹿かお前はってうおぁ！？」

文句を言う暇もなく、赤髪の追撃の飛び蹴りがアレンを襲う

――ドゴォンッ！

それも紙一重のところでなんとか避けると、アレンの視界に蹴りの衝撃でごっそり抉れた地面が映り込んだ

「あ、危ねぇ……なんだあの蹴り」

地面を自分の身体に置き換えてアレンは愕然とする

もしあの自然に優しくない蹴りを食らうことがあれば、そのときは間違いなくご先祖様と川越しにご対面することになるだろう

「ふ、ふふ……」

一歩一歩、ゆっくりと赤髪は近づいてくる

口元に笑みを浮かべながら

「（こ、怖ぇえええええええ！！　怖すぎなんですけどマジで！！）」

「さっきからちょこまかと……まるでゴキブリみたいに」

「せめてもっとマシなものに例えてくれませんかね！？　流石にイニシャルG扱いは酷いと思うんですよ！」

「そうよね。ゴキブリに失礼だったわ」

「全身全霊で俺に謝れ！」

「あーもう、ゴチャゴチャうるさいの――よっ！」

再び地面を蹴って、赤髪はアレンに迫る

「（くっ……！）」

次の一撃は避けることが不可能と本能的に感じ取ると、アレンは木刀を両手で握り直して迎撃体勢に入った

「無駄よ！　今度はそれごと叩き潰してあげる！」

赤髪の顔には防げるはずがないという自信が溢れていた。そして、恐らくそれは正しい判断である

いくら硬いといえど木刀は木刀。地面を抉るような氣の篭った一撃は流石に耐えられない

しかし、アレンもそれは重々承知の上だった

だから

「あれ、お前のスパッツ破れてパンツ見えてない？」

ひとつ小細工を入れてみた

「……へ？　嘘！？」

渾身の力でアレンを殴ろうとしていた赤髪は、その拳こそ止めなかったものの、ほんの数瞬アレンから目を離し、確認の為に自分の

下半身に目をやってしまう

それが、絶好の隙を作るとも知らずに

「――隙ありィ！」

キラリと目を光らせたアレンは、遅くなった拳を悠々とかわし、不安定な体勢の赤髪の足を払った

「なっ――」

仰向けに倒れていく途中で、赤髪はようやく騙されたことに気づくしかし、今更気づいたところでもう遅い

「どっせい！」

変な掛け声をあげながら、アレンは倒れ込んだ赤髪の顔――の横１０センチあたりに木刀を突き刺した

「そんな……まさか」

「俺の……勝ち、だよな？」

この瞬間、勝負は決着した

＊＊＊＊＊

「（――不思議な匂い？）」

「（はい。上手くは言えないんですけど今まで嗅いだことのない……なんていうか、他の人とは違う匂いがするんです）」

「（匂い……）」

「（なんでしょう……よくわからないんですけど、不思議と惹かれる匂いなんです。セリさんにはわかりませんか？）」

「（私はルゥほど特別な鼻を持ってるわけじゃないしね。そこまではわからないわ）」

試しにスンスンと匂いを嗅いでみるが、これといってルゥの言うような匂いはしなかった

だがルゥにはなんらかの匂いがするのだろう。彼女の鼻は自分とは違う。特別という表現も大袈裟ではない

「（あの……セリさん）」

「（どうしたの？）」

「（この人……旅の仲間を捜してるって言ってましたけど）」

「（今の女の人の話を聞いた限りではそうみたいね。……って、ルゥ、あんたもしかして……）」

「（いえ、あの、その……）」

「（……はぁ）」

なんともわかりやすい反応。それではもう答えてると同じことだった

「（あんな素性もわからない男を仲間にしたいの？　まさか一目惚れ？　あぁ、ルゥの場合は一嗅ぎ惚れって言うのかしら）」

「（ち、ちがいます！　そういうのじゃなくて！）」

「（冗談よ）」

慌てるルゥにさらっと告げる。フードで顔は見えないが、しどろもどろになっている様子は容易に伝わってきた

しかし、と赤髪――セリカは考える

この男の何がルゥをそこまで惹きつけるのだろうか。人とは違う匂いがすると言ったが、セリカにとってはぱっと見どこにでもいそうな優男にしか思えない

だが、それ以上に気になっていることがひとつあった

「（……わかってるの？　仲間にするってことはルゥの正体も明かさなきゃならないのよ？　それでもルゥはホントにこの男を仲間にしたいの？）」

「（それは……）」

確認の意味を込めて再度聞く

何故わざわざ目立つローブを着ているのか、そもそも何故旅に出ることになったか、仲間になるということはその全ての原因であるソレを説明しなければならない

本来ならばもう二度と口にしたくないはずのソレを、本当に見ず知らずの人間に

「（確かに怖いですけど……でも、この人なら大丈夫だと思うんです）」

何の根拠もない言葉。だが、その言葉にはしっかりとした意思が感じられた

「（……）」

普段はおとなしいくせに、こういう大事な時は自分の意見を真っ直ぐに突き通してくる

昔からの付き合い故に、こうなってしまっては何を言っても意見は変わらないことをセリカは知っていた

「（……わかったわよ。そこまでこの男にお熱なら仕方ないわね）」

「（せ、セリさんってば！）」

「（ただし一つ条件があるわ）」

「（……条件ですか？）」

「（そうよ。といってもルゥに対してのじゃないけどね。）」

ルゥが首を傾げる

「（……そうね。この男が私と闘って勝てばっていうのはどう？）」

元より素性も知らない人間。それも男を仲間にするというのだから、これがセリカに出来る最大限の譲歩だった。残念ながらこれ以上は譲れない

「（セリさんと……って、そんなの無茶に決まってるじゃないですか！　勝てっこないですよ！）」

ルゥはセリカの実力を知っている。だからこそ、この条件を提案した

セリカは自分の拳をギュッと握り締める

このご時世に女だけで二人旅が出来るのもこの強さがあってのこと。普通はこの男みたく仲間を集めたりして旅をするものだ

「（そんなこと言われても、仲間になる以上は私と同等かそれ以上の実力じゃないとどちらにしろ足手まといになるだけでしょ？　ルゥみたいに特別なことが出来るなら例外もあるけど）」

「（それは……そうですけど。で、でも、セリさんに敵う人なんて今まで一人もいなかったじゃないですか）」

「（これでもかなり譲歩してるのよ？　それともルゥがこの男を守る？）」

「（うぅ……わかってて聞くなんて酷いですよぅ）」

無理だとわかったのだろう。特別な力があるとはいえ、戦闘能力においてはルゥは一般人と何も変わらない。基本的には守られる立場だ

「（じゃあ決まりね。あとはこの男が本当に私達の仲間になりたいかどうかだけど……）」

「あ、あのー……」

都合よく、向こうから話しかけてきた

セリカは半ば相手の台詞を遮るようにして

「――そこのあんた」

「は、はい」

「本当に私達の仲間になりたいの？」

第3話　旅立ちの前に

「よっこらせっ……と」

力任せに突き刺したせいでやけに深々と刺さっていた木刀を引き抜く

「ほら、立てるか？」

何が起こったのかわからないような顔をしていたセリカに木刀を持っていない方の手を赤髪に差し出す

元々弾かれること前提で差し出したつもりだったが、セリカは思いの外素直にその手をとった

が、次の瞬間、何かに気づいたように口を開くと

「……手」

「手がどうかしたか？」

「どうしたも何も……マメだらけじゃないあんたの手」

軽く握っただけで、それは感じられた

何回もマメが破れ、更にその上からマメを作ったような分厚く硬

い手のひら。それは一朝一夕では決して出来ることのない、言わば努力の証

「マメだぁ？　そんなもん毎日素振りしてたら勝手に出来るだろうが」

しかし、アレンはそれがどうしたと言わんばかりに不思議な顔をする

幼い頃に絵本の勇者に憧れて、その時から今まで毎日続けてきた素振り

最も、ある程度成長した段階でそれは所詮絵本の中の夢物語であることに気づいてはいた。だが、その時には既に素振りは日常の一部と化していた

なので努力しているという感覚は全くと言っていいほどなく、セリカの反応についても意味がよくわからなかった

「……まぁ、いいわ」

そう言ってセリカは立ち上がり、身体に付着した土や砂をほろってから服を正す

「よくわかんねぇ奴だな」

「それはこっちの台詞よ。……はぁ、まさかあんな初歩的な罠に引っかかるなんて」

「で、結局勝負は俺の勝ちってことでいいんだよな？」

「……非常に不本意だけどね」

そっぽを向いて、セリカは答える

それを聞いて、アレンは安心したように地面にドサッと座り込んだ

「あー…疲れた……。ったく、慣れないことはするもんじゃねーわ」

「情けないわね。この程度でへばってどうするのよ」

「戦闘狂の基準で計られてもな」

「蹴るわよ」

「土下座で勘弁してやる」

第3話　旅立ちの前に

「――それで約束の件だけど」

「あぁ、俺が勝ったら仲間にしてくれるって奴か」

座るどころか大地に五体をぶん投げたままアレンは答える

「……勝負に負けた以上約束は守るわ。あんたは今日から私達の仲

間よ」

「その割には露骨に嫌な顔をなさっているように見えるんですが」

「……胸に手を当てて考えてみなさいよ」

「どれどれ」

むっくりと起き上がってから、セリカの言う通りにアレンは胸へと手を伸ばす

――ポフッ

「……へ？」

最初にセリカの蹴りを見たアレンのような、むしろその時と寸分変わらない声をセリカもあげた

確かにアレンの手は胸を触っていた

ただ、触っていたの自分の胸ではなく、セリカの胸だったというだけの話である

「な、な……」

「……おい、肝心の胸が見当たらねーぞ」

その瞬間、アレンは鳥になった

2秒後、鈍い音をたてて墜落した

「い、いきなり何しやがる……」

投げ→空中浮遊→着地という名の背中強打のコンボを喰らい、若干の呼吸困難に陥るアレン

「うるさい馬鹿！　うるさい馬鹿！　あーもう馬鹿！」

離れた場所でセリカは胸を両手で隠しながら、顔を真っ赤に染めてただひたすらにアレンに向かって罵倒を続ける

それをわけがわからないといった表情でアレンは見つめる

「あの……大丈夫ですか？」

「見ての通り全然大丈夫じゃないです……って、あれ？」

自然に返事をしたが、今の声はセリカのものではない

四つんばいのまま、アレンは頭だけ声が聞こえた方向に向ける

その視線の先ではローブを着た少女――ルゥが、心配そうにアレンを見つめていた

「君は……ぐふっ」

「せ、背中を打ってるみたいですから無理して喋らない方がいいですよ。ゆっくりと深呼吸して、呼吸を落ち着かせてください」

「スー…ハー…スー…ハー…」

言われた通りに深くゆっくりと深呼吸をする。すると、僅かにだが呼吸が楽になっていくのがわかった

それを何回か続けることで、ある程度周りを見渡す程度の余裕が出てくる

どうやらセリカにぶん投げられた際にこのローブの少女の近くに着地していたらしい

「落ち着きましたか？」

「おかげさまで。まだ背中はちょっと痛むけどね。君はあの赤髪と一緒にいた子だよね？」

「はい。離れた場所でお二人の戦いを見させてもらってました」

「それはわかったんだけど……どうして徐々に俺から離れていくの？」

「そ、それは……」

戦闘だけではなく、さっきのセリカとの一部始終を見られていたことをアレンは知らない

最も、離れていく理由はそれだけではないのだが

「ちょっとあんた！　ルゥに何やってるのよ！」

赤面タイムを終えて、セリカが二人のいる方に近づいてくる

そしてルゥを背中で隠すように、アレンの前に立つと

「大丈夫ルゥ？　コイツにトラウマ植えつけられたりしてない？」

「は、はい。特には」

「本当に？　無理してこの変態を庇うことはないのよ？」

「誰が変態だコラ。人聞きの悪いこと言うんじゃねぇ。その子とはちょっと話をしてただけだろうが」

「黙りなさい歩く性犯罪。あんたに発言権は与えてないわ」

まるで汚物を見るかのような目でアレンを一蹴する

「えっと……その人の言う通りです。その、セリさんが心配するようなことは何も」

「……どうやら嘘じゃないみたいね」

ルゥの身体を念入りにボディチェックしてから、セリカはようやく安堵の息をついた。一体それで何がわかるのかというアレンの突っ込みも当然無視された

「……だからさっきからそう言ってただろうが」

「いきなり人の胸を触ってきた人間の言うことなんて信じられるわけないでしょ！」

「胸ってお前。殆どないに等し」

「あの……あの人頭から煙出てますけど……」

「いいのよ。どうせすぐに復活するから」

うつ伏せのままピクリとも動かないアレンをルゥは心配そうに見つめていたが、殴った張本人であるセリカは全く気にしている様子はない

それでいいのかとルゥは思ったが、本当に1分も経たないうちにアレンは起き上がった

「超痛ぇ……中身出てるんじゃねぇのかコレ」

頭のコブを抑えながらアレンはぶつぶつと不満をこぼす

「さっきから煩悩垂れ流しのくせに何言ってるのよ」

「失礼街道まっしぐらな奴だなお前は」

そこまで言ってからアレンは言葉を止めると、何気なくセリカの背後にいたルゥに視線を向ける

しかし視線が合うと、ルゥはビクッと身体を震わせそのままセリカの背に隠れてしまった

「キモいから半径3メートル以内で呼吸するなって」

「嘘だろ。絶対嘘だろそれ」

と言いつつ、アレンは既に5メートル程二人と距離をとっていた

自分を介抱してくれた子が本当にそんな精神を叩き潰すような暴言を吐くとは思えないが念には念を、だ

「ほら、もう大丈夫よ」

アレンが自分から離れていることを確認すると、恐る恐るといった様子でセリカの背後から姿を現した

そのルゥにセリカはこっそりと

「（あのねぇ……一応ルゥから言い出したことなんだからもう少し頑張りなさい）」

「（す、すみません）」

「（……はぁ）」

その視線は自分の服――ギュッと、自分の服の裾を掴んでいるルゥを見て、セリカは溜息をつく

「（……やっぱり怖いんでしょ）」

「（……ごめんなさい）」

消え入りそうな呟き。だがそれはしっかりと耳に届いていた

セリカは二度目の溜息をついた。今度は己の不甲斐なさを悔いるように

「（仲間にする……ね。言葉にするのは簡単だけど）」

自分とこの少女が置かれている状況を考えれば、容易に口に出来ることではない

酒場にいた時に反対しておけば、自分に勝てば仲間にするとあの青年に言わなければ、……戦いに負けなければ

今になってそんな後悔がセリカの中に生まれる。だが、全てはもう終わってしまったことだ

「（セリさん……？）」

少女が不安そうな顔で自分を見上げる。もしかしたら気づかないうちに口に出していたのかと一瞬考えたが、どうやらそうではないらしい

……だがどちらにせよ、もう決めなければいけないことだ

「――ルゥ」

ひとつの決心をして、セリカは少女の名を呼んだ

＊＊＊＊＊

――15年前、ある人間の女と、ある亜人の男が恋に落ちた

それは、あってはならないことだった

禁忌、と人はそう呼んだ。人間に害なす魔物と交流を持つこと、ましてや恋に落ちることなど許されない――そう意味合いを込めて

だがそれは人間だけではなく、知能を持つ人型の魔物――亜人にとっても同じことだった。自分達を忌み嫌い、同属を滅ぼそうとする人間と恋をするなど、と

女には家族がいて友がいた

男には家族がいて仲間がいた

しかし、女は家族と友を捨て、男は家族と仲間を捨て、二人でいることを選んだ。生まれ故郷を離れ、大陸の端の名もなき小さな村に居を構えて、一生世俗と関わることなく暮らすと

それからちょうど1年後、二人の間に娘が生まれた。魔物でもなければ人間でもない。――後に“化け物”と呼ばれることになる娘が

娘が物心つく頃には両親から他の者と、特に人間と関わりを持ってはいけないと教えられた

疑問がないわけではなかった。しかし、優しい両親がいたおかげで寂しいと感じることはなかった

幸せ。そう言っても過言ではないほどに充実した毎日を過ごしていた

――だが、ある日突然その幸せは崩壊した

少女は１０歳になっていた

いつものように滅多に人が近づくことのない森で動物達と遊んだ帰り道。ふと村から焦げ臭い匂いと、血の匂いが少女の鼻を突いた

嫌な予感がして慌てて村に戻った少女の目に映ったのは、酷い惨劇だった

怒号。悲鳴。そして火の海

自分が生まれた村が賊に襲われている――そう理解するには幾許かの時間を要した

そしてその瞬間、少女は走り出した。自分の家がどうなっているか確かめる為に

少女の家は村から少し離れた場所にあった。なので、もしかしたらまだ大丈夫かもしれない――という淡い希望を持って

だが、その希望は見事に打ち砕かれた

振り下ろされる剣。上がる血飛沫

――少女の目の前で、両親は殺された

声にならない叫びをあげ、惨劇から目を背けるように、全て振り切るように、再度少女は走りだした。足の筋肉が悲鳴をあげ、肺が呼吸を拒否した。それでも走ることを止めなかった

何度も転び、しかし、その都度起き上がり、少女は走った

どのくらい走ったのかはわからなかった。目は霞み、疲れ果てた身体は気を抜けばすぐに地面に倒れ伏してしまいそうだった

その時、少女の視界に何かが映る

煙も上がっていない、悲鳴も聞こえない、血の匂いもしない、無事な村が

助かった、と少女は思った

事情を説明して身体を休ませて貰おうと、殆ど動かない足を引きずるように歩きその村へと足を踏み入れた

だが、一人の村人が少女を見るなり悲鳴をあげた

その悲鳴を聞いた集まった他の村人も少女を視界に入れた途端、明らかに顔つきが変わった

――あれは亜人か

――だが、あんな亜人は見たことがないぞ

――どちらにせよ人ではないだろう。見ろあの姿を

――まさか……禁忌の子

禁忌の子。その言葉に少女は聞き覚えがなかった

しかしその言葉が出た瞬間村人の間でざわめきが起こった

村の子供の一人が少女に向かって“化け物は出ていけ”と石を投げた

石は少女のすぐ横を掠めていった。しかし少女は微動だにしなかった

助けを求めていたことも忘れ、ただ、その場で立ち尽くした

――化け物

そう呼ばれて、少女はようやく両親の言っていた意味を理解した

人と関わってはいけない。何故なら自分は魔物でもなければ人間でもないのだから

あの子供が言ったように自分は“化け物”なのだから

他の村人も化け物は出て行けと少女に石を投げ始めた

村の男達が武器を持ち出した。少女――否、化け物を殺す為に

少女は三度走り出した。背後から男達の逃がすな、殺せ、という声が聞こえてきた

捕まったら殺される、その思いだけが疲労の限界を超えていた少女の足を動かした

しかし、それも長くは続かない

必死に男達を振り切ったところで、少女は力尽き地面にうつ伏せに倒れこんだ

不眠不休で走り続けていた少女の身体は、足どころかもう指1本動かすことも不可能な状態だった

頬に感じる土の感触

あぁ、ここで自分は死ぬんだ、と感じた少女は、自然に降りてくる瞼に抵抗を止める

そして――少女はゆっくりと目を閉じた

少女が目を覚ますと、見慣れない天井が視界に入った

死後の世界、そう考えていた少女は、思ったよりも現実的な光景に少しだけ自嘲した

しかし、自分の身体に不自然に巻かれた包帯と、自分が寝ているベッドに寄りかかって寝息を立てている赤髪の少女を見て、少女は目を見開いた

――どうなっている？

まさか、そんなことあるはずがない。しかし、でなければ自分が置かれている状況が説明出来ない

何故？

どうして？

――自分は生きている？

色々な疑問が少女の頭を過ぎった

だが、そうこうしているうちに赤髪の少女が目を覚ましてしまった

相手の目が自分を捕らえる。その瞬間、少女はあの村での記憶が蘇った

――殺される

一瞬で心拍数が跳ね上がり、反射的に身体が動いた

生きているか死んでいるかなど今はどうでもいい。とにかく逃げなければ殺される

だが、ベッドから飛び降りようとしたところで、ガクンと膝から崩れ落ちた

力が入らない。身体が言うことをきかない

赤髪の少女が自分に手を伸ばしてきた

怖い

嫌だ

怖い

嫌だ

怖い、怖い、怖い

――気づいた時には、その少女の腕に牙を立てていた

グジュリと牙が肉を貫通する感触があった。口全体に鉄臭い血の味が広がった

だが、赤髪の少女は声のひとつもあげなかった

視線を上げるともう一度目があった

――赤髪の少女は微笑んでいた

そして、もう大丈夫だからともう一方の手で、少女の頭を撫でた

まるで、母のような優しい撫で方だった

ちょっと待っててと赤髪の少女は少女一人を残し、部屋を出て行った

残された少女はベッドの上で呆然としていた

何が起きているのかわからない。先程まで浮かんでいた疑問や恐怖も消え失せていた

そのままどのくらい時間が経っただろうか

赤髪の少女は、皿を乗せた盆を手に戻ってきた。そしてそれをそのまま少女に差し出した

盆にはほんのりと湯気が立ち上っているスープと不恰好な形のパンが3個乗っていた

ゴクリと少女の喉が鳴った。食事などもう何日もロクにとっていない

赤髪の少女はそれを全て見透かしたように、遠慮はしなくていいと、少女に告げた

少女は恐る恐るパンを手に取り、噛り付く

――硬い。それに加えて口の中の水分を全て吸い取ってしまいそうなパサパサ感。今まで食べてきたもの比べると、とてもじゃないが美味しいとは言えない出来だった

だが

だが

両手にパンを掴むと、口一杯に詰め込んだ

用意されたスプーンを使わず、皿から直にスープを啜った

少女はまるで貪るように目の前の料理を口に運んでいく

赤髪の少女はそれを黙って見つめていた

――ポタッ

その時、少女の目からスーッと涙が一滴、頬を伝って皿に落ちた

両親を殺され、住む場所も失い、“化け物”と呼ばれ殺されそうになった

今まで平穏に暮らしていた少女に突如訪れた悲劇

１０歳の子供にとって、それがどれだけ辛かったことか

しかし、それでも零さなかった……零せなかった涙が、ボロボロと零れ落ちた

赤髪の少女は慌てた様子でどこか痛むのかと少女に問いかけた

声にならない少女は黙って首を横に振る

泣かれた理由がわからない赤髪の少女はよりいっそう困った表情を浮かべる

だが次の瞬間、意を決したように少女を抱きしめた

声をかけるようなことはせず、少女が泣き止むまでただひたすらに抱きしめた

少女が落ち着きを見せた頃、赤髪の少女はゆっくりとその口を開いた

名前はセリカ。年は少女より４つ上で両親は既に他界し今は一人暮らし。買出しの帰りに倒れている少女を見つけ、保護したのだと言った

見つけた時はかなり衰弱していて、正直助かるかどうかも微妙だったらしく、手当てをしてから二日間ずっと眠り続けていたらしい

それを聞いて少女は何度も頭を下げたが、こっちが勝手にやったことだからと赤髪の少女は笑っていた

その腕には包帯が巻かれていた。先程、少女が噛み付いたところだった

少女に見られていることに気づくと赤髪の少女は腕を背中に回した。そんなに深い傷じゃないから気にしなくていい、と

そんなはずはなかった

確かに牙は皮を裂き、肉を抉った。現に包帯には血が滲んでいた

――何故

少女はそう呟いていた

何故、気遣ってくれるのか

何故、自分を見ても悲鳴をあげないのか

何故、人でもない、魔物でもない、自分を助けてくれたのか

何故、こんな“化け物”を

そこまで口にしたところで、少女の額にバチン！と衝撃が走った

そのあまりの痛さに、少女は泣きそうな顔で赤髪の少女を見つめた

怒っていた。デコピンの構えのまま、赤髪の少女は怒っていた

人間じゃないからとか、魔物じゃないからとか

――禁忌の子だからとか

そんなものは一切関係ないと
助けたいと思うのに理由がいるのかと
赤髪の少女はそう言った
その瞳に揺らぎはなく、ひたすら真っ直ぐに少女を射抜いていた
少女は声が出なかった
赤髪の少女は少女が禁忌の子だと知っていた。その上で、少女を助けていた
そしてそんな少女をよそに、それに、と赤髪の少女は続けた
――こんな可愛い女の子が化け物なわけないでしょ、と

少女はまだ日も昇っていない時間に目を覚ました
結局あの後、またボロボロと泣き出してしまい、赤髪の少女に全てをぶちまけてしまった
するとまた抱きしめられた。よく頑張ったね、辛かったんだね、といつの間にか赤髪の少女も涙を流していた。そしてそのまま二人で泣き疲れて眠ってしまった

赤髪の少女の腕からなんとか抜け出して、少女はベッドを降りた

一晩経って、歩く分には問題ない程度に体力は回復していた

少女はベッドのすぐ横に畳んで置かれていた自分の服に袖を通す

土に汚れ、汗に濡れ、ボロボロになってしまった服だが、着ないよりはマシだった。何より上半身が包帯だけでは外に出ることすら出来ない

着替えてから少女は、赤髪の少女の方を振り返り

――ありがとうございました

起こさない程度の小さな声で、命の恩人に頭を深く下げた

直接お礼を言わずに去るのは気が引けた

赤髪の少女は気にしないと言っていたが、やはり自分は“化け物”なのだ

他の村人が起きてくる前にこの村を出なければ恩人に迷惑をかけてしまう

勿論行くあてはない。だが、此処にいてはいけない

迷惑をかけるのもそうだが、それ以上にこの赤髪の少女の優しさに甘えてしまいそうだった

少女は頭を上げた。そして、扉に向かって歩き出そうとした

――ガシッ

だが、少女の頭を抑える何かがそれを止めた

頭を抑えられ、振り返ることも出来ず、少女は困惑する

一体何が起きた

何故身体が前に進まない

――どこに行くの

背後からそんな声が聞こえた

まさか、と少女は思った

この場には自分ともう一人、赤髪の少女しかいない。そして今の声はその赤髪の少女のものだった

グルンと少女の身体が半回転した。そこには予想通り赤髪の少女が立っていた

一瞬少女は身体を強張らせたが、努めて冷静に、此処を出て行くと告げる

自分が此処にいては迷惑がかかる。自分を助けてくれた恩を仇で返すわけにはいかないと

だが赤髪の少女は、何馬鹿なことを言っているのと少女の決意を

一蹴した

そしてそのまま少女を抱きかかえるとベッドにポイッと投げた

欠伸を噛み殺しながら赤髪の少女はベッドに潜り込み、今度は放さないと言わんばかりに再び少女を抱きしめた

その間なすがままだった少女は、抱きしめられてから慌てて抵抗しようとするが、赤髪の少女の力は強く身動きひとつとれなかった

何のつもりですか、と少女は唯一自由な口で、赤髪の少女にそう言った

だが、そんな少女に向かって赤髪の少女はさも当然のように、あなたの家は此処でしょ、と言い放った

ドクン、と心臓が跳ねる

――嬉しい。素直に少女は思った

どんなに言い繕ったところで、本心だけは誤魔化すことが出来なかった

……しかし、だからこそ少女は唇を噛み締め、正気ですか、と言葉を発した

自分を――“化け物”を受け入れる。それはつまり人間である赤髪の少女まで“化け物”と同じ目で見られるということになる

石を投げられるかもしれない

武器を向けられるかもしれない
殺されそうになるかもしれない

そんなリスクを背負ってまで自分を此処に置いておく意味があるのか、と高ぶる感情を必死に抑えながら少女は赤髪の少女にそう言った

赤髪の少女は黙ってその話を聞いていた

少女は、わかったなら放してくださいと告げた

だが、その腕が緩むことはなかった

――なら、その全てから私が貴女を護ってあげる

意味が理解できなかった――というよりは、その言葉を心の何処かで否定していた

ありえない、そんなはずがない、と

禁忌の子を、化け物を、護る、と

――本当に、いいんですか

無理矢理搾り出した声は震えていた

――化け物でも、いいんですか

流れた涙がシーツに染みを作った

――私は、此処にいても、いいんですか

赤髪の少女はニッコリと微笑み答えた

――ええ、勿論

＊＊＊＊＊

「すみませんでした」

アレンは二人に向かって土下座をした

「そんな複雑な理由があったとも知らず、クソみたいな理由で仲間にして欲しいとか調子ぶっこいて本当にすみませんでした」

「……え、いえ、その」

ルゥは困った表情を浮かべる

いきなりの土下座もそうだが、何よりもアレンのその反応が予想外だった

自分が亜人とのハーフと知っても嫌悪感ひとつ見せず、それどころかこうして頭まで下げている

この人は少なくとも今まで出会ってきた人間とはどこか違う――そう思ってしまう程に、目の前の男は不思議な人物だった

だが、そう感じていたのは何もルゥだけではなかった

「（……これは一体どういうことなの？）」

殆ど聞こえない声でセリカはそう呟いた。その視線の先には額を地面に擦り付けて謝る男がいる

もともと、昔の話をしようと提案したのはセリカの方だった

その話を聞いて少しでもルゥを嫌悪する様子があれば仲間にするという約束はなしにする、と事前に決めていた

自分から吹っ掛けた勝負に負けた上に約束まで破るというのは正直気に食わなかったが、自分のちっぽけなプライドと少女を天秤にかけられるはずもない

それに、ルゥがハーフだと知れば向こうから断ってくるだろうと思っていた

――だが、その期待は良い意味で裏切られた

「……あんた、名前はなんていうの」

そう言うと、青年は土下座から正座に移行して

「アレン・フェンデと申します、はい」

「そう、アレンっていうのね。……じゃあアレンに今一度質問するわ」

「質問？」

アレンは首を傾げる

セリカは一度ルゥの方に視線を向けてから、アレンに向かって

「この子が亜人とのハーフ――禁忌の子と知っても、それでもまだ私達の仲間になりたい？」

ルゥの前では絶対に使わないようにしていた“禁忌の子”という表現を敢えて使って、セリカはアレンに問いかけた

もしここでアレンが首を横に振ったとしてもそれは仕方のないことだ。むしろ利口な判断と言えるだろう

セリカが聞きたかったのは、リスクを背負ってまで仲間になりたいかどうか、そしてその覚悟があるかどうかだった

ゴクリ、とルゥが息を飲む。セリカは真剣な表情でアレンを見つめる

「あ、うん」

……なんか、軽かった

第3話　旅立ちの前に（後書き）

足りない文才と少ない語彙でシリアスを書くなんて、我ながら無謀なことをしたと思っています

そして今後も何度か無謀な真似をするかと思われます

その時は生暖かい視線と冷たい言葉を浴びせてください

恐らく喜びます

第4話　少女と秘密と旅立ちと

その言葉に、いち早く反応したのはルゥだった

「……あ、あの」

「ん？」

初めて自分を見た人間は悲鳴をあげた。禁忌の子と知ると露骨に嫌な顔をした

しかし、この男からはそんな様子は見て取れない。それどころか何の躊躇いもなく仲間になりたいと答えた

「アレンさんは――私が怖くないんですか？」

当然、そんな疑問が浮かんだ

「あー…そのことなんだけど、正直言うとよくわかんないんだよね」

ボリボリと頭を掻きながらアレンは口にする

「わからない……？」

「確かにハーフって聞いて驚きはしたんだけど、こうして話してる分には普通の女の子としか思えなくてさ。それによくよく考えたら

俺ハーフの子に会ったのって初めてだから、そもそも怖いとかそれ以前の話なんだなこれが」

「……私と一緒にいると危険な目に遭うかもしれませんよ」

「その時はあれだ。そこにいる赤い奴に俺もついでに護ってもらう。あいつなら俺一人くらい増えても問題ないだろうしな」

しかし、そんなのは些細な問題だと言わんばかりに、男はケラケラと笑っていた

――あぁ、そういうことか

少女は気づく

何故、今日初めて会ったはずの男を仲間にしたいと思ったのか

不思議な匂いに惹かれたというのもあるが、今思えばそれも単なるきっかけに過ぎなかった。本当はとっくにわかっていたのだろう。ただ、今の今まで気づかなかっただけで

真っ直ぐで、純粋で、そして、自分に向けたその笑顔

――似ていたのだ。自分を暗闇から救い出してくれた、あの赤い髪の少女に

「クスッ」

いつのまにか、少女は笑みを洩らしていた

「――セリさん」

「あーあー、皆まで言わなくてもわかってるわ」

もう好きにしなさいと手をひらひらさせる。それは不器用な彼女なりの応援だったのかもしれない

「ありがとうございます」

背を向けてしまったセリカに、少女は小さくお礼の言葉を述べた

そしてもう一度アレンの方に振り返ると、ボケーッとしているアレンに一呼吸置いてから

「遅くなってしまいましたけど――これからよろしくお願いします」

ペコリと頭を下げた

第４話　少女と秘密と旅立ちと

「――人狼（ワーウルフ）？」

「そうよ。名前くらい聞いたことあるでしょ？」

「全然！」

「威張って言うことじゃないんだけど」

仕方ないわねと溜息をつきながらセリカは今口にしたワーウルフについての説明を始める

此処、ガランド大陸から極東に位置する小さな島、セルク島。ワーウルフはそこで集落を作りひっそりと暮らしている亜人である

人と変わらない知能を持ち、人と同じように畑作や狩猟で生活をする。戦闘能力は知能が高い分そこらにいる魔物よりずっと上だが、決して好戦的な性格ではなく、むしろ平和を好む傾向にあり、その為にわざわざ誰もよりつかないようなセルク島で暮らしているとも言われていた

「……なるほど。で、ルゥちゃんがそのワーウルフとのハーフってわけか」

ふんふんと、セリカの説明を聞いてアレンはしきりに頷く

「正確に言うとワーウルフの中でも数が少ない白狼種とのハーフね」

「白狼種つーことはなんだ、毛が白いのか？」

「それは口で説明するより実際に見た方が早いわ。――ルゥ、本当に大丈夫？」

「は、はい」

そう答えて、ルゥは自分の顔を隠しているローブのフード部分に手をかける

――気になっていなかったと言えば嘘になる。しかし、少女に無理強いをさせてまで見たくはないというのもまた事実だ

話を聞いた限りでは、人と違うその姿が少女を苦しめているということだった。ローブで身体を隠しているのもそのせいだろう

だが、意外にもルゥ自身がアレンに見て欲しいと言った。セリカはあまり気乗りしていない様子だったが、ルゥの決意に押され渋々と承諾する形になった

そして、現在に至る

「おおう……なんかドキドキしてきた」

「一応言っておくけど、もし一瞬でもルゥを傷つけるような態度をとったら……わかってるわよね？」

「なんか別の意味でもドキドキしてきた」

もの凄く殺気が込められた拳を向けられながらも、少女の決意を真正面から受け止める為にアレンはルゥから目を離さない

ゆっくりと、フードに隠された少女の顔が顕わになっていく

――ファサッ

「……ど、どうですか？」

フードを全て捲り、不安そうな表情でルゥは恐る恐るアレンに問

いかける

だが、今のアレンにはその言葉は届かなかった

透き通るような白い肌にパッチリとした目と長い睫。うっすらと通った鼻筋の下には申し分程度にあるような小さく薄いピンクの唇。セリカの言葉通り髪は白く肩の辺りで切り揃っていて、その頭にはワーウルフとのハーフであることの証拠として、白い毛に覆われた耳がぴょこんと自己主張するように存在していた

１０人中９人が微妙な反応を示す程度のかっこよさのアレンだが、この少女はまず確実に１００人中１００人が可愛いと答えるほどに整った顔立ちをしていた

「……」

アレンは無言でルゥにスタスタと近づいていくと、そのままルゥに向かってバッ！と頭を下げた

「え、え？」

「ちょっと、何をして――」

二人の困惑を他所に、アレンはそのまま右手を差し出して

「僕の義妹（いもうと）になってください！」

「あの……流石にあれはまずいんじゃ……身体半分地面にめり込んでますけど……」

「見ちゃだめよルゥ。やっぱりあいつは色々と駄目だわ。なんていうかもう駄目だわ」

ルゥの手を掴みその場を離れようとするセリカだったが、それよりも早くアレンはむくりと起き上がった

「いやースマンスマン。ルゥちゃんがあまりに可愛いもんだからつい我を見失っちまった」

「なんでアレを喰らって立ち上がれるのよ……」

半分殺ってしまうつもりで殴った筈の男は何故かピンピンしていた

「えっと……はい。ちょっと驚きましたけど、もう大丈夫です」

ほんのり顔を朱に染めながらルゥは答える

「じゃあ改めて……。僕の義妹に」

「改めてじゃないわよ。少しは自分を改めなさいよ馬鹿」

「だってお前考えてみ？　ハーフって言うからもっと亜人寄りの子かと思ってたら、実際はただの耳ついた可愛い女の子だったんだぞ？　しかも耳が逆にその可愛さを引き立ててるとか……健全な男なら義妹になって欲しいと思うのは当然ことだろ」

「世の中の健全な男達に謝りなさい。あとルゥもこんなことでいちいち顔赤くしないの」

「す、すみません」

「真っ赤な頭してるお前がそれを言うのか」

「髪は関係ないでしょ！」

ギャーギャーと言い合いをする二人だが、ルゥは一人心中穏やかではなかった

「（ただの女の子……それにこの耳を可愛いって……）」

人間でも亜人でもない自分を見て、そしてその象徴であるこの耳を見て、そんな風に言った人間は、今までセリカくらいしかいなかった

大抵の人間は恐れ、悲鳴をあげ、敵意を向けてきた

しかし、この男は違った。健全な男全員がそうするのかどうかはわからないが、自分に義妹になって欲しいと言った

敵意を向けられることに慣れてはいても、こうして異性に直接的に好意を向けられることは父親を除けば生まれて初めての経験である

故に、ルゥは照れていた。そしてそれを理解してしまうと、白い肌がより一層朱に染まった

「わふぅ……」

顔の熱を吐き出すようにルゥは息を吐いた

「あ、そういえばさ」

「ひうっ!?」

突如目の前に現れたアレンの顔に、驚きのあまりしゃっくりのようなものが出てしまった

「どどど、どうかしましたか？」

「ルゥちゃんって尻尾はついてないの？」

「……し、尻尾ですか？」

「うん。耳がついてるんだから尻尾はないのかなーって」

「尻尾はその……普段はありません」

普段？とアレンは聞き返す

「はい。お父さんなら通常の状態でも尻尾はあったんですけど、私はハーフなので、特別な時というか……獣化した時じゃないと生えてこないんです」

――獣化。その言葉にはなんとなく聞き覚えがあった

ワーウルフだけではなく殆どの亜人に備わっている能力で、亜人の種類にもよるが、人型から獣型に変化することを指す。牛型の亜

人ならば、獣化すればよりその姿は牛に近いものになり、ルゥのように狼型の亜人ならばより狼らしくその姿を変えるらしい

尤も実際に見たことはないので詳しいことは不明だが

「じゃあ、もし今俺が獣化してみてって言ったら獣化してくれる？」

「それは構いませんけど……そんなに尻尾が見たいんですか？」

「尻尾っていうか、ルゥちゃんの全部を見てみたいかなって」

意味をどうとるかによって恐ろしく危ない発言を、至って真面目にアレンは口にする。当然、アレン自身はそのことに全く気づいていない

そして、そういう意味で捉えてしまったルゥは「ふぇ！？」と裏声気味に声をあげた

「あああああああアレンさん？　ほ、本気で言ってるんですか？」

「勿論。あああああああアレンさんは本気です」

真っ直ぐに向けられた視線。それが余計にルゥの羞恥心を加速させる

「（うぅ……全部って…全部って……）」

思考回路は既にショート寸前だった。顔も熱を持って仕方がない

と、ここでようやくアレンがルゥの異変に気づく

「あれ、なんか顔赤いけど大丈夫？」

気づくといっても所詮この程度である

真っ赤になって俯いてしまった少女を心配するだけ――と言ってしまってはあれだが、それでも、自分のせいでこうなったとはアレンは夢にも思っていない

「……二人してなにやってんの？」

所謂ひとつのカオス状態と化した空間に、怪訝そうな顔をしながらセリカがやって来た

「せ、セリさ～ん……」

そんな救世主の登場に、ルゥは思わず情けない声をあげてその背中に抱きついてしまう

「な、何？　どうしたのルゥ？」

「……（フルフル）」

無言で首を横に振る。説明しようにも恥ずかしさが勝って、上手く言葉に出来ない

しかし、となると必然的にセリカの注意はアレンの方に向くわけで

「……ちょっと、あんた一体ルゥに何したのよ」

「いきなりそうやって殺気剥き出しにするのは良くないと思います。あと俺は何もしてません」

「何もしてないのにルゥがこうなるわけないでしょ。今なら怒らないであげるから正直に言ってみなさい」

「ぜってー嘘だそれ。俺そう言って怒らなかった奴見たことねぇし。ってか本当に何もしてないんだってば。ただルゥちゃんに獣化してみて欲しいって頼んだだけで」

「それは本当なの？」

セリカは首だけ後ろに回し、そこにいる少女に真相を尋ねる

「……はい。本当です」

「俺の言葉は信用ゼロですかそうですか」

「それじゃあ何でルゥはこんな風になってるのよ」

「それは俺が聞きたいくらいなんだがな」

不満を垂れながらアレンはルゥに視線を移す

恥ずかしがってるのか怯えてるのかわからなかったが、原因という点で考えるならば自分以外には思い浮かばない

だが、数分前のやりとりを思い出してみてもこれといって原因らしきものは見つからない。だというのにルゥはセリカに抱きついたままである

「（でもこのままだとまたセリカの鉄槌が降ってきそうだし……あ、そうだ）」

脳天に蘇る鈍痛を思い出しながら、アレンは適当に置いてあった自分の荷物をゴソゴソと漁り始める

しばらくして、お目当ての物を見つけたアレンは、それを手に取りルゥに近づいていくと

「はい」

「……これは？」

差し出された“ソレ”にルゥは小首を傾げる

「見ての通り、帽子です」

アレンが差し出したのは黒い帽子だった

毛糸で編みこまれているらしいソレは装飾らしい装飾はなく、良く言えばシンプル、悪く言えば地味な作りだった

「この帽子がどうかしたんですか？」

キョトンとアレンを見返して、誰しもが持つであろう疑問をルゥは口にする

「ルゥちゃんにあげる」

「え？」

「いや、うん、まぁ、それが当然の反応だよね。でもちょっと騙された思って一回被ってみてくれないかな？　俺のだからちょっと大きいかもしれないけど」

「あ、はい。わかりました。よいしょっ……あわわ」

言われるがまま帽子を受け取り被ったルゥだが、大きめの帽子はそのままルゥの顔半分をすっぽりと覆い隠してしまう

「ほらほら、何やってるのよ」

セリカが帽子の端を折っての顔を出す。その光景はなんとなく微笑ましかった

「これでいいですか？」

大きめの帽子を被り、上目遣いでルゥはアレンを見つめる

「（なんだこの可愛い生き物）」

持てる理性をフル動員して抱きしめたくなる衝動を押さえ込みながら思ったよりも上々の結果にアレンは満足気に頷く

大きめの帽子はすっぽりとルゥの頭を包み込み、伸縮性のある素材で耳の部分も自然な感じで隠されていた

「あら、なかなかいいじゃない。耳も不自然じゃないし似合ってるわよ」

「自分では見えないのでよくわからないですけど……そうなんですか？」

「大丈夫。俺が証人になってあげるから」

「そうなると一気に信憑性が薄れるわね」

「お前ホントなんなの？　俺を扱き下ろさないと死ぬ病気かなんかなの？」

そう言いつつも、アレンの注意はルゥに向いている

幸い、先程までの動揺した様子はなく、現在ルゥは帽子越しに確認するように自分の耳を触っている

「（うん。なんかセーフっぽい）」

二人に気づかれないように、そっとアレンは安堵の息を吐く

自分でも感じる程に不自然な話題の切り替え方だったが、それでも結果だけ見ればなんとか及第点と言えるのではないだろうか

原因は未だ不明だったりするが、とりあえずそのへんのことに関しては今は置いておこう。別に考えるのが面倒だからとかそういうことは決してない

「でもなんでいきなり帽子なわけ？」

ルゥが離れたことにより、自由になったセリカが片手でルゥの頭

を撫でながら不思議そうに告げる。ルゥも口にはしないが、セリカと同じような表情でアレンを見つめていた

もしこれが考えなしの行動ならアレンも言葉に詰まっていただろうが、そこまで先を見ずに話題を変えたわけではない

「まぁ待て、それにはちゃんと理由があるんだ」

アレンは予め用意していた答えをそのまま二人に向かって話す

現在ルゥが着ているローブはどう見てもサイズが合っていない。手は殆ど隠れてしまっているし、歩くときも裾を引きずるようにしていた。何故身体に合ったサイズを着ないのか、一見そう思わせるが、耳を隠すという目的があるのならばそれも納得出来るというものだ

ローブには比較的大きめの――身体に合ったサイズでも下手すれば目元が隠れてしまいそうなくらいのフードが装飾されている。そして恐らく、ルゥが大きめのローブを着ている理由はそこにある。1サイズも2サイズも上のものならば、ただでさえ大きいフードは更に大きくなり、耳を隠しても違和感がなくなるのだろう

現に酒場では注目こそ浴びていたものの、耳が隠されていると感づいた人間はいないはずだ。……レイラに関しては確信は持てないが

「その帽子を被ってたらルゥちゃんは普通の女の子にしか見えないし、酒場とかでも変に注目されなくて済むだろ？」

「確かにこれなら問題はなさそうだけど……なんか上手く誤魔化されたような気がするのよね」

「ソンナコトナイヨ。キノセイダヨ」

「……それならいいけど」

微妙に納得がいかないような顔をしていたセリカだが、それ以上追求はしてこなかった

「あの……本当にコレ貰ってちゃってもいいんですか？」

「全然構わんのですよ。ルゥちゃんに被ってもらった方が帽子も喜ぶだろうし」

「そ、そんなことは……でも、ありがとうございます」

恭しく少女は頭を下げる。それだけでアレンの心は温かいものでいっぱいになった

「……なぁ、セリカ」

「なに？」

「ルゥちゃん抱きしめてもいい？」

「駄目に決まってるでしょ」

だ、そうだ。悔しい

＊＊＊＊＊

――ザリッ

踏み締めた土の音が妙に耳に響く

だがそれも当然といえば当然なのかもしれない。なにせこれから（なし崩しとはいえ）旅に出るのだ、緊張しないはずがない

特に目的もなく（やらなければいけないことはあるらしい）これといった大きな野望も（野望自体はあるのだが、旅自体には何の関連性もない）が、いざ旅に出るとなれば多少なりとも心が躍ってしまうのが男の子である

振り返れば住み慣れた街が見える。旅に出てしまえばしばらくはこの光景を見ることは出来ない。レイラのホットミルクも帰って来るまではお預けだ

「ほら、ボサッとしてると置いてくわよ」

セリカは慣れた様子で街を後にしようとする。その隣を歩くルゥはローブからミニスカートと襟付きのシャツといったシンプルかつ可愛い服に着替えていた。勿論先程あげた帽子は着用済みである

「あぁ、今行くよ」

最後にちらっとだけ街を一瞥して、二人の後を追う

これから何が起きるのかは全く予想はつかないが、こうして可愛い仲間と頼れる仲間が出来た今、多少の困難はあれどもなんとか乗り越えられるだろう――って

「本当に置いてかれてるぅっ！？」

二人の姿は既に豆粒ほどになっていた

俺達仲間……なんだよね？

第5話　茶色の洗礼

「そういえば俺達は何処に向かってるんだ？」

街を出て道なりに1時間。今まではなんとなくボケーッと二人の後ろを歩いていたアレンだが、ふと気になったのでセリカに話しかける

「次の街はえっと……なんだっけルゥ？」

「今は南下してる最中ですから、このまま行けば次はアスタールですね」

地図を見ながらルゥが答える

「じゃあ結構まだ歩きそうだなー」

アスタールまでは馬車で2時間ほど掛かる。今の歩くペースならば恐らく到着する頃には日が暮れているだろう

日はまだ高い。初夏とはいえ、照りつける日光のせいで歩いているだけで汗が出てくる

時折パタパタと服の胸元をから風を送りこみながら、アレンはルゥの頭の帽子に意識を向ける

「（……暑くねぇのかなアレ）」

自分で渡しておいてとんでもない言い草だが、ルゥからは特に暑そうな様子は見受けられない

しかし、それも言ってしまえば当然のことである。ルゥはアレンに出会うまで頭までこの日光の下、すっぽりと身体全体を覆うローブを着ていた。言わば一人蒸し風呂状態。涼しいと感じることはあっても、この程度で暑いと感じることはまずないのだ

だがアレンはその事実を知らない。そして女性二人が文句も言わずに歩いているのに自分だけが弱音を吐くわけにはいかない、という無駄なプライドが水分補給の手すらも鈍らせる

その結果

「……大丈夫ですか？」

「だ、だいじょばないかも……」

歩いている途中にぶっ倒れ、木陰でルゥに介抱されることとなった

第5話　茶色の洗礼

そんなこんなで男のプライドを地面に力の限りたたき付けるような真似をしつつも、アレン一行は無事にアスタールへ到着していた

「おぉ、此処がアスタールか」

北門を入って少し歩くと街の中心部らしき広場に出た

此処に訪れたのは十数年振りになるが、幼少の頃の曖昧な記憶と殆ど変わっていない。辺りをぐるりと見渡してみると、前の街と同じで石畳で整備された道に木造の建造物が多く建ち並んでいた

「前の街もそうだったけど、アスタールも思ってたより大きな街なのね」

「この辺りは森や川といった資源が豊富なので自然と街も大きくなるんだと思います」

「へー、そうだったのか。言われてみれば確かに近くに大きな川があったような気はするな」

「それでこれからどうする？　適当に街でも見て回る？」

街並みを見渡しながらセリカは提案する

「次の街までは半日以上歩かないといけませんから、とりあえず今日は此処で宿をとりましょう。アレンさんもそれでいいですか？」

「あ、うん。二人に任せるよ」

「じゃあ決まりね。早速宿屋に向かいましょ」

青年移動中……

「ぷへー。疲れたー」

ベッドに全身を投げ出すと自然にそんな言葉が漏れた。普段あれだけ歩かない分、自分が気づかないうちに疲れが溜まっていたのかもしれない

アレンに宛てがわれた部屋はベッドと電灯が置かれたサイドテーブルのみのシンプルかつ質素な造りの部屋。一泊素泊まりで１５００ゴールドだが、あまり宿屋を利用したことはないので値段の高い安いは判断がつかない

「なんていうか……旅してるって気分だなぁ」

天井と相対しながら改めて自分が置かれてる状況を認識する。生まれ故郷の街を出発した時は漠然としたイメージしかなかったが、一旦気持ちが落ち着くと色々な感情が浮かび上がってきた

突然両親から言い渡された旅に出ろ通告。そして激闘……自分にしてみれば激闘の末、仲間になったセリカとルゥ。思い返してみれば今日一日だけでもかなり濃い内容だったのではないだろうか。少なくともダラダラ生活していた昨日までとは一転した状況に置かれている

「旅に出ろって言われた時は驚いたけど、よくよく考えてみればこれもいい機会だったのかもしれないな」

自分でもよくわからないが、今は満ち足りた気分になっていた。
これからの旅路に不安はあれど、それ以上の楽しさやワクワク感もある

だからといって、あの父親を許すわけではないが

「……なんかテンション上がってきた」

高ぶる感情を抑え切れず、つい枕を抱き抱え「うおおおおおおっ！」とローリングオンザベッド

「……なにしてんの」

「ぬぉっ！？」

そして気付けばセリカがいつの間にか部屋にいて、かつ冷たい視線をこちらに向けていた

「そろそろいい時間だからご飯食べに行こうって誘いにきたんだけど……どうやらお取り込み中だったみたいね」

「待って！　お願いだから俺の話聞いて！」

何事もなかったかのようにそのまま立ち去ろうとするセリカに縋り付く勢いで懇願する

「私に触らないでくれる？」

「確かにどっからどう見ても奇行以外の何物でもなかったけど！

もしかしたら何か事情があったかもしれないだろ！？」

「どんな事情があろうと奇声をあげながら枕と抱き合ってベッドを転がり回ってる時点でアウトよ」

「返す言葉もない！」

不注意が招いた惨劇。これ以上は言い訳のしようがなかった

「どうかしたんですかー？」

扉越しに聞こえるルゥの声。唯一の救いは奇行を見られたのがセリカだったということだ。これがもしルゥだったらアレンは二度と立ち直れなかっただろう

「じゃ、ルゥを待たせるのも悪いし私は行くわね。あんたはそこで延々枕と愛を語り合ってなさい」

「枕だけにピロートークってか？　あはは中々に上手いこと言うじゃないか」

「……」

「ごめんなさい調子に乗りました。俺も連れてってください」

道中、何かあったのかと純粋な瞳で問いけてきたルゥに部屋にG様が出ただけと誤魔化しつつ、三人はこの街で一番料理が美味しいという酒場にやって来た

夕食時という時間のせいもあってか店内は割と混んでいて、5分ほど待たされてようやく座ることができた

「いらっしゃいませー。ご注文はお決まりですかー？」

「とりあえず此処のオススメの料理と肉料理。あと水を3つずつね」

テーブルにつくとセリカはメニューも見ずに注文を取りに来たウェイトレスに注文していく。そういえば初めて会ったの時もこんな感じだったな、とアレンは一人思う

「随分と手慣れてるんだな。メニューは見なくてよかったのか？」

アレンは手にあるメニューの存在理由の有無を尋ねる。紙のくせにどことなく寂しげに見えるのは果たして気のせいなのだろうか

「私は特に好き嫌いもないし、ルゥも肉料理が中心だから基本はこんな感じね。あ、もしかして何か食べたいものとかあった？」

「いんや。ただなんか一連の流れがカッコイイなーと」

「カッコイイ？　私が？」

「うん、なんか手慣れてるって感じがしてさ。初めて来たのに常連の風格があるんだよ」

アレンがレイラの店でホットミルクを頼む時に「いつもの」で通るようになったのは実は割と最近のことだ。それまではちゃんと逐一注文してたし、あそこでご飯を食べる時もさっきのセリカのよう

にメニューを見ずになんてことはせず毎回何を頼むか迷っていた記憶があった

「風格ねぇ……よくわからないけど、旅をしてたらこんなの自然と身につくわよ？」

「マジでか。メニューと睨めっこを続ける日ともおさらば出来るのか」

「それはただ優柔不断なだけじゃないかしら」

的確過ぎる意見だった

それからしばらくするとアレン達のテーブルに料理が運ばれてきた

「……セリカさんや」

「なに？」

ウェイトレスの手によって順番にテーブルに並べられていく料理の数々。記憶によると確かセリカが頼んだのはオススメ料理と肉料理だったはずだ

しかし

「妙に肉々しいラインナップなんだけど」

見渡す限り肉一色のテーブル。ウェイトレスの説明によるとオス

スメ料理がチキンの香草焼きで肉料理がローストビーフらしい

「失敗だろ。明らかな失敗だろコレ。なんか茶色成分多いもん。テーブルの色含めて」

香ばしい匂いのするチキン、オリジナルソースがかかったローストビーフ。どちらもかなり美味しそうではあるのだが、いかんせん品目が偏り過ぎている。今日は肉祭か何かですかと聞きたいくらいだった

「仕方ないじゃない。オススメが肉料理だったなんて知らなかったんだから」

「だからメニュー見ておけばよかったのに……見てるだけで胸やけがするぞ」

「だらしないわね。ルゥを見てみなさい。すっごくいい顔してるわよ？」

「おいおい、そんなはず……」

言葉途中にアレンはルゥに視線を移す

「わぁ……！（歓喜の表情）」

「……」

あった。凄く目がキラキラしていた

「（え、なに、どういうことなのこれ。この一面に広がる肉野原を

見てなんでそんな顔が出来るの？）」

「（この子がワーウルフだって最初に説明したでしょ。人間だけどこの子は狼でもあるのよ）」

ルゥには聞こえない程度の声でセリカが説明をする。そしてそれをアレンは自己分析して

「（……ということは、なんだ。もしかしてルゥちゃんって肉料理が好きなのか？）」

「（もしかしなくても大好きよ。それこそこんな風に目を輝かせるくらいね）」

そういえばレイラの店でもステーキを見たルゥが今と同じような反応をしていた。あの時はそこまで気にしてなかったが、なるほど、そういう理由があったのかとアレンは納得する

「どうしたんですか二人とも？　料理が冷めないうちに早く頂きましょう」

目の前の好物に待ちきれない様子でルゥが急かしてくる

それは本当に年相応な子供のようで、アレンは優しい気持ちになったが、それと同時に焦りも生まれた

「（お、おい、どうするよ？）」

「（どうするも何も我慢して食べるしかないでしょ。それともルゥを待たせることになるけど新しい料理を注文する？）」

「（それは……）」

チラリとルゥを横目で拝見

「～♪～♪」

フォークとナイフを手に鼻歌という無邪気さと可愛さの共演中のルゥに、アレンは自然と頬の筋肉が緩んでいくのを感じた

「（……無理です。色々な意味で）」

「（でしょ？）」

完全なる敗北。ある意味セリカよりもルゥは強かった

仕方ない、と観念してアレンは頭を垂れる

「じゃ、食べましょ。もう食べていいわよルゥ」

「はいっ！」

言葉と同時にルゥがフォークをチキンの塊に突き立てる。それはもう清々しいくらいにグサッとザクッと

そしてそのまま一気に小さな口へと

「あむっ」

当然入りきらない。それもそうだ。男の手のひらサイズよりやや

大きいチキンがあの小さな口に収まるはずがないのだ

だがルゥはそんなことお構いなしという感じで、ただひたすらに口に肉を詰め込んでいく

「そんなに慌てて食べなくても誰もとらないわよ」

「セリふぁん！　ふぉれおいふぃれふよ！」

「はいはい、わかったからもう少しゆっくり食べなさい。喉に詰まらせるわよ？」

「――んぐっ！？」

「なんであんたが詰まらせるのよ。……ほら、これでも飲んで」

セリカから手渡された水を一気に煽る

「んぐんぐ……っぶはぁ！　た、助かった……！」

「全く……あんたがそんなんじゃルゥに示しがつかないじゃない」

「悪い悪い。でもルゥちゃんの言うとおりこのチキンかなり美味いぞ。セリカも一口食べてみ？」

「私は自分のペースで食べるから大丈夫よ。それより気をつけて食べなさい」

「へーい」

今度は慎重に先ほどより小さく切り分けてチキンを口に運ぶ

口に入れた瞬間に広がる香草の風味がその後にやってくるチキンの香ばしさを更に引き立てる。流石にオススメ料理というだけはあって絶品だった

と、そうこうしているうちにルゥは早くもチキンを食べ終え、ローストビーフへと手を伸ばしていた

「あ、これも美味しいです♪」

またも右手のナイフは使わず左手のフォークだけで器用かつ豪快に食べている

もしかするとあのナイフは好物を獲られないようにする為の武器なのだろうか、と勘違いしてしまいそうだった

「ルゥ、ほっぺにソースついてるわよ」

「え、どこですか？」

「そっちじゃなくて反対。あぁもう、私が拭いてあげるからじっとしてて」

セリカはナプキンをさっと取り出しルゥの頬についたソースを丁寧に拭いていく。ルゥはその間微動だにせず、セリカのなすがままになっている

「はい、綺麗になったわよ」

「ありがとうございます」

「……」

目の前で繰り広げられる二人の世界にやや置いてけぼりのアレン。別に寂しいとかそういうわけではないが、なんというかこう……口では説明出来ない何かがあった

「……ん？」

そこでふと感じる視線。……いや、これは自分に向けられているようで実はそうではなかった

「むぐむぐ……（チラチラ）」

ローストビーフを口に含みながらも、ルゥの視線はある一点に向いている。その視線の先にあるのは……アレンの目の前に置かれたチキン

どうやらアレンが感じた視線はルゥのものらしかった。本人はばれないようにやってるつもりなのかあくまで横目でチラッと見るだけなのだが、見られてるほうからすれば露骨に視線を感じるわけで

「あーん」

とアレンがチキンを口に運ぼうとすると

「……（ピクッ）」

ルゥの肩がわずかに動く。いったん手を下げてもう一度口に運ぼ

うとするとまたルゥの肩がピクッと動く。セリカに対しても同じ行動をとっているが、セリカはそのことに気づいていない

「（というかこれは……もしかすると、もしかするよな？）」

手を止め、アレンは試しとばかりにチキンが刺さったフォークをルゥに差し出して

「……食べる？」

「え、……い、いいんですか？」

予想通りの反応が返ってきた

少々申し訳なさそうにしながらもその視線はしっかりとチキンに向けられているところを見ると、ローストビーフより、こちらの方がお気に入りらしい

「うん。ほら、俺にはちょっと量が多いからさ。手伝ってくれるとありがたいかなって」

勿論量が多いなんてことはない。確かに大きいことには大きいチキンだが、それでも平凡な胃袋を持ってさえいれば食べきれる量である

しかし、ここまで好意的な視線を向けられて無視出来るほどアレンは残酷ではない

「本当にいいんですか？」

「もちろん。はい、あーん」

ちょっと冗談交じりにそのままルゥの口元にチキンを持っていく

しかし

「あーん♪」

「……」

今度は予想外だった。アレンが差し出したチキンにルゥは何の躊躇いも見せずに八重歯が目立つ口を大きく開けた

正直「ごめんごめん。ちょっとした冗談だよ」的なことを言うつもりだったアレンの脳は予想外の出来事に軽く混乱する

「あむっ」

「お、美味しい……？」

全力で復旧作業を終えたアレンの脳が捻り出した言葉はそんな簡潔なもの。だがルゥは

「はい♪」

満面の笑みを浮かべて答えた

――その瞬間、アレンの中の何かがああなってこうなってどうにかなった

「はい、あーん」

「あーん♪」

「はい、あーん」

「あーん♪」

「はい、あーん」

「あーん♪」

「はい、あーん」

「あーん♪」

自分の食べる分などは全く考慮せず、ひたすらにアレンはチキンを切り分けて、その大きく開かれた小さな口へと運んでいく

「なにやってるんだか……」

セリカのそんな呟きが聞こえたような気がしたが、アレンはこの至福の時間を楽しむことで精一杯だった

結局、チキンはおろかローストビーフまでルゥの胃に納まることになったが、あの笑顔でアレンはある意味満腹だった

＊＊＊＊＊

空は既に黒に包まれていた

月が、星が、僅かな明かりとなってその暗闇を照らしている

街からは人の姿が消え始め、それに伴って喧騒も収まっていた

「――４９９４！　４９９５！　４９９６！」

そんな街から少し離れた場所にある小さな広場。そこで男はもう１０年以上は続けている日課の素振りをしていた

回数を数える声が空気中に溶けていく。額から滴る汗が、木刀を振り下ろす度に地面に黒い染みを作る

「――４９９７！　４９９８！　４９９９！　……５０００！」

上段の構えからただ振り下ろすだけの素振り。その５０００本目をビシッと振り切ると、木刀を地面に置き、アレンは全身を投げ出すようにそのまま地面に仰向けに倒れ込んだ

「……もう無理」

夏特有の温い風がアレンの頬を撫でる。だが、ほてった身体にはそれでも涼しく感じられた

あれは自分が5歳の時だっただろうか。絵本の勇者に憧れ、自分も強くなりたいと父親から木刀を貰い素振りを始めたのは

あの時は１０本くらい振ったところで今と同じように地面に倒れこんだ。尤も今のように物事を考える余裕はなく、半ば意識を失うようにぶっ倒れたのだが

気づいた時にはベッドの上だった。ちょうど様子を見に来ていた父親から自分が外で倒れていたという話を聞いた。何があったと聞いてきた父親に素振りしてたら１０本くらいで意識が飛んだと答えたら心配どころか「１０本とかダッ☆セェエエエ！！」と大笑いされた。後にも先にも悔し涙を流したのはあの時だけだ

子供心にプライドというものがあったのだろう。それから必死に１本でも多く素振りをしようと努力を続け、そしてまた途中で意識を失い父親に大笑いされるという毎日を繰り返した

そうして一月も経つ頃には３０本。１年経つ頃にはなってようやく本数は３００本を越え、１０年以上経った今は、５０００本も振る事が出来るようになった

「人間、やってやれないことはないってな」

アレンは勝ち誇った笑みを浮かべる

昔は意識を失うまで続けていたが、ここ数年は身体が大きくなり、父親に「倒れたお前を運ぶのがいい加減キツイ」と言われてからギリギリのところでやめるようにしている。今もあと１０本も振れば地面と熱烈な接吻を交わしていただろう

努力、と言えば聞こえはいい。確かに最初は強くなる為にと始めた素振りだ。しかし今となってはぐっすり寝る為の、言わば寝る前

の軽い運動のような扱いになっている

本当に強くなりたければ剣術の道場に通うなりなんなりすればよかったのだ。そうすれば今日みたく、無理矢理旅に出されても困ることはなかった

「ま、それも全部過ぎたことなんだけどな」

傍にあった木刀を掴み、月明かりに翳す

――ドクン、と心臓に合わせて木刀が脈を打ったような気がした

初めて手に取った時から変わらない。手から、腕から、身体全体から、木刀に力を吸い込まれるような感覚

「慣れてくるとこの感覚も癖になるよな」

まさか本当に力を吸い取られているわけではないだろう。あくまでそんな気がするだけ。一度父親にも伝えたことはあるが「気のせいだろう」と言われたのでそれ以来気にしていない

再び木刀を置き、アレンはよっこらせと立ち上がる

「――で、お前は俺に一体何の用だ？　そこにいるのはわかってるんだぞ」

視線の先、鬱蒼と生い茂る木に向かって声をかける

「あら、ばれてた？」

聞き覚えのある声。それとほぼ同時に草を踏みしめる音がした

背後から

「一応気配は消してたつもりだけど、まさか感づかれるなんてね。正直予想外だった――って、なに呆けてるの？」

「……いや、うん。気づいてたよ最初から。まさか本当にいたんだとか思ってないし」

「……？」

「ま、まぁ、この話はもういい」

コホン、とアレンはひとつ咳払いをする

「それで、本当に何の用だ？」

背後から現れた人物――セリカに向き直る

「別に用って程でもないんだけど……しいていうなら観察？」

「観察って……まるで人を愛玩動物みたいに」

「どっちかっていうと餌を巣に運ぶ働きアリを見る感覚に近いわね」

「それってどういう意味？　ねぇ、どういう意味？」

「ま、そんなどうでもいいことは置いといて、はい」

「全然どうでも良くな――何だコレ？」

ポンと、セリカから手渡された包みを見つめながらアレンはセリカを見返す

「あけてみなさい」

その言葉通りにアレンは包みを解いていくと

「三角形のご飯の塊？」

「おにぎりよ」

そこには微妙に大きさが異なるおにぎりとご丁寧に大根の漬物まで添えてあった

なんでおにぎり？と口にする前にアレンの腹部から重低音が鳴り響いた

「……聞こえた？」

恐る恐る問いかける。セリカの返事は溜息だった

「あんたルゥにあげてばっかりで晩御飯ロクに食べてなかったでし

ょ」

「あーそういえば……」

あの時は幸せという満足感が胃袋を満たしていたが、改めて考えてみるとルゥに食べさせてばかりで自分では殆ど手をつけていなかった

「愛じゃお腹は膨れないってことか……」

遠い目をしながらアレンは呟く

と、ここで胃袋が2回目の警報を奏でた。それを聞いて、ようやく空腹であることにアレンは気づく

「お前の言い分からすると、もしかしてこれは俺の為に持ってきてくれたのか？」

「……また今日みたく途中で倒れられても困るからね。宿屋のおばさんに無理言って作ってもらったのよ」

セリカはそっぽを向いてそう答える

「マジで？　てーことはこのおにぎりは俺が食べてもいいのかもぐもぐ」

「それは口いっぱいに詰め込む前に聞くべきだと思うんだけど」

「なんか（もぐもぐ）割と（もぐもぐ）しょっぱいな（もぐもぐ）このおにぎり」

「え、嘘？」

「まぁ、汗かいた後だからこのくらいしょっぱい方が有り難いけど。――んぐっ！？」

「またあんたは……ほら」

呆れ顔をしながら、セリカはアレンに水が入ったビンを渡す

だがアレンはそれを直ぐには受け取らず、5秒ほど一人で格闘したところで、諦めて水を受け取り口に流し込んだ

「ハァハァ……まさか、今日1日で2回もお前に命を救われるとはな」

「私も1日に同じ人間を同じように助けるのは初めての経験だわ。3回目は経験はしたくないからもう少しゆっくり食べなさいよ」

「無理だな。これすんげー美味いし」

「答えになってないわよ」

「文句はこのおにぎりを作った人間に言ってくれ」

「……はぁ」

セリカは深い溜息をつく

そのまま無言で食べ進めていたアレンだが、ふと思い出したように

「あ、言い忘れてたけど」

「なに？」

「わざわざこんなとこまで俺の為にありがとな」

「――――ッ。……はいはいどういたしまして。今度からは気をつけなさい」

「いや、そこは顔を赤くしながら「べ、別にあんたの為じゃないんだからね！　勘違いしないでよね！」とか言うべきだろ――って嘘！　嘘だから！　帰ろうとしないで！」

「全く……あんたは私に何を求めてるのよ」

若干疲れた様子で、セリカは近くにあった木に寄り掛かる

「そういえばルゥちゃんはもう寝たのか？」

「あのねぇ、今何時だと思ってるのよ。当然でしょ」

大体――と言葉を続けようとしたセリカだが、慌てて口を紡ぐ

アレンは指についたご飯粒まで食べきると

「そっか、もうそんな時間だったのか」

何かひとつのことに熱中していると時間が過ぎるのは早いというが、今はまさにそれだった

「あんた……ルゥが明日は半日以上歩くって言ってたこと忘れてない？」

「わ、忘れてたわけじゃないぞ。ただ、ちょっと頭の片隅に追いやってただけで」

「それを一般的には忘れてたって言うのよ。……もう素振りは終わったの？」

「あぁ。後は帰って風呂入って寝るだけだ」

「ならさっさと帰るわよ。私も眠いんだから」

そう言ってセリカはアレンに背を向けて歩き出す

アレンは木刀を拾い上げ、慌ててその後を追う

「……つーか眠いなら寝てればよかったと思うんだがな」

「何か言った？」

「宿屋に戻ったら一緒に風呂入らね？」

「入るわけないでしょ！」

そうして夜は更けていく

第5話　茶色の洗礼（後書き）

“男の手のひらサイズよりやや大きいチキン”

書いてから気づいたんですが、どことなく卑猥な文章に見えなくもないですよね

……いや、ほんとすみません。なんでもないです

第6話　でっかいモノ

「あ〜ー……」

旅を始めて2日目の朝

アレンのコンディションは早速最悪だった。といっても、体調が悪いとか、何か病気を患っているとかそういう意味ではなく

「眠い……」

そう、ただひたすらに眠かった

3秒に1回のペースでアレンの口から眠気の塊が欠伸となって吐き出される

基本的にアレンはよく寝る子である。実家にいた頃は次の日に仕事がないとまず午前中にベッドから出ることはなかった

尤も、仕事があるときでも起きるのは家族の中で一番遅かったのだが

そんなわけでアレンは死に掛けていた。このままだと死因は恐らく眠死あたりになるだろう

「8時とか……そんなんもう人間が起きる時間じゃないからね。鶏

がようやく朝だと認知し始める時間だからね」

壁に掛かっている時計を半開きの目で確認してから、アレンはぐでーっとテーブルに突っ伏す

今回三人が泊まった宿屋は一階部分が軽食屋も兼ねている。アレンが起きて（無理矢理セリカに起こされて）下に降りた時には、セリカとルゥは朝食であるサンドイッチを既に食べ終えていた

「愚痴ってる暇があるならさっさと顔洗ってきなさい。もうすぐ出るわよ」

半死体のアレンとは対照的に、セリカは優雅にモーニングコーヒーを啜る。ルゥは牛乳で鼻の下に白い髭を生やしていた

「え、俺の朝飯は？」

「食べたかったら今度からもっと早く起きてくることね」

「……マジで？　俺だけ朝飯抜きで半日歩けと？」

「自業自得よ。ほら、行った行った」

「くそぅ……」

がっくりと肩を落として、アレンは共用の洗面所の方にとぼとぼと歩いていく

そうしてアレンの姿が見えなくなるとほぼ同時に、残された二人のもとに恰幅の良い女性が近づいてきた。その手には小さなバスケ

ットのようなものが握られている

「あいよ。これでいいのかい？」

「はい、ありがとうございます」

それを受け取りセリカは女性にお礼を述べる

「……？　その籠はなんですかセリさん？」

「さっきあんた達が食べたものと同じものが入った籠さね。わざわざ一人分だけ別に用意してくれってこっちの子に頼まれたのさ」

その問いに答えたのは恰幅の良い女性だった。ルゥは意外そうにパチクリと目を開くと

「え、それってどういう――」

「ルゥ、鼻の下白くなってるわよ。これで拭きなさい」

「は、はい」

セリカから手渡された紙のナプキンで口元を拭う

「そういえば昨日厨房で作ってたアレは渡せたかい？」

「な！？」

「昨日？　厨房？」

続けざまに出る単語にルゥは首を傾げる

セリカはいつになく慌てた様子で

「お、おばさん！　それは内緒にって……！」

「あぁ。そうだったそうだった。こいつは失礼したね」

本当にそう思っているのかと疑心暗鬼になってしまいそうな笑顔を浮かべながら女性は笑う

「……？？」

何がなんだかわからない

第６話　でっかいモノ

一日お世話になったアスタールに別れを告げ、一行は道なりに南下していた。ルゥの話だと次の街へは小さい峠をひとつ越えていかなければいけないらしい

アレンは地理に詳しくないが、どうやら次の街まではこの道が一番近いようで、道中、何台も商人の荷馬車が横を通り過ぎていった

その都度「楽そうでいいな……」と呟きつつも、なんだかんだで三人は全行程の半分近くまで差し掛かっていた

「それでは此処でお昼にしましょうか」

少々道を外れた場所にあった大きな木陰でルゥは地図を畳む

「賛成……っていうか疲れた」

運動不足というわけではないが、ただひたすら歩き続けるという経験は殆どと言っていいほどない

半分棒になりかけている足を労りながら、アレンは木を背に座り込んだ

「ルゥ、この辺に川ってあったかしら？」

「川ですか？　確かそこの森を北東の方に１０分程歩いた場所にあったと思いますけど」

「じゃあ私はそこで水を確保してくるわ。ルゥはそこの馬鹿（アレン）とお昼の用意をお願い」

「なんだろう、ただ名前を呼ばれただけなのにこの小馬鹿にされた感」

「わかりました。セリさんなら大丈夫だとは思いますが一応気をつけてくださいね」

「はいはい。んじゃ行ってくるわね」

そう言ってセリカは森の中へと入って行った。ルゥはその背中を

見送ると、アレンの方に振り向き

「それじゃあ私はお昼の準備を始めちゃいますね。あ、アレンさんはそのまま休んでてもらっても大丈夫ですよ」

「……いやいや、ルゥちゃんの気遣いは嬉しいけど、流石にそこまで二人に甘えるわけにはいかんのですよ」

フロントダブルバイセップス（一番有名な筋肉を見せ付けるポーズ）でここぞばかりに元気さをアピール。鍛えあげたアレンのその上腕二等筋は、恐ろしいほどにプニプニである

「少し休んだら体力も戻ってきたし、出来れば俺にも何か手伝わさせて貰えないかな？」

「それでしたら……あ、そうだ。私と一緒に果物を採りに行きませんか？」

一瞬の思考の末、ルゥはふと何かを思い付いたようにパンッ、と手を叩いてそう言った

「果物？」

「はい。ちょうど近くに桃がなってるみたいですから食後用に何個か採ってきちゃいましょう」

「それは賛成だけど……どうして近くに桃がなってるってわかるの？」

見渡す限り森、森、森。川の場所は地図に載っているだろうが、

桃の木の場所なんて普通は載っていない

しかし、アレンのそんな疑問に対しルゥは首を傾げて

「どうしてって……あれ？　お話してませんでしたっけ？」

「何の話かはわからないけど多分聞いてないかも」

少なくともこの二日間でそれらしい会話をルゥとした記憶はない。単に覚えていないという可能性も否めなくはないが

「そうだったんですか……それじゃあ歩きながらお話しますね。あんまりゆっくりしてると準備が終わる前にセリさんが帰って来ちゃうかもしれませんから」

ルゥは「こっちです」とトコトコセリカが歩いて行った方向と逆の方向に歩みを進めていく

アレンは半信半疑のままだったが、とりあえずルゥの後を追うことにした

「桃だね」

「桃ですね」

本当にあった

アレンの視界の先には薄く色付いた桃のなっている木が3本、中

心の大きい木の左右にやや小さな木が1本ずつという形で並んでいた

確かに近くにあるとルゥは言っていたが、その言葉通り歩いた時間は本当に短かった。道を外れて森の中に入ってから多分5分も歩いていない。真っ直ぐ進んできた訳ではないが距離にしてみればほんの数百メートルといったところだ

「ワーウルフって皆こんなに鼻がいいもんなのか……」

此処に来る途中にルゥから説明してもらったことを改めて確認させられる

「人の姿をしてるとはいえ、本質は狼と一緒と変わりませんから」

私はハーフですから少し特別なんですけどね、とルゥは続ける

確かにあそこから此処の匂いを嗅ぎ取るなんて真似は少々特別な鼻を持ってないと出来ない芸当だ。その証拠にこんなに近くにいるはずのアレンに桃の匂いは全くと言っていいほど届いていない

「でも鼻がいいってことは良いことばかりって訳でもないんです。どんな些細な匂いにも反応してしまいますし、キツイ匂いは他の人より余計にきつく感じてしまいますから」

「鼻が良すぎるってのも考えものなんだな。でもルゥちゃんの鼻があれば捜し物とかも直ぐ見つけられそうだよね」

「はい、その時は是非私に任せてください」

グッと両手を握りしめながら、ルゥは自信満々にそう言った

「じゃあせっかくだからセリカを驚かせるくらい沢山桃を採って戻ろうか。なんかもうお昼ご飯は桃だけですって勢いで」

「本来の収穫時期はまだ先なので、そこまで食べられるような桃があるかどうかわかりませんよ？」

「んー…ぱっと見もう桃だし多分大丈夫じゃないかな」

アレンは手の届く位置にあった桃を適当に採ってそのまま噛り付く

口いっぱいに広がる果汁に鼻から抜けていく甘い香り。それを嚥下してからアレンはふむ、と一回だけ頷いて

「うん、やっぱりこの程度なら全然いけると思う」

「それなら高い所にある桃はアレンさんにお願いしてもいいですか？　私じゃちょっと手が届きそうにないので」

「俺は別に肩車でも構わんよ？　それどころか高飛車な感じで椅子になりなさいって言われても大丈夫だしむしろバッチコイって感じだし」

「いえ、あの……肩車は」

ルゥはスカートを抑えながら逡巡する様子を見せる。その顔は若干赤い

それを見て、あぁ、とアレンはルゥが何を伝えようとしているのかを理解した

「そりゃ流石にスカートで肩車は恥ずかしいよね」

「はい……。で、でも別に肩車が嫌というわけではなくて――」

「お、あの桃超美味そう！　ゴメンルゥちゃん。ちょっくら登ってあれ採ってくるわ！」

「え、え？」

「ルゥちゃんは左右の木をお願いね。じゃ！」

ビシッ！と片手を挙げて中心の大きい木をアレンは登っていく

そんなアレンの後姿を見つめながら、一人をその場に残されたルゥは小さく息を吐いた

勿論、アレンがそれに気づくことはない

「――で、結局二人で３０個も採ってきたと」

仁王立ちするセリカを前に、桃班であるアレンとルゥの二人は正座の体勢のままその身を震わせる

結論から先に言うと、確かにセリカは二人が採ってきた大量の桃を見て驚きはした

……が、驚いていたのはその一瞬だけで、一度溜息をついてから

アレンに脳天手刀、ルゥにデコピン（かなり軽く）をして「今度からはちゃんと考えて採りなさい」と、灸を据えた

セリカは二人から山のように積まれた桃に視線を移すと

「採っちゃったものは今更仕方ないけど……一体どうするのよこの量」

「どうするも何も食べるしかなくね？」

「そうね。じゃあ比率は３：３：２４にしましょう」

「ちょっと聞いていい？」

「アレンは２４個頑張ってね。で、何かしら？」

「あ、なんでもないです」

＊＊＊＊＊

それはちょうどアレンが１３個目の桃に差し掛かろうとしていた時に起きた

「――気をつけてください。魔物が近づいてきます」

「へ？」

9個目の時点で既に涙目だったアレンに対して、自分のノルマを終えて本来の昼食である干し肉を食べながらご満悦の表情を浮かべていたルゥが、急に真剣な顔になったかと思うと切羽詰まったような声でそう言った

その視線は何の変哲もない木々の方に向けられている。だがセリカは既にルゥの前に立ち、視線の方向に臨戦体勢をとっていた

「ルゥ、敵数と種類は？」

「敵数……は3。種類はグリーンスライムみたいです」

鼻をスンスンと鳴らしながらルゥは告げる

「ランク外の魔物ね。それなら何匹いようと問題ないわ」

勝ちを確信したかのようにセリカはニヤリと笑う

アレンもやや出遅れ気味に木刀を手に取りセリカの隣に立った

「あら、残念だけどあんたの出番はないわよ」

「俺だって本当は桃片手に観戦といきたいんだがな。少し腹ごなしの運動しねぇと胃袋に物が入るスペースが出来ないんだよ」

「ふーん。ならあんた一人で戦ってみる？」

――ん？とアレンは我が耳を疑う

「なんか桃の食べすぎで耳が悪くなったみたいだな。今セリカに一人で戦えとか言われた気がする」

「現実逃避してないで現実（こっち）に戻ってきなさい」

「……だっておかしくない？　一度も魔物と戦ったことのない俺に一人で戦えとかおかしくない？」

「あんた……もしかして怖いの？」

「――スライムでもなんでもかかってこいやクソがぁ！」

木刀を上段に構えアレンは吼える

先程セリカが放った一言。それはアレンのプライドを刺激するには十分過ぎた

数メートル先の木々の間からスライムが3匹飛び出してくる。それを見据えてからアレンは木刀を握り締めた

グリーンスライムはその名前の通り全体的に透き通った黄緑色で、大きさはどれも1メートル前後だった

ランク外――セリカはそう言っていた。その意味はよくわからないが、あの口ぶりから察するに恐らくそこまで強い魔物ではないのだろう

「なら……俺にもなんとかなるってことだよな」

ダンッ！と地面を蹴ってアレンは3匹に近づく。そして勢いそのままにとりあえず目についた1匹に向かって木刀を思い切り振り下ろした

――ザシュッ！

その瞬間、なんとも言えない感触が木刀を伝わってやってきた

見ると木刀はスライムを縦に二分し、地面に僅かにへこみを作っていた

「やっぱりこの程度か」

今度は木刀を上段ではなく居合抜きのように構える

スライムはぷるんぷるんとゼリー状の身体を弾ませながら、同時にアレンに突っ込んでくる

「狙うは2匹同時っ――てか」

タイミングを見計らい、2匹が間合いに入った所で抜刀。横一閃に木刀を薙いだ

先程より鋭い音がして、飛び散ったスライムの破片が身体に付着する。その手応えは殆どなく、2匹は4つの塊になった

もう動かないスライムの残骸を確認してから、アレンは背後にいる二人に勝利を声高に叫ぶ。

「オルァ見たかセリカ！　俺一人でもなんとかしてみせたぞ！」

「ま、このくらいは出来て当然ね。それよりちゃんと核は破壊したの？」

「はっはっは……核？」

聞き慣れない言葉がセリカから放たれた

「アレンさん！」

「あ、ルゥちゃんも今の戦い見ててくれた？　俺なんとか勝て」

「まだ終わってません！　後ろを見てください！」

「後ろ？　後ろがどうし――って、え？」

言われるがまま振り向くと、目の前に黒い壁があった

もっと正確に言うと逆光で黒く見えた3メートル程の巨大スライムが一段とぷるぷるしながらそこにそびえ立っていた

「……わぁ、おっきい」

第一印象はそんな感じだった

辺りに散らばっていたはずのスライムの破片は既になく、代わりに3匹の体積を合わせて更にそれを3倍したかのような大きさになったスライムは

「って、危ねぇっ！？」

慌ててその場所から移動する。すると今の今までアレンが立っていた場所にズシンッ！と巨大スライムが落ちてきて、小さなクレーターを作った

「やっぱり……」

「やっぱりって何！？　セリカはこうなることわかってたのか！？」

「むしろなんであんたはわかってないのよ。スライムは核を破壊しない限り再生し続けるなんて当たり前のことでしょうに」

「そういう大事なことは戦う前に教えてほしかった！　でもコイツの場合は再生っていうかどっちかっていうと質量保存を無視した合体に見えるんだけど！」

「どちらにせよ倒す方法は変わらないし、むしろ核が大きくなって破壊しやすくなったんじゃない？　ほら、中心あたりに見えるでしょ」

「中心？　……あれかっ！」

スライムの身体の中心部に一際濃い黄緑色の球体があった。大きさは恐らく握り拳程度。あれがセリカの言う核のようだ

「で、ようはアレをぶっ壊せばコイツは再生出来なくなるんだなっ！？」

「そうだけど、一人でなんとかなるの？」

「当たり前だっつー……の！」

足に力を込め、スライムとの距離を一気に詰める。セリカは疑っていたようだが所詮一度倒した敵だ。油断しなければまた一撃で沈められる――そう考えていた

「喰らえっ！」

上段には高さが足りない為、袈裟斬りでその核を狙う

――ぷにょん

「えー……」

アレンが自信満々に放った袈裟斬りは、スライムに多少食い込んだだけで全く核までは届かなかった

力が足りないなんてことはない。先程たた斬った力と寸分しか違わない力で斬ったはずだった。だが結果は御覧の通りだ

「……」

「どうしたの？」

「無理です。助けてください」

「……1分前に自分が言ったこと覚えてる？」

「私、過去には縛られない男なの。というわけであのスライムはお前に頼んだ。代わりと言っちゃなんだが、ルゥちゃんは俺に任せろ」

「……」

この男は……と、セリカは呆れる

だが、今さっきの様子を見る限りでは確かにアレンには少々荷が重い。それで納得出来るかと言われればそれはまた別の話になるのだが、“一応”ここはアレンの判断が正しいのだろう

「わかったわ。あんたはそこで大人しく見てなさい」

「セリさん……」

「すまんな本当に。俺の隠された力が覚醒したなら加勢でもしてやれるんだが」

「……期待しないで待ってるわ」

そう言い残し、いつも通りの歩調でセリカはスライムに歩み寄っていく

スライムはそれを待ち構えていたかのように、セリカに向かって突進を試みた。小さなクレーターを形成する程の重量を持った突進は人間にとってかなりの脅威となるのだが、セリカはそれを意に介した様子もなく

「遅い」

カウンターでその拳をスライムの身体に打ち込んだ

ズンッ……！と、鈍い感触が拳に伝わる。アレンの木刀でさえ傷ひとつつかなかったスライムの身体を、セリカの一撃は悠々と打ち抜いた

「……っと」

そのまま核を掴み、スライムの身体から抜き取る

身体を維持するものがなくなったスライムは、溶けたアイスのようにドロドロとその姿を変えていき、１０秒もしないうちに黄緑色の水溜りと化した

「ま、所詮この程度よね」

セリカは手に持った濃い黄緑色の核をバキィッ！と握り潰す。これでもうスライムが復活することはなくなった

「スライムさん……あなたは強かった。ただ…相手が悪かった……」

勝利の余韻に浸っていたアレンとは違い、ただ当たり前の結果と言わんばかりの表情でセリカが戻ってくる

「（にしても、あの拳を喰らってよく死ななかったな……俺）」

初めてセリカと戦った時。あの時には既にセリカの実力は自分の遥か上に位置していることはわかっていた

だが、自分が苦戦した（それほど戦ってもいないが）スライムを、ああも簡単に沈めたセリカを見て、改めてその強さを確認させられた。ついでに自分の耐久力も

「お疲れ。やっぱお前に任せて正解だったな」

「まったく……最初からこうしておけばよかったわ」

「そう言うなよ。これでも俺なりに頑張ったんだからさ」

「だったら最後まで頑張りなさいよ」

「それはお断りします」

「……（プチン）」

「え、なんでそんな怖い顔して……あははやだなぁちょっと場を和ませる為の冗談に決まってじゃなぎゃあああああ男割りぃいいいいいいっ！？」

――ルゥ曰く、その光景はあまりにも惨すぎて、とてもじゃないが口では言い表せられなかったという

第6話　でっかいモノ（後書き）

お気に入り登録が……お気に入り登録がッ……！！！（びっくりし過ぎて晩御飯の餃子を落とす）

おかげで嬉しいのか悲しいのかよくわからんことになりました

第7話　暇な一日

「ふぁー…あ」

時刻はおよそ昼前。外では人がせわしなく働いている中、アレンはベッドに腰掛けながら惜し気もなく大きな欠伸をしていた

「――昨日は丸一日歩いたから、今日はこの街で身体を休めましょ」

と、数時間前にセリカが言っていたことを寝ぼけ眼を擦りながらボンヤリと思い出す

その当人は朝食を食べるなり、ルゥと一緒に買い物へ出掛けてしまった。セリカいわく「今まで人目があったから満足に買い物も出来なかったのよね」ということらしい

アレン自身も二人についていくという選択肢がなかったわけではないが、せっかくなので部屋に戻って二度寝をした。起きたのはついさっきだ

「んー…これからどーすっかな」

ガシガシと頭をかきながらアレンは一人呟いた

今まで寝ていたので眠気は殆どない。かといって部屋には時間を潰せるような物もなく、昼食にはまだ少し早い

それならば素振りでもしようかと考えたりもしたが、生憎とそんな気分でもなかったので一瞬でその案を却下した

「……と、なるとだ」

消去法で選択肢はひとつしかなくなる

アレンは「よっ」と立ち上がり、僅かばかりの手荷物を持って部屋を出た

街へと繰り出す為に

第7話　暇な一日

驚くほど大きいわけでもなければ、別に悲観するほど小さくもない――それが昨日この街に着いた時にアレンが抱いた感想だった

街の規模自体はアスタールと殆ど変わらない。強いて言うのであれば此処、エイジアの方が若干大きいといったところだ

ただ、エイジアには先の二つな街では余り見受けられなかった物が街の至る所にあった

「この街は随分と服屋が多いんだな」

目的もなくフラフラと街を歩いているだけのアレンにも視界に入るだけで3つの服屋が確認出来た。それもその殆どが女性向けのものだった

「セリカとルゥちゃんも今頃どこかの店で服でも買ってんのかな？」

買い物をすると言って出掛けた二人だが、この街で買い物といえば洋服しかない。武器屋や防具屋もあるにはあるが、わざわざ女二人でそんな店に行くとも考えづらい

店の横を通り過ぎる際になんとなく中の様子を伺ったが、二人の姿は発見出来なかった。しかしアレンはそのこと自体は大して気にも止めず、そのまま洋服通り（命名：アレン）を歩き続けた

「……ん？」

そんな中、ふとアレンが目を向けた先に、興味を引くものが映った。赤い布を路上に広げ、その上に何やら色々な品物を乗せた所謂露店商というものだった

道行く人々は別に露天商に目もくれない。しかしアレンは違う。自分の街でも次のアスタールでもあまり露店商を見掛けることはなかった。それも自分と同じような年齢の人間がやってる露店商は初めてだった

「――何かお探しですか？」

大きな背負い鞄を隣に置き、木材を金具で組み立てたような簡易

折り畳み椅子に座って、爽やかな笑顔を浮かべながら露店商の主人らしき人物はアレンに向かってそう言った

柔らかい物腰に、他人に警戒心を抱かせないような整った顔立ちでの笑顔。自分がもし女ならば顔のひとつでも赤くなっているだろうとアレンは思う

「探し物ってわけじゃないけど、ちょっと珍しいなって思ってさ」

「おや、そうですか？　それほど珍しいと言われる商品は扱ってはいませんが」

青年は意外そうな顔をする

「いや、俺がいた街ではそういうのなかったから露店商自体が新鮮なんだ」

「いた街、と言うと、もしかして今は旅の最中か何かですか？」

「そうそう。此処に来たのもつい昨日で今日は適当に街を見て回ってるって感じ。多分明日にはまた次の街に向かうと思うけど」

「そうでしたか。では出発の前にうちでひと準備どうですか？　……といっても護身用程度の武器やアクセサリーが殆どですがね」

確かに広げられた商品の約８割はアクセサリー類で、申し訳程度に小さなナイフや短剣などが置かれているだけだった

武器に関しては、恐らく武器屋に行けばもっと多種多様の物があるだろう。護身用にしろ何にしろ別段目を見張る程の物はない

しかしアクセサリー類は数が多く、高そうな宝石を施した指輪や首飾りなどが所狭しと並んでいた。そして、その中のひとつ。小さな銀色のプレートが二つ重なるようについた首飾りがふと目についた

「何か気になるものがありましたか？」

その視線に気付いたのか、青年はアレンに向かって微笑んだ

「これ、手に取って見てもいいかな？」

「はい。お好きなだけ見てくださって結構ですよ」

青年にそう言われ、アレンは目についた首飾りを手に取った

綺麗な宝石が装飾されているわけではない。ただ、銀色のプレートが二つ通されているだけのシンプルな首飾り。一見ドックタグと似ていたが、気付けばアレンはその首飾りに見入ってしまっていた

「そちらの首飾りは最近入荷したばかりの物でして、そのシンプルさ故に男性女性どちらにも似合うようになっています。もし宜しかったら試しに此処でつけてみますか？」

「あ、いや、俺はこういうのは」

「では贈り物などにはどうですか？」

「贈り物？」

「はい。お世話になっている方や、親しいご友人には日頃の感謝を

込めて。気になる女性には親愛の証としてなど、最近では様々な形でこういったアクセサリーを贈る方々が増えています」

「へー…そうなんだ……」

「先程申しました通り、そちらのアクセサリーはつける相手を選びませんので、男性女性のどちらにも贈り物としてご利用頂けますよ」

ふむ、とアレンは一人考える

実家に居た頃ならば贈る相手は何人かいたかもしれないが、今身近にいる人物となると二人しか思い付かない

「（……ルゥちゃんなら快く受け取ってくれそうだけど、セリカは「戦闘の邪魔になるからいらない」とか言いそうな気がする）」

勿論それはあくまで自分の想像でしかないわけだが、あながち間違ってるとも言い切れない

しかし、そうなると贈る相手は必然的にルゥしかいなくなる

「（でも……ルゥちゃんにだけあげるってわけにもいかんよな）」

そんなことをすれば、セリカが不機嫌になるのは火を見るより明らかだ

だが、仮にセリカにもアクセサリーを贈るとして、一体どんなものを贈ればいいのかはさっぱり見当がつかない

そもそもそれ以前に自分からアクセサリーを貰ったところでセリ

カが喜ぶのかどうかすらも怪しいところだった

「あのさ、ちょっと聞いてもいい？」

「おや、なんでしょうか」

結局の所アクセサリーを贈ることだって自己満足に過ぎない。しかし、どうせならその相手に喜んで欲しいと思うのが人の常だ

そのような感じで色々と考えた末、アレンが出した結論は

「――戦闘の邪魔にならなくて、且つ俺と同じくらいの歳の女の子が喜びそうなアクセサリーってあるかな？」

「それはまた……随分と具体的な要望ですね」

アレンのいきなりな無茶難題に青年は一瞬困ったような表情を浮かべた

それも言ってしまえば当然の反応だ。実際に面識のない女の好みそうなアクセサリーなど青年にはわかるはずもない

「うーん……そうですね、ではこちらなんてどうでしょうか」

だが青年はすぐに何か思い付いたように何やら隣にあった鞄をゴソゴソと漁ると、小さな四角いケースを取り出した

アレンはそのケースを青年から受け取ると

「これは？」

「ケースを開けてみてください」

青年に言われたままに、アレンはケースを開けた。中に入っていたのは首飾りと同様でこれまたシンプルな銀色のピアスだった

「貴方がどんな女性に贈るかはわかりませんが、そのピアスなら首飾りや指輪と違って戦闘の邪魔になることはないでしょう」

「ピアス……なるほど。そういう選択肢もあったか」

確かにこれならば青年の言う通り戦闘の邪魔になることはない。セリカが喜ぶかどうかはまだわからないが、少なくとも邪魔になるという理由で突っぱねられることはなくなっただろう

「お気に召して頂けたでしょうか？」

「あぁ。これならアイツも文句は言わないんじゃないかな」

「では、首飾りとそちらのピアスはお買い上げということで宜しいですか？」

「……あ、そういえばまだ値段聞いてなかったな。いくらくらいになりそう？」

ふたつとも見た所高そうな宝石の類は装飾されていないが、あまりにも高価だと今後の懐事情に大い関係してくる

「そうですね。ふたつ合わせて１０００ゴールドといったところでしょうか」

「１０００ゴールド？　なら大丈夫そうだ。んじゃ、これで」

「はい。確かに受け取りました」

アレンは青年に言われた金額を払って丁寧に包装された商品を受け取る

「あ、そういえばひとつ伝え忘れてることがありました」

「ん？　まだ何かあるのか？」

「はい。実は貴方が買ったピアスのことなんですが――」

＊＊＊＊＊

――夜

宿屋兼酒場で三人は夕食をとっていた

「うぅ……ピーマン」

「ダメよルゥ。ちゃんと野菜も食べなきゃ」

付け合わせのピーマンを前に抵抗を続けるルゥとそれを窘めるセリカ

アレンはそんな微笑ましい二人を見つめながら、ポケットの中にある昼間購入したモノを渡すタイミングを見計らっていた

ぶっちゃけ気まぐれで買ったものだが、いざ渡すとなるとなんとなく尻込みしてしまうのは、アレン自身にあまり異性に物を贈るという経験がないせいである

「ほら、あーん」

「嫌でございます…ピーマンだけは嫌なのでございます……」

当然二人はそんなアレンの気持ちなど知らない

セリカがフォークに刺したピーマンをルゥの口元へ運ぶ。それをルゥはいつもより更に丁寧な言葉で拒否する

個人的にはもう少し涙目でいやいやと首を横に振るルゥを見ていたいアレンだが、既にこのやりとりは１０分以上続いている。あまり長引き過ぎるとせっかく買ったあれらを渡すタイミングを逃してしまう

――というわけで

「はい、あーん」

アレンは自分の更にある肉を切り分けてフォークに刺し、セリカと同様にルゥの口元へ持っていく

突然のその行動に、セリカはおろかルゥまでもがキョトンとした

様子でアレンを見つめた

「ちょ、ちょっとアレン、なにしてんのよ」

「いや肉と一緒なら頑張ればピーマンくらい食べられるんじゃないかと」

「またあんたはそうやって甘やかして……」

「どうルゥちゃん？」

「……で、でもピーマンは」

もじもじと視線をピーマン、肉と交互に移しながらもルゥは、今一歩踏み出して来ない

しかし、アレンは更に追い討ちかける

「……そっか。ちゃんと食べたらご褒美に俺の皿に残ってる分の肉全部あげようと思ってたけど、ルゥちゃんがそこまでしてピーマン食べたくないって言うなら仕方ないよね」

「！？」

それが決定打となった

「美味しい？」

「はい♪」

嫌いな物を食べた後の好物だからか、ルゥの笑顔がいつもより輝いていた

「でも今更ですけど本当に全部貰ってよかったんですか？　半分以上残ってたみたいでしたけど」

「実は街中を適当に食べ歩きしながら見て回ってたから昼飯食い過ぎちゃってさ。そこまでお腹空いてなかったんだよ」

アレンの話を聞いて「あれ？」とルゥは首を傾げた

「アレンさんも街に出てたんですか？」

「あーうん、ちょっとした暇つぶしに」

「どうせ街を見て回るなら私達と一緒に来ればよかったじゃない」

ズズ…と食後のお茶を飲みながら、セリカは「そしたら荷物持ちっていう名誉ある役職につけたのに」と付け足した

「というか何してたのよ一人寂しく」

「真顔で余計な単語つけんな。……まぁ、ちょっとした買い物だな。つっても最初からそのつもりだったわけじゃないけど」

「へー。私達は服だけどあんたは何買ったの？　武器……はあるから防具か保存食ってとこ？」

「そ、そんなところかな」

セリカの反応を見る限り、自分が二人に何かを買ったなどという可能性はないらしい

「（当然っちゃ当然の反応なんだが……）」

「ま、なんでもいいけどあんまり無駄遣いはしないようにね」

聞いてきた割にはそこまで興味を持っていないかったのか、セリカは再び茶を啜り始めた

しかし、その言葉を聞いてアレンにあるひとつの考えが浮かぶ

「――じゃあ、セリカにはコレをあげよう。んでルゥちゃんにはこっち」

今まで出しあぐねていたアクセサリーをそれぞれ二人の前に置いた

「え、なにこれ？」

セリカが目の前のケースに視線を移すと文字通りなにこれという顔をした

既に料理を食べ終えていたルゥは簡単に包装されたそれを見て

「これは……首飾りですか？」

「俺が選んだ奴だからルゥちゃんの好みに合うかわからないけどね」

「そ、そんなことないです、ありがとうございます。……あの、開けてみてもいいですか？」

「勿論。それどころかこの場でつけてもらって歓喜のあまり抱き着いてくれても俺は全然構わな……冗談だからそんな顔しないでセリカ」

セリカはケースの中身を確認しながら、こちらの真意を探るような視線を向けてきた

「全く……で、これは一体どういうことなの？」

怒ってはいない。が、喜んでいるわけでもない。概ね呆れながら困惑しているといったところだろう

しかし、一体どういうことなのかと聞かれたところで、アレンにはいい解答が見つからない。強いて言うのであれば「なんとなく」だった

なんとなく立ち寄った露店商で、なんとなく気に入ったアクセサリーを見つけ、なんとなく贈り物として購入し、なんとなく渡しただけに過ぎない

だがそう答えたところでセリカが納得するとも思えなかった。明確な理由がない限りアクセサリーを受け取ることも渋るだろう

なので

「――セリカの笑顔を見る為さ」

精一杯のキメ顔でそう答えてみた

「……」

ドン引きだった

「……とまぁ冗談はさておき、せっかく買ったんだから受けとってくれると嬉しい」

コホンとアレンは咳ばらいをしてからセリカに向かってそう言った

理由はどうであれ、これは本心である。その為にわざわざピアスという動きに制限をかけることがないアクセサリーを選んだのだ

「それに」

「それに？」

言葉を続ける

「此処で断られたら、セリカの言う《無駄遣い》をしたことになるからな」

「……なるほどね」

セリカは一瞬驚いた表情を浮かべたが、直ぐに「負けたわ」と肩を竦めた

「受け取ってくれるよな？」

「でも私ピアスなんかつけたことないわよ？　それに耳に穴開けるのも痛そうだし」

「あ、その辺は大丈夫らしい。なんか特殊な造りで耳に穴開けなくてもつけられるようになってるとか」

帰り際、露店商の青年から言われたことを思い出しながらアレンは続ける

セリカは穴を開けないならばピアスじゃないのではないかという疑問はあったが、それは野暮な気がしたので追求はしなかった

「んっと……これでいいのかしら」

パチン、と金具同士がくっつく音が耳に届く。どういう造りになっているのかはわからないが、確かにセリカの右耳に銀色の小さなピアスがつけられていた

「おー、いい感じに似合ってるじゃん」

「そ、そう？」

「……ん、あぁゴメン。今ルゥちゃんに対して言ってたんだわ」

「……（ゴゴゴ）」

「ナイフは逆手に握るものじゃないです。やめてください助けてください」

「ふん」

「あ、ちょっと待ってセリカ」

右耳に次いで、左耳にもつけようとしたセリカを止める

「なによ」

「そっちはお前じゃなくて俺がつけるものらしい」

「……あんた、それがどういう意味かわかってて言ってるの？」

「俺が買った店の店主は「相手に対する親愛の証ですよ」って言ってたけど。……え、なんか問題でもあった？」

これも帰り際に青年から教わったことだ。一対のピアスを男が左、女が右につけることで親愛の証になるという

ただ、セリカの反応は芳しくない

アレンは気づかないが、セリカの瞳には僅かに戸惑いが映し出されていた

「ほら、ルゥちゃんとは仲良くなってきた（ような気がする）けどセリカとはまだ微妙にギクシャクしてるだろ？　だからこれを機に仲良くなりましょう的な感じでいいんじゃないかなーと」

「……どうやら本当に何も知らないみたいね」

「何が？」

「別に。とりあえずお礼だけは言っておくわ」

そう言ってセリカはそっぽを向く

「……？　変な奴だな。まぁいいや。んじゃ俺も左耳に装着っと。どうルゥちゃん？　似合う？」

「はい。お二人ともとってもお似合いですよ」

ルゥは心なしか、アレンとセリカの二人を見つめる視線がいつもより楽しそうだった

「――――（ボソ）」

「ん？　何か言ったか？」

「……食べ終わったんだからそろそろ部屋に戻るわよ」

「ちょ、そんなに急かすなよ。俺まだお茶飲みきってないっての」

「じゃああんたはゆっくりしてなさい。今日は私が払っておいてあげるから」

「……マジで？」

「何よその目は。これはあくまでピアスの御礼なんだから、勘違いしないでよね」

「いや勘違いする要素なんてどこにも――って本当に行っちゃったし」

テーブルに一人ポツンと残されたアレンは、二人を見送りながら
静かに首を傾げることとなった

第8話　G－の危機

道に沿って南に進んでいたアレン達は周辺に幾つかの同盟国を持つレントリア領国へとやって来ていた

レントリア領国は、国というだけあってその規模は今までアレン達が立ち寄った街などとは比べ物にならないほど巨大で、建ち並ぶ建造物のどれもこれもが立派だった

また領主をしているサルバド・レントリア公爵が貴族とは思えないほど出来た人物らしく、領国ではありがちな悪政などが殆どないことも有名である。そのおかげで民の間でも特に目立った不平や不満もなく、街は至って平穏な空気に包まれていた

そんな中、三人は街の丁度中心に位置する噴水のある広場で、屋台で売っていたケバブをつつきながらこれからの予定について話し合っていた

「んで、どうする？　いつも通りさっさと宿とって各自自由行動にでもするか？」

時刻は昼時。どうやら此処はこの街でも人気の広場のようで、周りには家族連れやカップルの姿などが見受けられる

今回みたく早めに街に着いた場合は、たった今アレンが言ったように最初に宿を決めてその後は夕食の時間まで自由行動が基本的な

スタンスになっている

なので今回も恐らくそうなるのだろうと、アレンは半ば解答がわかっている質問をしたのだが

「それもいいんだけど、その前に今日はちょっと寄っておきたい場所があるのよ」

返ってきたセリカ答えは予想外のものだった

第8話　Ｇ－の危機

広場から歩いて5分程度。中心街から少々離れた場所に三人はやってきた

「寄っておきたいって場所ってギルドのことだったのか」

アレンが目の前の建物を見てセリカに話しかける

周りにある建造物の中でも一際目立つ大きさの建物

アレンはギルドと口にしたが、建物の正式名称は冒険者ギルド。俗にギルドランカーと呼ばれる冒険者達が依頼された任務を受注する時などに利用される建物である

「ま、とにかく入りましょ」

セリカに促され、アレンとルゥはギルドへと脚を踏み入れる

「（……なんだこれ）」

ギルド内でまずアレンが最初に感じたもの。それは他の冒険者の視線だった

視線を感じる――そんな言葉が一般的には存在するものの、実際に体験するのは初めてのことだった

アレン自身、今までギルドに脚を運んだことは一度もない。基本的にギルドは何処の街にも存在し、ある程度の歳にもなればどういう場所かも把握出来る。だが、普通に暮らしている上で此処を利用することは殆どないのだ

「（……そんなに俺達が珍しいもんなのか？）」

アレンは気付かない

そもそもギルドを利用する人間は、その大半が男である。現に今ギルド内にいる女はセリカとルゥの二人を除くとギルドの受付嬢だけ。目立つなという方が無理な話だった

それに加えて二人の風貌。セリカはまだ武道を嗜んでいることがわかる服装をしているが、隣を歩くルゥは違う。小柄な身長に周りにいる男達の娘とも言えそうなほどの幼さが残っている。それに伴い二人の顔立ちが一般基準以上に整っていれば、嫌でも周囲の視線

を集めてしまう

だが、実はその二人以上に視線を集めているのがアレンである

ギルドには珍しい女二人と一緒にやって来た男。それだけで男達の視線はアレンに注がれる。主に嫉妬や怒りを含んだ視線が

「（……なんなんだよホントに）」

アレンはげんなりしながらセリカに目を向ける

此処に連れてきた張本人は現在受付嬢と何か会話をしていた。ルゥも時折会話に混ざっているようでこちらには目もくれない

何の用事かはわからないが、アレンとしてはさっさとこの視線の嵐から解放されたかった。せめてもの抵抗として二人の後ろに立って一緒に話を聞こうとすると

「あ、ちょうどいいとこに来たわね」

アレンに気付いたセリカが「ちょっといい？」と話しかけてきた

「あんたって何ランク？」

「……ランク？」

不意な問い掛けにアレンは困惑する

「実力からしてそんなに高くはないと思うから……Ｇ＋かＦ－ってとこ？」

「ちょ、ちょっと待って。ランクって一体何の話？」

勝手に話を進めていくセリカに、慌てた様子でアレンは静止をかける

「何って……ギルドランクに決まってるでしょ？」

さも当然のようにセリカは答える。だがアレンにとっては聞き覚えのない言葉だった

すると、そんなアレンの反応を見てセリカが口を開いた

「あんた、もしかしてランカーじゃないの？」

「うん」

特に迷いもせずに肯定する

ギルドランク、そしてランカー。一度でもギルドを訪れたことがあるならばそれらの言葉の意味を知っていてもおかしくはない

だがそれはあくまで《一度は訪れたことがある》場合である

先の通り、アレンがギルドを訪れるのは今日が初めてで、勿論ギルドランクなんて言葉は知らない。ましてやセリカの言うランカーであるはずもない

「……てことは、ギルドに来るのも初めて？」

「あれ、言ってなかったっけ」

「今初めて聞いたわ」

「マジか……まぁいいや。とにかく俺はランカーじゃないぞ。そもそもランカーって何なのかすらわからん」

「胸張って言うことじゃないでしょ。はぁ……いいわ。じゃあ一からちゃんと説明してあげる。ちょっとついて来なさい」

そう言うとセリカは受付嬢に「また後で」と一言言い残し、アレンとルゥの二人を連れて二階へと続く階段を上っていく

三人がやって来たのはギルドが経営する酒場だった

二階の約半分の広さを占めるこの酒場は利用者の9割以上がギルド関係者で、ランカー同士で依頼に関する情報などを交換する場などとしても使われることが多い

ただ基本的にはランカーが酒を楽しむ場所として提供されているので、今もまだ昼過ぎだというのに関わらず、酒をかっくらっているランカーらしき男達が10人近くいた

三人はそのうちの空いているテーブルにつくと、注文を取りに来たウェイトレスに適当に飲み物を頼んだ

「ホットミルクがないなんて……」

「あんたは酒場に何を求めてるのよ」

メニューを片手にテーブルに突っ伏すアレンにセリカは溜息をつく

オレンジジュースを頼んでいたルゥはテーブルと一体化しかけているアレンに話しかける

「今朝も食事の後に飲んでましたけど、アレンさんはホットミルクが好きなんですか？」

「三日に一回は飲まないと腕が震えてくるレベルで好きだね。現にほら腕が……」

「馬鹿なことやってないでさっさと本題に入るわよ」

プルプルとオーバー気味に腕を震えさせるアレンを窘めると、セリカはちょうど運ばれてきたコーヒーに口をつけた

本題というのは言わずもがな、先程の話の続きである

セリカは斜め前に座るアレンに姿勢を正すように軽く注意してから口を開く

「一応説明する前に聞いておきたいんだけど、アレンはギルドについてどこまで知ってる？」

「依頼された仕事をこなしてそれに見合った報奨金を貰う場所ってくらいの知識しかないな。セリカの言ってたランクだのランカーだのって言葉は全部初耳だ」

「ふーん。なら補足も含めて先にランカーについてから説明した方が早いわね」

「ん、頼む」

自分の分のオレンジジュースをズズズ……とストローで吸い上げながらアレンはそう答える

セリカは軽く一回咳払いをすると

「ギルドは依頼を受けてそれに見合ったお金を貰う場所、そこまではアレンが言った通りよ。ただ、実はその依頼っていうのは誰でも受けられるって訳じゃないのよ」

「え、そうなのか？」

アレンの咥えていたストローが落ちてカラン、と氷が音をたてる

「実際にギルドで依頼を受けられるのはギルドに登録した人だけ。そしてそういう人達の総称をギルドランカーって呼ぶのよ。……ま、殆どの場合はランカーって略して呼ぶんだけどね」

周りで酒を飲んでいる男達を指差しこの場にいる殆どの人間がランカーであることを告げる

その殆どに入らない男は「へー」と本当に理解したのかよくわからない声を上げて周りを見つめていた

「それで次はランクの話になるんだけど、ランクっていうのは端的に言うとランカーの力量を示すものなのよ。ランカーっていう名前

も元々≪ランクを持っている≫って意味からつけられたくらいだし」

「セリカってば博識ね」

「で、そのランクなんだけど一番下がＧ－でそこからG、G＋、F－っていう感じで段階が上がっていくの」

アレンの軽口に大した反応も見せず、セリカは淡々と話を続けていく

ランクはランカーだけではなく依頼にもあること。依頼のランクによって報奨金に大きな差があること。そして自分とルゥもランカーであること

そうしてセリカのカップが空になる頃には、ギルドについての基本事項は大体話し終えていた

「これで一応一通り説明はしたつもりだけど、何か聞きたいこととかある？」

「ぼぶびば（特には）」

ボリボリとグラスに残った氷を噛み砕きながらアレンは答える

「じゃあさっさと会計終わらせて下に戻りましょ」

「うえー…またあの視線を浴びる羽目になるのか……」

「男がグチグチ言わないの。依頼の話も中途半端だったしあんたのランカー登録もしなきゃいけないんだから」

「……やっぱりそうなりますよね」

説明を受けている最中に薄々そうなるのではないかと予想していたが、見事なまでにそれが的中した

セリカの用というのも依頼の話だったらしく、自分の知らないところで話が進んでいたことにアレンは落ち込む

「旅をする以上どちらにしろ必要になるんだからいいじゃない。それにランカーになったら貰えるギルドカードは身分証明にも使えるから何かと便利よ？」

「大体ランカーって俺みたいな戦闘能力皆無な人間がなってもいいもんなのか？　依頼とか全くこなせる自信ないんだけど」

「別に戦うことだけが依頼じゃないから大丈夫よ。ランクの低い依頼にはペット捜索とか畑仕事みたいな民間の雑用もあるし」

「マジでか。ならバッチコイだ。俺の鍛え抜かれた雑用技術をいかんなく発揮してやる」

「――決まりね。すみませーん」

会計の為にセリカは近くにいたウェイトレスを呼ぶ。アレンもさっきまでとは違い、今はやる気に満ち溢れているようだ

だがルゥだけは一人頭に疑問符を浮かべると

「あれ、でも確か今回の依頼って――」

＊＊＊＊＊

「騙された……」

整備された街道を肩を落としアレンはとぼとぼ歩く

その手にあるのはＧ－と特殊な印刷が施された銀色のカード。先程ギルドで登録した時にランカーである証明として貰ったものだ

「人聞きの悪いこと言わないでよ。勘違いしてたのはそっちじゃない」

その隣を歩く二人のうちセリカの方が心外とばかりに口を挟む

「ぐ……それはそうだけど。でも酒場では雑用の仕事もあるって言ってたし、あの話の流れから考えたら普通そっちを連想するだろうが。それがお前……記念すべき最初の依頼が≪魔物討伐≫ってなんだよ」

「何が好きでわざわざ雑用をしなきゃならないのよ。それにちゃんとあんたのことも考慮して比較的ランクの低い依頼にしてあげたでしょ」

「よく見て？　俺Ｇ－だよ？　貴方が選んだ依頼ってＤ＋って書いてあったよね？」

ギルドカードを押し付けるようにセリカに見せる

段階にして１０も上の魔物討伐依頼。それがどういうことかは最早考えずともわかることだ

「大丈夫ですよアレンさん。私のCランクも殆どセリさんのおかげによるものですから。戦闘においては私なんかよりアレンさんの方がよっぽど頼りになります」

「……いやいや、ルゥちゃんはその立派な鼻があるじゃない。それだけで俺より役に立ってるよ」

初めてスライムと対峙した日の夜に、ルゥから自分はワーウルフだが戦闘能力は人と殆ど変わらないということ伝えられている

アレンとしては少々意外なカミングアウトだったが、申し訳なさそうに謝るルゥを見て慌ててそれを否定した

現にルゥの鼻は三人が旅をする上で最早欠かせないものとなっている。魔物との距離を嗅ぎ取るのは勿論のこと、その魔物の種類や数までもほぼ確実に当てる。それはつまりルゥがいるだけで魔物との遭遇率がグッと下がるということだ。街間を行き来する商人などからしてみれば護衛を数人雇うよりルゥ一人居た方がよっぽど頼もしい

それはアレンも理解しているので、自分は役に立たないと自虐されると恐ろしくいたたまれない。あの嗅覚があるなら戦闘能力が多少低かろうと余裕でお釣りが返ってくる――そしてそのお釣りは自分の分の負債に使われている。どちらが役に立っていないかなどこ

れ以上ないくらい明確だった

「まぁ……ルゥとアレンどっちがいないと困るかって聞かれたら」

「やめろ。やめて。やめてください」

Ｇ一。カードに印刷されたそのアルファベットが今のアレンの実力を表している。そして二人との実力差も

「あとルゥもいちいちそんなこと気にしないの。戦闘以外のことで十分役に立ってるんだから戦闘くらいは私に任せなさい」

セリカはそう言ってアレンの方を向くと

「だからあんたは戦闘くらい役に立ちなさいよ？　少なくとも私が戦ってる間ルゥを護れるくらいにはね」

「わかってるさ。ルゥちゃんには指一本触れさせやしねぇ」

「……その自信がどこから来るのかわからないけど、とりあえずギルドカードはしまった方がいいわよ。貴重品なんだしもし紛失でもしたら再発行に結構な時間と金額がかかるんだから」

「紛失って、いきなり突風でも吹いて飛ばされない限り失くすことなんかそうそう――うおっ！？」

その瞬間、――轟っ！と、まるでタイミングを見計らっていたかのように突風が三人を襲った

そしてその風は完全に油断しきっていたアレンの手からカードを

掠め取っていった

「え、ちょ、待って！」

だが、アレンの懇願も空しくギルドカードは風に乗ってあらぬ方向へと飛んでいく

それを黙って見つめることしか出来ないアレンはギギギ、と錆びた歯車のようにセリカの方に振り向くと

「……セリカ、ちなみにもし本当に失くした場合は再発行にはどれくらいいかかる？」

「再発行には約三週間。手間賃、カード代込みでちょうど１万ゴールドね」

「待ってえええええええええ！！」

絶叫をあげながらアレンはカードが飛ばされていった方へ走り出す

残された二人はその後ろ姿を黙って見届け――

「てる場合じゃないですよセリさん！　アレンさんを追わないと！」

突然の出来事に一瞬呆然としていたルゥだが、すぐにセリカに向き直るとアレンが走っていった方向を指差して真剣な顔でそう言った

「えーめんどい。どうせすぐに見つけて戻ってくるんだからそこのジェラートの出店のとこで休んでたいんだけど。ルゥもジェラート好きでしょ？」

「で、でもアレンさん裏路地の方に走って行っちゃったんですよ？」

「此処って確か治安いいんでしょ？　ならルゥが危惧するようなことは起きないと思うわよ」

「それが……アレンさんの走って行った方からちょっと不穏な匂いがするんです」

ルゥの鼻は常人のそれとは違う。不穏な匂いという曖昧な表現だが、付き合いの長いセリカはそれの意味するところを知っている

「不穏な匂いね……厄介なことに巻き込まれてなきゃいいけど」

そんな淡い期待を持ちながら「見つけたら3段ジェラートでも奢らせようかしら」と考えるセリカだった

一方その頃アレンは

「ここは何処？　私はアレン」

Ｉｎ裏路地。Ｔｈｅ迷子の真っ最中だった

やっとの思いで風に流されたギルドカードを見つけ、さぁ二人の元に戻ろうと意気込んだところで既にそこは見知らぬ場所

土地勘もなければ自他供に認めるド級の方向音痴であるアレンが、暗く複雑に入り組んだ裏路地で迷子になるのにはそうそう時間は掛

からない

「セリカー…ルゥちゃーん……」

木に登って降りられなくなった子猫のような弱くか細い声で二人の名前を呼ぶ。しかし、その呼びかけに答えてくれる目当ての人物はいない

慌てて走り出したせいで荷物は全て置いてきてしまっている。護身用の木刀もなく、今のアレンは貧弱という形容詞が前に付いた一般人だった

表の街ほどではないが、裏路地にも人がいないわけではない。ただ、その殆どがガラの悪そうな男達だったり、身なりが汚い乞食だったりするだけで

そんな言わば裏の世界と呼ばれるような場所で、なんの変哲もない一般人のアレンが注目を受けないはずがない

「（なんかさっきから熱い視線を浴びまクリスティー）」

それが女性からのものだったなら良かったのに、とアレンは思う

しかし、現実は得てしてそう上手くはいかないものである

感じる視線はギルドで感じたものとあまり変わらない。だが、頼れる仲間がいないのと見知らぬ場所で迷子になっているという事実が、アレンを不安の底へと誘っていく

拍動は早い。けれども背中を伝う汗は酷く冷たく感じられた

そして、アレンが一番危惧していたことがとうとうその身に降りかかった

「――よぉ兄ちゃん」

背後から聞こえる低い声。その瞬間、アレンの心拍数はとんでもない勢いで跳ね上がった

振り返りたくない。そう思いつつも振り返らずにはいられない

「（面倒なことになりませんように面倒なことになりませんように！）」

なるべく冷静に、且ついつでも逃げられる用意をしながらアレンは振り返る

だが……幸運の女神は、その願いを聞き入れなかった

「俺達今ちょーっと金がなくてさ。……出来れば有り金全部置いていってくれねぇかな？」

アレンが振り返った先。そこには傭兵崩れのような男達が４人、下卑た笑みを浮かべながら立っていた

――嫌な予感が的中した。そう考えた時には、既にアレンは男達に背を向けて走り出していた

戦うなんて真似はしない。相手は４人、しかもそれぞれ剣だの斧だのを手にしていた。それに引き換え自分は丸腰。１対１なら隙を

見て逃げ出すことも出来るかもしれないが、相手が複数ならばまずそれは叶わない。よってアレンがとった行動は即逃げの一手だった

「わぷっ！？」

走り出した矢先、壁のようなものにその行く手を阻まれた。反作用の衝撃でアレンはその場に尻餅をつく

こっち側に壁なんかあっただろうか？と疑問が過ぎるが、その答えは自分の弾いた壁から返ってきた

「おいおい、何処に逃げようってんだ？」

「……マジかよ」

見上げれば、そこにあったのは壁ではなく後ろの男達と同じような風貌の男。口ぶりから察するに恐らくこの男も奴らの仲間なのだろう

自分が逃げることを想定しての挟み撃ち。悪党にしてはよく頭が回る――いや、悪党だからこその挟み撃ちか、とアレンは苦々しい表情を浮かべる

「別に俺達は乱暴しようってわけじゃないんだぜ？　ただ、兄ちゃんからお金を借りようってだけなんだからなぁ。……ま、素直に貸してくれればの話なんだけどな」

正面の男がニヤリと笑う。それにつられたのか男達の間で笑いが巻き起きた

「（どうする……どうやってこの状況を回避する）」

いつになく頭を回転させ打開策を練っていく

緊急状態で浮かぶ案などたかがしれている。しかし、今のアレンにはこうするより他にない

座り込んだままでは何も出来ない――そう考えて正面の男から距離をとりつつアレンは立ち上がる

その時、アレンのズボンのポケットから何かが落ちた。ヒラヒラと宙を漂いながら、それはちょうど男の目の前で止まった

「ん？　なんだこりゃ」

「あ、それは……」

無意識に手を伸ばす。だが、男はそれを見て何かに気づいたように

「おい見ろよお前ら！　こいつ一丁前にギルドカードなんか持ってやがるぜ！」

「か、返せこの野郎！　俺はわざわざそいつの為にこんなとこまで来たんだぞ！」

「あぁ？」

男はアレンを睨み付ける。それだけでアレンの踏み出した足は踏みとどまってしまう

「どれどれランクは――って、ぶっははははは！　まだＧ－かよ！　とんだペーペーじゃねぇか！」

「うるせぇ！　今日登録したばっかなんだから仕方ねぇだろ！」

「そうかそうか。じゃあ何も知らねぇお前にランカーの先輩として教えておいてやる」

男はニヤニヤしながら、アレンに向かって

「いいか、ランカーってのは基本的にその強さでランクが決まる。下にいるほど弱く、上に行けば行くほどランカー個人の実力は高い。このくらいはお前でも知ってるだろ？」

「当たり前だボケ！」

「はっは、威勢のいいガキだ。だが、その様子だとランカー同士の間にある裏ルールは知らねぇみてぇだな」

「……裏ルール？」

アレンは聞き返す。そんなものはセリカから聞いた記憶はない

「いいか、お前みたいな下級ランカーは、俺達上級ランカーに逆らうことは許されねぇんだ。もし逆らおうものなら……」

キラリと男の手の剣が光る。つまりそういうことなのだろう

クソが……とアレンは奥歯を噛み締める

「ちなみに俺のランクはＣ－。お前の後ろにいる連中は全員Ｄランク以上だ。そしてお前はＧ－。……この先は言わなくてもわかるよなぁ？」

男の笑みがより一層醜悪なものになる

わざわざ自分達のランクをアレンに教えたのはその実力差実感させ、逆らおうとする意思すら奪う為である

そしてその思惑通り、アレンは驚きに目を見開いていた。……だが、驚いていたのは何もアレンだけではなかった

「――こんなところにいたのね」

自分の後ろから、そんな呆れを含んだような声がした

反射的に男は振り返る。そこには先程まで自分が脅しをかけていた男と同じくらいの歳の真紅の髪色の女がいた

「セリカ？」

「セリカ、じゃないわよ。たかがギルドカードひとつでどこまで探しにきてるのよあんたは」

女は自分達を無視して、後ろの男を会話を続けている

それが、癪に障った

「――誰だテメェは」

問いかけなんて優しいものではない。男はその一言に殺気を込めて後ろの男の仲間らしき女に放つ

自分は仲間内の中でも一番強い。そんな自分が殺気を向ければ、女一人など簡単に怯えさせることが出来るはずだ――そう確信して

しかし

「――――ッ！！？」

その瞬間、幾つもの氷柱が身体を突き刺したような冷たさ男を襲った

声にならなかった

自分が放った殺気を遥かに凌駕する圧倒的な殺気。それは目の前の女から放たれていた

「……で、なんなのこいつらは」

男達を見て、セリカはアレンに問いかける

「見てわかるだろ。絡まれてるんだよ」

「……質問を変えるわ。なんでこんなことになってるの？」

「俺に聞かれてもな。とりあえずいい状況ではないことは確かだ」

「はぁ……」

女は溜息をついた

「……嘗めてんじゃねぇぞこのアマぁ！！」

殺気を向けられていなかった仲間の一人が声をあげて女に突貫する

肩口からの袈裟斬りを狙い、その両手斧を振り上げる

だが、それが振り下ろされることはなかった

「な――！？」

その場にいた全員が我が目を疑った

女は鉄で出来た斧を左手一本で、それも刃の部分を受け止めていたのだ

「は、放せ！」

「……こんな氣の篭ってないただのナマクラじゃ、私にはかすり傷ひとつつけられないわよ？」

鈍い音がした

突貫していった男はそのままドサッと地面に倒れこむ。男の斧は石畳の上に落ちて安っぽい金属音を奏でた

「次は誰？」

挑発するような口調。目の前で起きた光景に唖然としていた男達は、その一言で我を取り戻す

怒号が響きわたる。最早男達の目に映るのはセリカ一人だけだった

一人、また一人と己の武器を持ってセリカに立ち向かっていく。だが、ある者は顎を打ち抜かれ、ある者は鳩尾に重い一撃をもらい、ある者は何が起きたかわからないうちに意識を飛ばす

そうして、気づいたときにはアレンの前に立ちふさがった男を除いて、全ての男達はその身を地に伏せていた

「これで残るはあんただけね」

「……ど、どうなってやがる。そいつらは全員Dランク以上の奴らだったんだぞ！？　それがなんでテメェみてぇな女一人に――」

「あら、さっき自分で言ってたじゃない“下にいるほど弱く、上に行けば行くほどランカー個人の実力は高い”って」

カツカツ、とセリカはゆっくり男に歩み寄っていく

ひっ、と短い悲鳴をあげて男は後ずさる

「く、来るんじゃねぇ！」

「確かあんたはＣ－だっけ？　ま、氣が使えない一般人にしては結

構頑張った方だとは思うわ」

「氣……だと？　ま、まさかお前はＢランク――」

「残念。不正解よ」

常人には決して見切れない速度で放たれた足刀。かわす術を持たない男は、その一撃をまともに喰らう

弾きとばされた衝撃で幾度となく壁にぶつかり、ようやくその動きを止めた頃には、既に意識は途切れかけていた

暗転しかけている視界の先で、女は呟く

「――私の名前はセリカ・ロレンツ。Ａランクよ」

＊＊＊＊＊

割と大きな危機をなんとか回避し、アレンは安堵の息を吐いた

あの時セリカが助けに来なければ、そこらへんに転がっている男達と立場は逆転していただろう

しかし、よくこの暗く複雑に入り組んだ裏路地で自分を見つけら

れたものだとアレンは考える

気になってセリカに迷わなかったのか、と聞くと

「ルゥに感謝しなさい。ルゥの鼻であんたの匂いを辿ってきたんだから」

路地の陰を指差しながらセリカはそう答えた

アレンが視線をそっちに移すと、その陰からひょっこりと白髪の少女が姿を現した

陰に隠れていたのは、万が一にでもルゥを危険な目に遭わせないというセリカの配慮によるものだろう

「お二人とも大丈夫ですか？」

心配性の少女らしい御馴染みの台詞。それだけでアレンは心が癒される気がした

「大丈夫だよ。ありがとねルゥちゃん」

「い、いえ……私は此処まで案内しただけで、それにアレンさんを助けたのはセリさんですし……」

「んなこたぁない。ルゥちゃんがいなかったらそもそもセリカは此処にいなかったかもしれないんだから。胸を張って誇っていいと思うよ」

「ちょっと……私にお礼はないの？」

「今はルゥちゃんのターンだ。お前はもう少し待ってろっていただだだだ!?　わかった、わかったから！　お願いだからグリグリはやめて！」

「ふん」

「うぅ……頭割れるかと思った……」

こめかみを抑えながらアレンは呻く

だが、実際問題としてセリカがいなければ、今こうして無事にいられたかどうかもわからなかったのだ。お礼くらい言ってもバチは当たらないだろう

アレンは若干むくれ気味のセリカに向き直り

「セリカ」

「……なによ」

さて、なんとお礼を言ったものだろうか、とアレンは思考を始める

セリカの様子からするに、ただ頭を下げてお礼を言ったところで反応は見込めない。ならばどうしたものか。これ以外に碌なアイデアは――、というところまで考えたところでアレンはふと此処に来る前に見たある物を思い出した

「――お礼と言っちゃなんだが、ジェラートなんかどうだ？　確か街の方に出店があったよな？」

「……」

氷の眼差しを向けられる。“もので釣ろうぜ作戦”は誰がどう見ても失敗だった

「……いや、うん、すまん」

居た堪れなくなり、お礼より先に謝罪が口から飛び出す

「――シャルなら」

耳を澄まさなければ聞き逃してしまいそうな呟き。当然のごとくアレンは聞き逃した

「え、今なんて？　聞こえなかったからもう一回言ってくれないか？」

「――5段重ねのスペシャルなら……許してあげる」

「5段重ねって……もしかしてジェラートのことか？」

コクリ、とセリカは頷く

ジェラートって5段も重ねられるのか、というかいっぺんにそんなに食べると腹を下さないか、――などと浮かんできたそんな疑問はさておき、それでセリカの機嫌が治るならそれに越したことはない

「……わかった、俺も男だ！　5段でも10段でも好きなだけ頼め！　勿論ルゥちゃんの分も俺が持つ！」

「本当に？」

「あぁ。今ならケバブだって食べ放題ＯＫだ」

「ほ、本当ですか！？」

ケバブに過剰な反応を示したのはルゥである。どうやらジェラートよりも魅力的な提案だったらしい

「そうと決まればこんなとこで悠長に時間を潰してる場合じゃないわ。行くわよルゥ」

「はいっ！」

意気揚々と二人は街の方に向かって駆け出す。そしてポツンと一人その場に残されたアレンは

「……あれ、二人が先に行ったら俺また迷子になるんじゃねぇの？」

第8話　Ｇ－の危機（後書き）

活動報告で割と重要な（牛丼における生卵くらいの）お知らせがあるので、時間があれば目を通して頂ければと思います

第9話　Ｔｈｅ初依頼

先日セリカがギルドで受けた依頼の内容――それはレントリア領国から西に行く途中にあるグレッグ山道に出る魔物を討伐してくれとのことだった

しかしそのグレッグ山道までは徒歩で約半日。馬車も無しに往復するにはやや厳しい距離である

というわけで、魔物の討伐依頼を受けた次の日の朝。遅めの朝食（主にアレンのせいで）を終えた三人は、依頼用に貸し出している荷馬車を借りる為に再度ギルドに足を運んだ

「荷馬車は西門に止めておくよう手配しましたので、ご利用の際は西門近くのギルド職員にギルドカードをお見せください」

昨日と同じ受付の女性からそう承り、西門近くにいたそれっぽい人間に言われた通り三人はそれぞれギルドカードを見せ、行商人が乗っているような荷馬車を借り受けることに成功した

……までは、よかったのだが、この時三人はある重大な見落としをしていた

グレッグ山道も含め、そこまでに至る道も基本的には人通りがそこまで多くない。なので今まで歩いてきた道と違い路面状態はあまりよくなかった

となると当然そこを走る馬車は縦に横にその身を揺らすわけで

「……気持ち悪い」

数える程しか馬車に乗った経験のないアレンの平衡感覚は不規則な振動によって著しく乱され、その結果としてアレンは所謂“乗り物酔い”という状況に陥っていた

「……まさかアレンがここまで乗り物に弱かったなんて」

ルゥに背中を摩られながら木陰で休むアレンを見て、困ったようにセリカは頭を掻いた

「いやね、正直自分でもこんなことになるとは思ってなかうぷ」

「無理して喋らなくていいわよ。具合が良くなるまであんたはそこで大人しく休んでなさい」

現在三人は目的地であるグレッグ山道の手前3キロあたりの位置にいた。件の魔物はそこまで縄張りは広くないらしく、ルゥの鼻で周辺を探索してもそれらしき魔物はいなかった。つまり此処一帯は一応安全ということになる

出来れば安全な内にどうにかして回復して欲しいと願うセリカだったが、この様子ではしばらく時間がかかるだろう

だが、そんなセリカの心配が伝わったのか、アレンは親指を突き立てて

「ま、任せろ。こんな時の為に俺には秘策がある……」

「……今にも死にそうな顔で強がられてもね。その秘策とやらには期待出来るの？」

「それは今から見せてやる……ルゥちゃん、ちょっと耳貸して」

「あ、はい」

何の疑いも持たずに耳を傾けてきたルゥにアレンはボソボソと二言三言だけ何かを告げる

「……えっと、その言葉を言うだけでアレンさんの具合は良くなるんですか？」

「勿論。上目遣いなら更に言うことなし」

「……上目遣い？」

一瞬聞こえた単語にセリカは不穏な空気を感じた

「ちょっと、あんたルゥに何をさせるつもり？」

「おいおい言い掛かりはよしてくれよ。仮にも紳士である俺がルゥちゃんに《自主規制》なことをさせるわけがないだろう？」

「何か今ピーって音が聞こえたんだけど」

「――さぁ、ルゥちゃん」

期待の篭った眼差しをルゥに向ける。それを受けてルゥは先程アレンに言われた通り上目遣いをしながら

「早く元気になってね。――お、おにいちゃん」

「……ふぅ」

「……」

満足気に、しかしどこか遠い目をしながらアレンは短い息を吐いた

「ありがとうルゥちゃん――俺は今いつになくスッキリした気分だよ」

「本当に今の一言で治っちゃったんですか？」

自分が放った一言がどんな意味を持つか知らない少女は、ただただ目を丸くして驚いている

しかし、事実アレンの青白かった顔には血色が戻り、ルゥに背中を摩られていた時の弱々しさは既に微塵も感じられない

と、その時

「ねぇ」

ガシッと、誰かの手がアレンの肩を掴んだ

「ちょーっと聞きたいことがあるんだけど、いいかしら？」

掴まれた肩からはメリメリと筋繊維の悲鳴が聞こえていた

「……パス１でお願いします」

だが、人生というものはそんなに都合よくはいかないものだ

背後にいる声の主は不自然に明るい声で

「――却下よ♪」

第９話　Ｔｈｅ初依頼

そんな感じで色々と紆余曲折がありつつも一行が山道に入り歩くこと数分。周囲に索敵の網を広げていたルゥの嗅覚があるひとつの情報を察知した

「……どうやら向こうがこちらに気づいたみたいです。どんどん距

離をつめてきています」

得た情報を淡々と告げる。セリカはようやくお出ましか、と肩に担いでいた荷物を乱雑に地面に投げ捨てた

「へぶぅ。……ん？　ここ何処？」

「目は覚めた？」

「悪魔が俺を見下ろしてるってことは此処は地獄か」

「……もう一回寝てみる？」

「Ｎｏ　ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ」

流暢に遠慮した後、頭に3段コブを乗せた男はのっそりと立ち上がりキョロキョロと辺りを見回し始めた

「もしかしてもう山道に入ってたりする？」

先程と違う光景と視界の端で鼻を鳴らすルゥに気づき、身体の土をほろいながらセリカに問う

セリカはえぇ、と一言だけ発すると

「ルゥ、魔物の数と距離はどれくらい？」

「数は１４……いえ１５でしょうか。一番近い魔物で３０メートルくらいです」

「話に聞いてた数より多いわね。Ｄ－程度なら何匹いようと問題はないけど」

ギュッと拳を握り締める。それはセリカ自身がＡランクであるが故の余裕だった

「やっぱルゥちゃんの鼻ってすげーな」

なので、実力の裏付けがあるわけでもないこちらのＧ－の男の緊張感のなさは天然由来モノということになる。その手には一応木刀は握られているものの、とりあえず持っとくかーみたいな雰囲気がこれでもかといわんばかりに溢れていた

「とりあえずルゥはアレンの後ろにでも隠れてなさい。アレンもそれでいい？」

「俺は戦わなくてもいいのか？」

「元よりあんたは戦力として考えてないしね。それよりもルゥを護るっていう大事な使命があるんだからそっちに全力を尽くしなさい」

「あいよー」

「……本当に分かってるのかしら」

気の抜けた返事に一抹の不安を感じながらも、来たるべき時に備えてアレンと戦った時のように両腕と両足、それぞれに氣を巡らせ臨戦態勢に入る

「２５……２０……１５……そろそろ接敵します」

アレンの傍に立つルゥが魔物との距離を嗅ぎ取りセリカに伝える

低い唸り声と草木を掻き分ける音が静かな山道に響き渡る。ここまできてようやくアレンにも多少の緊張感が走った

「――フッ！」

地面を蹴り、とある一本の木に向かって一直線にセリカは駆け出す。それとほぼ同じタイミングで、木の陰からも何かが飛び出してきた

「あれは……ゴブリンだっけか」

アレンは静かにその魔物の名前を口にする

深緑より更に濃い巨大な体躯。二本足で立ち、丸太のように太い筋肉質の腕には木で出来た鈍器のようなものが握られている。獲物を見つけた――そう体言するかのような鈍く光る目と醜く釣り上がった口角は見るもの全てに不快感を与えた

だが、次の瞬間には

「グギャッ！？」

短い悲鳴をあげたかと思うと、ゴブリンは激しい音を発てて木に衝突した。そのままだらしなく舌を垂らしながらズルズルと滑り落ちるゴブリンの首はあらぬ方向を向いている

「まず1体」

先程までゴブリンが立っていた場所でセリカが短く告げる

「……ルゥちゃん、今の見えた？」

「い、いえ……」

たった今自分達の目の前で起きた光景にアレンはおろかルゥまでもが驚愕を顔に貼り付けていた。第三者ですらギリギリ目視出来るかどうかの上段蹴り。それはあまりにも速く、そして重い一撃だったと、ここで新たに3体のゴブリンが耳を劈くような叫びを発しながら武器を振り上げセリカに向かってきた

しかし、セリカは特に慌てることもなく一番近い敵に向かって今し方倒したゴブリンの遺骸を投げつける。本来女の細腕では抱えることさえ不可能であるはずの巨大な砲弾は、ありえない速度で飛来し、武器を振り上げたことによってがら空きになったゴブリンの胴体に直撃した

「2体目。お次は――」

言葉半ばに同じように近づいてきていた2体の顎を連続で打ち抜く。脳を揺らされ昏倒するゴブリンを蹴り飛ばしこれで計4体

「ここまでやれば……ま、当然そうなるわよね」

緩慢な動きで振り返った先、残りのゴブリンがぞろぞろとその姿を現していた

彼らは何も腕力に身を任せた戦い方だけしか出来ないわけではない。セリカやルゥは魔物と称していたが、ゴブリンは魔物の中でもどちらかというと亜人寄りに分類される。亜人のように獣化こそ出来ないものの、ある程度の知能を有し、少数で勝ち目が薄いと思えば集団で一斉に襲い掛かることもある

――そう、ちょうど今のように

「グォオアアアア！！」

合図代わりの咆哮。それを機にゴブリン達はセリカを周囲を取り囲み一切の逃げ場をなくす

「セリカ！！」

アレンが声を荒げる。ルゥを護るという名目で今まで静観していたが、あの状況は素人目に見ても危ない。

現在奴らの標的はセリカただ一人。無防備な背を向けるなど、こちらはまるで眼中にないという様子だった

「――そんなに大きな声を出さなくても大丈夫よ」

しかし、自分より一回りも二回りも大きいゴブリンの群れに囲まれるという圧倒的に不利な状況でも、セリカは表情を崩していなかった

今にも駆け出そうとしていたアレンを一言で制止させ、渾身の力を込めた右拳を自分の真下の地面に叩き付けると

直後、輪の中心から轟音が響き渡った

優に百を超える地面の破片や砂利などが飛び散り、セリカの周囲を囲っていたゴブリン達を散弾銃のように襲った。セリカはその隙を逃さず、すぐさま地を蹴り最早形を成していない輪の外へと飛び出した

濛々と立ち上る砂煙のせいで視界は悪いがそれは向こうにとっても同じこと。セリカは気づかれないようにすばやく痛みに悶えるゴブリン達の背後に回り次々と撃破していく

醜い悲鳴がその場にいる全員の鼓膜を揺らす。先程まで“狩る側”だった自分達が、いつの間にか“狩られる側”になっている――それはゴブリン達に恐怖という感情を与えるには十分過ぎた

「――ゲギャギャギャギャ！！」

次々に仲間が倒されていく焦りと、いつやってくるかわからない死への恐怖に己を支配された最後の1体が、狂ったように手に持った鈍器を振り回し始めた

だが、そんな大振りになった攻撃などセリカには当たらない

「哀れなものね」

「ギャ、ガッ……！？」

鈍器を悠々とかわし、地面を砕いた拳をゴブリンの鳩尾に突き刺す。それだけで巨大な体躯はズズン……と崩れ落ちた

「……なんだこりゃ」

ルゥを背後に木刀を構えていたアレンは、砂煙が収まった辺り一帯に視線を走らせた後、そんな呟きを洩らした

ゴブリン達が転がっている。まだ生きているのか僅かにピクピクと身体を痙攣させている者もいれば、最初の1体のように全く動かなくなっている者までいる。ただ、それら全てに共通して言えるのは“戦闘不能”であるということだ

「終わったわよー」

少し離れた場所でセリカが手を振っている。その顔はアレンが最後に見たセリカのものと同じだった

セリカが地面に拳を叩きつけた際に起きた砂煙で詳細の確認は出来ていない。しかし、ああして無事に立っているということは、つまりそういうことなのだろう

「（……にしても）」

明後日の方に首が折れ曲がっているゴブリンの遺骸を見てアレンは思う

人型に近いせいなのか、この前のスライムとは違い“死”という感覚がよりいっそう強く感じられる

実際に手を下したのはセリカなのだが、アレンの胸にはなんとも形容し難い靄のようなものが渦巻いていた

「アレンさん？」

「ん、どうかしたルゥちゃん？」

「いえ……ちょっと顔色が悪そうに見えたので」

「あー…」

顔に出ていたか、とアレンは苦笑いを浮かべる。そしてオーバー気味に自分の下腹部辺りを押さえ

「実はさっきからお腹が痛くてね……今その波がマックスハート気味で……ふぐぅ」

「え！？　あ、その……ご、ごめんなさい！」

「――というわけで、俺はルゥちゃんの鼻が届かないとこで一発でかいのやってくるから、先にセリカと馬車のとこまで戻っててくれないかな？」

「で、でもアレンさんを一人にするわけには……」

「じゃあ……ついてくる？　俺は恥ずかしいけどルゥちゃんがどうしてもって言うなら吝かでは」

「――ッ！？　失礼します！！」

顔を真っ赤に染め上げ、ルゥはセリカのもとへと走っていってしまう

その様子を見てアレンの中で少々やりすぎてしまっただろうかという疑問が浮かんだり浮かばなかったりしたが、まぁそれはそれということで

＊＊＊＊＊

「……（ぼけー）」

夕食もそこそこに済ませ、昨日と同じ場所で素振りを終えたアレンは、手頃な岩の上で口を半開いていた。他人から見ればそれはとても間抜けな絵面だったが、本人は至って真面目に悩み事をしているのだ

「上手く言えねぇけど……なんか、気分がよろしくない」

言葉の引き出しが少ないアレンなりに、今の自分の気持ちを正直に述べてみる。その脳裏に過ぎるのはゴブリンの亡骸。素振りをして汗を流せば多少は吹っ切れるかと思っていたのだが、胸の内にある靄は未だ濃く存在している

原因はわかっている。しかし、改善の方法が見つからない

恐らく“慣れ”の問題なのだろう。――命を奪うということに対しての

「でも、慣れちゃいけない気もするんだよなー」

いくら依頼とはいえ、魔物の命を平気で奪えるようになってしまうのはアレンの望むところではない。セリカもわざわざ進んでやっているわけではないだろう。短い付き合いだがそれくらいは自分でも理解出来る

――結局は誰かがやらなければいけないこと。それが今回はたまたま自分達に巡って来ただけなのだ

「……俺も強くならなきゃなぁ」

ポツリ、とアレンは星空を眺めながら独り言を口にする

ルゥを護る――なんて偉そうに言っているが、実際のところはクソも役に立っていないのが現状だ。セリカが圧倒していたゴブリンでさえ今の自分が敵う相手ではない。……もし、あの時1体でも自分の方に来ていたら、と思うと自然と腕が震えてくる

それに気づいたアレンは、うっはーコイツは情けねー、と自嘲的な笑みを浮かべる

しかし、その瞳には自分の不甲斐なさに対する怒りが込められていた

「……足手纏いなんて冗談じゃねぇぞ」

地に刺さった木刀を乱暴に掴み取り、目の前の空間に八つ当たりのようにぶつける。ビュンッ！！という空気を切り裂く音がアレンの耳に届いた。今まで幾度となく聞いてきた音だった

それから2度、3度、がむしゃらに木刀を振るう。だが、嫌な気分を払拭させるためにいつもより多く素振りをしたツケがここでやってきた

「あふん」

気持ち悪い声を発した後、アレンは顔面から地面に倒れこんだ。そしてそのままピクリとも動かなくなる

――後に、帰りが遅いと様子を見に来たセリカに驚かれ、大目玉を喰らうことになるのだが、それはまた別のお話

第１０話　触れて初めてわかること

――ギシ、ギシ、と板張りの廊下を踏み鳴らしながら、男は歩を進めていた

「……此処か」

音が止む。同じようなものが数ある中、男はある扉の前で立ち止まった

拳を軽く握り締め、扉をノック――しようとしたことろで、何かに気づいたようにその手をゆっくりと下ろす

「（時間も時間だし、な）」

廊下の端の小さな窓から差し込んでくる光は日中と比べると微々たるもの。先程自室を出るときに壁に掛かっていた振り子時計で時刻を確認したが、短針はまだ6を少し過ぎたあたりだった

男は下ろした手をそのまま扉の取っ手に持っていく。右に半回転。それだけで扉は簡単に開いた

鍵も掛けないとは無用心な奴め、と男は内心思いながらその先に脚を踏み入れる

「「――え？」」

目が、合った

部屋にいたのは二人。そのうちの一人――赤髪の女は着替え途中だったのか、色気のない上下白色の下着姿まま。もう一人の白髪の少女は、服こそ着ていたものの赤髪の女にスパッツを手渡す格好のまま、ノックもせずにいきなり部屋に入ってきた男を見て固まる

「な、な……」

何が起きたかわからないという表情のまま固まっていた赤髪の女が、事態を理解して急激に顔を朱に染めていく。慌てて近場にあったシーツで身体を隠し、ひっ、ひっ、と小さく呼吸を洩らすと、

「――き、きゃ、」

「キャアアアアアアアアア！？」

「なんであんたが悲鳴をあげるのよ！！」

第１０話　触れて初めてわかること

「――強くなりたい？」

その言葉にアレンはあぁ、と短く返事をすると、セリカの端整な顔が僅かに歪んだ

「……わざわざそれを言う為だけにあんなふざけた真似をしたの？」

ふざけた真似というのは言わずもがな、先程のアレンの乱入騒ぎのことを指している

ぶっちゃけ鍵をかけてなかったセリカ自身にも責任はあるのだが、それでも目の前の男を責めざるにはいられない。大体ノックもせずに乙女の部屋に入ってくるというのは如何なものか、というのがセリカの弁である

「だからそれに関してはさっきから謝ってるだろ。つーか俺だって好き好んでお前の着替えシーンなんか覗いたりしブフッ！？」

次の瞬間、ボフンッ！！と枕がアレンの顔面に直撃した

「……ったく」

部屋に備え付けられた古びた木製のベッドに腰を下ろし、盛大に嘆息した後

「それで、どうしていきなり強くなりたいなんて思ったわけ？」

もういいさっきのことは忘れようそうだあれは悪い夢だったんだ、とセリカは自分に暗示をかけてひとつ前の話題に切り替える

「別に大層な理由はないんだけどよ。ちょっと思うところがあってな」

「……ふーん」

一転して真面目な様子で答えるアレン。どういう経緯でその結論に至ったのかはセリカの知るとこではないが、少なくとも本気であるということだけは伝わってくる

「つまりあんたは強くなる為に私に稽古をつけて欲しいってこと？」

「単刀直入に言うならそうなる。勿論無理にとは言わんが」

嘘である。是が非にでも強くなりたいアレンはセリカが首を縦に振るまで引き下がる気は毛頭ない

「……ま、私としてはあんたが強くなる分には文句ないから別にいいけど」

「マジで！？　引き受けてくれるのか！？」

「ちょっ、近い近い！　嬉しいのはわかったから少し離れなさい！」

少年のように目を輝かせながらにじり寄ってきたアレンをゲシゲシと足蹴にする

だが、蹴られながらも恍惚とした表情なのは、果たしてどちらの理由からだろうか

＊＊＊＊＊

「あんた、“氣”は知ってる？」

朝食後、街外れの小さな広場でのセリカの開口一番がこれだ

稽古をつける＝実践練習と思い込んでいたアレンは突如始まった教師セリカによる前講釈に首を傾げる

とりあえずそこらへんの木を指差してドヤ顔をしてみた。駄目だった

セリカは「まぁ、そうよね」と既に答えがわかっていたかのような反応をした。なら何故聞いたのだとアレンは文句を垂れた

「実践練習も大事だけど、強くなるには“氣”も大いに関係してくるのよ。だからあんたにはこれから2つ同時進行でやってもらうことになるわ」

「……なんかすげぇハードな修業になりそうだな」

「私に教えを請うたんだからそのくらいは当然でしょ。泣き言なんか許さないわよ」

今更ながらに頼る相手を間違えたかもしれないと考えるアレンだが、とりあえずその“氣”とやらの説明を求めることにした

――セリカ曰く、限られた人間しか持たない魔力とは違い、氣は人間なら誰でも持っているということらしい

魔力が精神と必要とするなら氣は肉体を必要とする。簡単な例として魔力は使い切っても魔法が発動しなくなるだけだが、氣は使い切ってしまうと文字通りぶっ倒れる

そして氣には2つの種類、内気功と外気功がある

内気功は氣を身体の各部位に集約させることでその部位の身体能力を向上させることが出来るもの。また、それによって身体を硬化させることも出来るらしい

外気功は自身の気を外に打ち出す言わば属性のない魔法のようなもの。こちらは内気功より習得が難しく、氣を使える人間でも行使できるのはほんの一握りだとか

とまぁ、本当はもっと複雑な単語を用いた説明だったが、面倒臭いのでアレンはそういう風に要約した

……しかし、だ

「いまいちピンと来ないんだよな」

言ってしまえばそれもそうなのだ。氣というのは目に氣を集約させてようやく目視することが出来る。氣を扱い慣れてる人間からし

てみればそれは常識、呼吸するかのように容易に行えるが、説明を聞いて氣がどういうものか簡単に理解しただけのアレンにとっては正直絵空事以外のなにものでもない

「ま、百聞は一見にしかずって言うし。ちょっとそこで見てなさい」

だからその一見が出来ないというのに

セリカは近くにあった手頃な岩の前で右腕に氣を纏わせる。見える人間ならその腕が薄く発光していることが見て取れるが、見えない人間（アレン）には岩の前で何をしてるんだろう程度の認識しかない

ドゴォン！！とまるで何かが爆発したような激しい衝撃が鼓膜を叩く。セリカが岩を砕いた音だった

「ワーオ……」

「ざっとこんなもんかしら。一応加減はしたけど」

加減してこれですか。岩が石になってるじゃないですか

因みに同じ真似をアレンがやった場合、間違いなく砕けるのは拳の方である

「今のが内気功って奴か？」

「えぇ。右腕に氣を纏ってるのが見え……あ、そっか、まだ見えないんだったわね」

ボケーっと口を開くアレンを見てようやくセリカはその事実に気

づく

「それじゃあまずは氣を見ることから始めましょうか」

「俺はどうすればいいんだ？」

「そうね……まずは目を瞑ってくれる？」

もしかして心の眼で見ろ的なことを言うのかなと思考を巡らせつつ、とりあえず言われた通りに目を瞑る。直後、セリカの手の平（見えてはいないが恐らく）が当てられた

「氣っていうのは目に氣を集約させることで初めて見ることが出来るの。だから今からその氣を目に集める練習をするわよ。いい？イメージとしては身体を流れる力を目に送る感じね」

「力を目に……」

しかしいざやろうとしても教わったことが抽象的過ぎてこれがなかなかに難しい。あ、駄目だ。これではただの寄り目だ

「うーん、やっぱり最初はこんなもんかしら」

「よくわかんないんだけど氣自体は集まってるのか？」

「ほんの少量だけどね。でもこれだけじゃ足りないから手を貸してあげる」

「お、おお……おお？」

なにやら温かいものが自分の目に流れ込んでくる。気分としては目が疲れた時の蒸しタオルみたいな感じだ

最初はセリカの手が温かくなったものかと思ったが、どうにもこの温かいものは自分の目の裏側まで覆うように広がって、そしてそこで留まっている

「はい。もう目を開けていいわよ」

セリカの手が離れていく。それと平行して目を開けると

「おお、おお、おおおお！」

どう？とセリカが声をかけてくるが今のアレンにはそんなものは右から左。セリカの腕が光って見える。テンションを上げるには十分な理由だ

「スッゲー！　本当に見えるぞ！　腕超光ってんじゃん！」

「そこまでは光ってないと思うけど……。あと楽しんでるとこ悪いけどそろそろ時間切れよ」

「え？　あ……見えなくなった。なんで？」

目を覆っていた温かいものがなくなると、同時にセリカの腕の発光も戻ってしまった

「あんたの目に留めておいた私の氣がなくなったのよ」

「つーことはさっきの温かいのはセリカの氣だったのか？」

「そういうこと。今の感覚はちゃんと覚えておきなさい。今後も色々と使うから」

「わかった！」

まるで子供のような元気な返事。一瞬胸がキュンとなったのは内緒である

だが目の前の大きな子供は更にキラキラとした目で「他には！？他にはなんかねーの！？」と催促してきた

「し、仕方ないわね」

冷静さを装っているが、これだけ純粋に羨望の眼差しを受けたのは初めてである。少々照れくさいが悪い気はしない

落ちていた適当な枝を拾い上げ、先程と同じ要領で、しかし今度は腕ではなくその枝に氣を纏わせる

「さっき見せた内気功にはこんな使い方も出来るのよ」

最初に砕いた比較的大きめの岩の残骸に向かって枝を投げつける。目標まで真っ直ぐに飛んでいったそれは、自分より遥かに硬い岩のなんと中ほどまで突き刺さった

「おー！」

それ以外に感嘆の言葉はないのか、なんて思いつつもセリカはやはりどこか自慢げになる

今セリカがやって見せたのは武器（この場合は枝だが）に氣を纏わせた、言わば内気功の応用のようなものだ

肉体と同様に物質も氣を纏わせれば一定の硬度を持つ。また、纏わせる氣の錬度を上げれば、剣なら豆腐を切るように岩を、槍ならば糠に釘を刺すように鉄の鎧を貫くことも可能だったりする

……とは言え、それには複雑な調整が必要なのでセリカ自身はあまり得意ではない。あの枝だって本来ならば岩を悠々と貫通するはずなのだ

だから……うん、その

「じゃあさじゃあさ！　次はこれでやってみてくれよ！」

そんな嬉々として木刀を差し出されても困るのだ

セリカがピクピクと口角を引きつらせながらゆっくりと木刀を受け取ると、一切の疑いを持たず、ただひたすらに真っ直ぐ期待の視線を向けられた

「（ど、どうしよう……）」

普段のアレンならまだ断るという選択肢があったかもしれないが、残念これは無理だ。なんだかんだで子供には優しいセリカさんなのである

たっぷり3秒間の沈黙の後、セリカは諦めて木刀の柄（つか）を握る。こうなったらやるしか――

「――!?」

柄を握った瞬間、ドクン、と木刀が鼓動した。と同時に体内を循環していた氣が一斉に木刀へと流れ込んでいく。それも、持つ時間に比例して徐々に徐々にその量は増していった

当然セリカの意志によるものではない。では一体誰が？　何が？

そんなもの決まっているではないか

「っ!!」

慌てて木刀を手放す。そのまま重力に逆らわず地面に落ちた木刀は乾いた音をたてた

「セリさん?」

「ど、どうした？　持つところベタベタでもしてたか?」

アレンはおろか、大人しく見ていたルゥまでもが急に様子を変えたセリカに駆け寄ってくる。しかしセリカは二人を気に掛けることなく木刀を睨み付けた

「（一体どうなってるのよ……）」

地面に無造作に投げ出された“ソレ”はこうして見る限りでは何の変哲もないただの棒切れ。さっき投げた枝と何も変わらない

そう、変わらないはずなのに

「（私の“氣”を吸収していた――）」

理屈は分からない。だが、確かにあの木刀はセリカの氣を自身に取り込んでいた。まるで意志を持っているかのように

奪われた氣は全体の一割にも満たない微々たる量だったが、あのまま手にしていたら遅くならない内に身体中の氣を全てを取り込まれていたことだろう

ふと気づけば蜷谷（こめかみ）の辺りから一筋の冷や汗が流れていた

「……本当に大丈夫かセリカ？　顔と髪がコントラストを奏でてるぞ」

素直に顔色が悪いと言えばいいだろう、とセリカは思う。軽く一息つくと心配そうにこちらを見つめていたルゥの頭にポン、と手を乗せ大丈夫だからと告げ、それから「うーん……別にベタベタはしてないよな？」と木刀の柄の辺りをしきりに確認しているアレンに

「……あんたは何ともないの？」

「ん？　あぁ、お前も感じたのか」

木刀とセリカを交互に見比べてから、アレンは軽く手を打った。なるほど、そういうことかと満足そうに頷くと

「不思議な木刀だよなーコレ。持ってるだけで力を吸い取られるっていうかさ。ま、俺も最初は気になってたけど慣れればどうってことも……って、なんでそんな顔してんだ？」

「……」

なんでもなにも、何故気づかない。……いや、一応気づいてはいるのか。だが、肝心の部分にまでは届いてはいない

「セリカさーん？」

「……もう一回それ貸して」

「ほれ」

再度木刀がセリカの手に渡る。柄に触れないように何度か見返すが、やはりどう見てもただの木刀。武具の類に詳しくはないセリカだが、それでも手にした者の氣を奪う木刀など聞いたことがない

――不気味。この木刀に持った印象はそれだけだ

「なーに難しい顔してるんだろうなセリカは」

「さぁ……どうしてなんでしょう」

事情を知らない二人は、頭に疑問符が浮かぶばかり。かといって声をかけられるような雰囲気でもないし、正直どうしたものか

しかし、その内にセリカはゆっくりと木刀から顔を上げ

「……話があるわ」

そう短く告げた

第１１話　最強の片鱗

「へー」

「……こんな話を聞いてもやっぱりあんたはいつも通りなのね」

表情自体はボケーッと。それでいてデフォとなった半開きの口

ついさっきまでシリアス路線を歩んでいたセリカだったが、アレンの反応により己の内に張り詰めていた空気はあっという間に霧散していた

「ぶっちゃけ力を吸われてる感覚自体は前からあったわけだし。要はそれが実は氣だったんですーってだけの話なんだろ？」

「……そうだけど」

釈然としない気持ちを堪えつつ、セリカはそれ以上の言葉を飲み込んだ

だってそうだろう。普通氣を吸い取られてるなんて知れば驚くなり怯えるなりするものではないのか。それがなんだへーって、へーって

「待てよ？　ということはあれは俺に問題があったわけじゃないのか？」

「何の話？」

あ、いやな？とアレンは前置きをしてから話し始める

「俺が５歳くらいの時の話なんだけど、親父から木刀貰って初めて素振りした時に１０回かそこらでぶっ倒れたんだよ。あれって今思えばコイツに氣ぃ吸い取られてたからなんだなって」

「あの木刀で素振りなんかしたらそうなるでしょうね。普通はその前におかしいと思うはずだけど」

「でもあの時にぶっ倒れたからこそ今の俺がいると言っても過言じゃないんだぞ？　素振りだってつい最近５０００回を越えたしな」

「……え？」

それこそ聞き流してしまいそうな気軽さで放たれたトンデモ発言にセリカは我が耳を疑う

――５０００回？

「（仮の話として……）」

最初にあの木刀を握ったときの感覚をセリカは思い出す

素振り1回につき吸い取られる氣の量を1。そして回数が増えるごとに吸い取られる氣の量も1ずつ増えていくとすると、１０回素振りをした場合、吸い取られる氣の総量は５５。つまり子供の頃のアレンの氣の量は大体この程度ということになる

数値としては多少のバラつきはあるが、一般の成人男性で１００前後と考えていい。因みにセリカはその約１０倍ほどの氣を有している。これは氣を扱う人間の中でも多い方で、独自の修業の成果とも言える

しかし、そのセリカでさえ回数にしてみれば５０回にも届かない

「（嘘……じゃない、のよね）」

アレンの手に視線を落とす

見た目の頼りなさとは対照的に分厚く、肉刺（マメ）だらけの手。確かに５０００回も振ってればぁぁなっても何らおかしくはない……おかしくはないのだが、逆にこれほどおかしいこともない

「また一人で難しい顔して……おいセリカ」

「きゃあっ！？」

「ごふぇっ！？」

考え事に集中していたせいか、呼び掛けに半ば反射的に反応したセリカは、眼前２０センチに近づいていたアレンの顔にこれまた反射的に拳を出してしまう

そして

「俺が一体何を……ガクッ」

「え、あ……ご、ごごごめん！」

第１１話　最強の片鱗

多くの店が立ち並ぶ大通り。その一角というか、端にポツンと本当に店としてやっていけてるのかと思わざるをえない古い武器屋があった

どのくらい古いのかというとセリカが一発蹴りでもくれてやればその瞬間に崩れ落ちるレベルで古い。いやこれはもうボロいと言ったほうが適切かもしれない

では何故こんな所に来ているのか、それは少々時間を遡って説明する必要がある、のだが

「俺が気絶から立ち直ってさぁもういい加減修業を開始しようってなったんだけど修業をするのに氣を吸い取るコイツだと不都合があるとかでなら武器屋で新しく剣を買おうってことになってそのついでにこの木刀について聞いてみたらいいんじゃない的な感じで現在に至ります」

句読点も置かずに、つまりはそういうことだ

「……どうしたの急に？」

「いや、なんか言わなきゃいけないような気がして。……おいコラそんな可愛そうな人を見る目で俺を見るんじゃねぇ」

とりあえずアレンの発言は無視してギィィィっと錆びた蝶番の軋む音を耳にしながら三人は脚を踏み入れる

「……埃っぽいわね」

セリカが一言。口にこそしないがアレンとルゥも同じ意見である。外装から予想できる通り、店内にアレン達以外の客の姿はない

「……誰だ？」

三人がそのまま奥に進むと店主と思わしき人物がカウンターの傍で新聞を読んでいた

「貴方が店主？」

「そうだが、此処はお前さん達みてぇな子供が来るところじゃねぇよ。とっとと帰りな」

「……っ、アレン」

セリカの口元が若干ヒクついたのをアレンは見逃さない

「なんでございましょう」

「木刀を貸して」

こういう時の女性には逆らわない方が身のためであるとアレンの経験が物語る。だが、愛用の木刀が店主の血で染まるというのなら話はまた変わってくる

「はい」

だからと言って止める勇気も実力もないのだが

セリカはアレンから木刀を受け取るとそれを木製のカウンターに置いた。どうやら血生臭いことになる未来は回避出来たらしい

「聞こえなかったのか？　俺は帰れと――」

「この木刀についての情報を聞いたら帰るわよ」

「……チッ。一体コイツがなんだってんだ」

「手にした者の氣を吸い取る木刀――って言ったらどうする？」

何を言ってるんだ。そう言わんばかりに店主は眉を顰めた。まぁ当然の反応だろうとアレンは思う

事情を知ってる立場だからこそ何の疑問も抱かないが、仮にアレンが何も知らない店主の立場だった場合「うわぁ……この子電波かよ」は確実である

対してセリカはそんなことお構いなしに「持ってみればわかるわ」とだけ返し、柄の方を店主に向ける

未だ納得がいかないものの、渋々店主は木刀を手に取った

「――！？　こ、こいつは……」

「私の言ってる意味がわかったでしょ？」

「小僧、こんなモノ何処で手に入れた？」

慎重に木刀を置いてから、セリカではなく持ち主のアレンの方に向かって問いかける

「俺の2本目の相棒に向かってこんなモノとはなんだ。因みに1本目は股間のロングソー小さい頃親父から貰いました」

「……そうか」

「オッサンの反応もそうだけど、これってそんなに珍しいもんなのか？　あと怖いからセリカはいい加減に拳を下ろして」

「この店を始めて30年。今まで腐るほど武器を見てきたが、少なくとも氣を吸い取る木刀なんて見たことも聞いたこともねぇ」

本職である武器屋の店主さえもこの木刀の存在は知らないと言う。となるとあの親父は一体どこからこの木刀を仕入れたのだろうか

しかし思い返しても浮かぶのは癪に障るニヤケ面ばかり。なんかイライラしてきたのでアレンは考えることをやめた

「一層謎が深まったわね……ま、いいわ。こっちについては殆どお

まけみたいなものだったし」

「……悪いな。代わりと言っちゃなんだが、1本だけ好きな得物を持っていってくれ」

「あら、いいの？　さっきは子供だなんだ言ってたのに」

「武器屋としてのプライドだ。それに久しく見る使い手とくりゃ断る理由なんてねぇさ」

「私もアレンもまだまだ修行中の身だけどね。でもくれるっていうなら有難く戴いてくわ」

正直なところセリカもアレンを殴ってしまったお詫びに自分の金で買うつもりだったのだが、むざむざこの機会を逃す必要はない

興味深そうに棚や壁に飾られている武具の類を眺めているアレン達に

「と、いうことよ。そっちも何か気に入ったのはあった？」

「気に入ったっていうか、アレからビビッと運命を感じた」

「……いや、あの剣はアレンじゃ無理でしょ」

嬉々とした顔でアレンが指差した先。恐らく店の看板商品なのか、一際目立つ場所にアレンの身の丈以上はあろうかという長剣がかかっていた

トゥハンドソード、またはツヴァイハンターとも呼ばれる両手剣

の種類だ。それくらいならセリカでも知っている。だからこその忠告である

ああいった長剣はその大きさ故に腰から吊るすのではなく、背負ったり肩に担いだりするもので、更に付け足すと大の男向けの剣なのだ

セリカより頭半個分大きいだけのアレンにあの剣は文字通り荷が重い。剣を振るのではなく振られているアレンの姿が容易に想像つく

「小僧、悪いことは言わねぇ。そっちの嬢ちゃんの言うとおり別のにしとけ。ほら、お前ぇさんに向けにこっちで何本か選んでおいた」

「オッサンがそう言うなら……お、これも中々にカッケーな」

カウンターに並べられた数本のうち、一番左の剣をアレンは手に取る。長さは今まで使っていた木刀とほぼ同じ。重さは鉄鋼であることを差し引いても十分に軽い

「そいつはロングソードって種類の奴だ。剣としては一般的なものだが、切れ味はそいつを打った俺自身が保障する」

「おぉ……オッサンが職人の目をしてる」

埃っぽい空気に満たされている店内だが、実は今並べられている武器も壁に掛けられている武器も、そのひとつひとつにキッチリ手入れが施されている

実際にアレンが持っている剣の刀身には一切の曇りもなく、鏡のようにアレンの顔を映し出している。店主の言っていることは恐ら

く本当なのだろう

鞘を受け取り、試しに腰から吊り下げてみる。感触は悪くない

「どうルゥちゃん、これ似合うかな？」

「はい。とってもカッコイイですよ」

ニコニコと愛想良くルゥは答える。それにつられてアレンもにやける。調子に乗ってセリカにも聞こうとしたが、残念こちらを見ていない

「んじゃ、ルゥちゃんのお墨付きも貰ったしこれにしようかな」

「こっちの木刀はどうする？　もういらねぇってんならうちで引き取るが」

「いんや、そっちも持って帰るよ。なんだかんだで長い付き合いだしな」

店主はそうかい、と少々残念に笑う

2本目の相棒というのは嘘ではない。下手すれば1本目より握っている時間は長かったりする

ともあれ、当初の目的はこれにて達成。後は戻って修業の続きだ

＊＊＊＊＊

「むむむむ……」

場所は再び街外れの広場

肩幅より少し外に脚を広げ、軽く腰を落とし、両手はそれぞれの膝、所謂中腰の体勢でアレンは唸る

「……ねぇ、もう日が暮れてきたんだけど。今日はそろそろやめにしない？」

「ま、待ってくれ！　あと少し、あと少し見えそうなんだ！」

「同じ台詞を４時間前にも聞いたわ。……あーもう、日が沈むまでだからね」

「むむむむ……」

リターンむむむ。果たしてこちらの声は届いているのか。うん、きっと届いていない

武器屋から真っ直ぐ此処に戻ってきて、それから昼休憩を除けば殆どぶっ続けでアレンの修業に付き合っているセリカはいい加減草臥れモードである

アレンが見やすいようにと全身に氣を纏わせること早数時間。氣の残量にはまだ余裕があるものの、ただ座って待つのという作業がこれがまた意外に疲れるのだ

「くそぅ全然上手くいかねぇ。……なーセリカ、なんかコツみたいなものってない？」

「そんなものあったら誰も苦労しないわよ」

「ですよねー……はぁ、俺って才能ないのかな」

「……口を動かしてる暇があるなら氣を集中させてなさい。さっきも言ったけど日が暮れるまでなんだからね」

「わかってるって。むむむむ……」

そしてやっぱりむむむ。その掛け声に何の意味があるのか甚だ疑問ではあるが、本人が良しとしているので特に口を出すようなことはしない

「（……というか、やっぱり気づいてないのね）」

才能のあるなしは確かに氣を扱う上で多少は関係してくる。しかし、セリカの軽く1万倍という正に膨大な氣量を持つアレンにとっては些細な問題に過ぎない

今はまだ氣を見ることも出来ない素人同然だが、修業を積んでセリカの段階まで氣が扱えるようにでもなれば、その強さは計り知れないものになる

「（才能がない？　……何言ってるのよあんたは。ちゃんとあるじゃない、才能に決して引けをとらない“努力”の成果が）」

これが本当に生まれ持ってのものなら嫉妬のひとつでもしていただろう。だが、長年の努力の末に手に入れたものであるならば素直に認められる

「――ま、先は長そうだけどね」

小さく息を吐いてセリカは立ち上がる。考え事をしていたらそろそろタイムリミットだ

すぐ隣で船を漕いでいたルゥを起こして帰ることを伝えてから、アレンに声をかける

「どうだった？」

「はっ、愚問だな」

「……見えなかったのね」

「……うん」

アレンはガックリと肩を落とす。どうやら本気で落ち込んでるようだった。というのも午後の修業の前にセリカから「普通の人でも氣を見ることの出来る人は結構いるわよ。ルゥも使えないけど見るだけなら出来るし」という話をされていたからである

「……コツってほどでもないけど、ひとつ教えてあげる」

というわけで、その姿に少々居た堪れなくなったセリカはつい口を開いてしまう

「きっかけよ」

「きっかけ？」

「えぇ。氣を見るだけなら何かきっかけみたいなものがあれば意外と簡単に出来るようになるわ。お昼に言ったと思うけど、一般人が氣を見ることが出来るようになるのはそれが大半の理由だし」

「つまり俺にもそのきっかけとやら訪れれば見えるようになると？」

「そういうことになるわね。まぁそんな直ぐには――キャッ！？」

セリカの言葉を遮るように、ちょうどアレンのギルドカードを吹き飛ばした時のような横殴りの風が三人を襲う

「ちょ、なんなのこの風！？　さっきまで風なんか吹いてなかったじゃない！！」

「俺に聞くな！！　つかそんなことよりルゥちゃんは――何ィ！？」

「な、何！？　ルゥがどうしたの――って」

ルゥの格好　（ミニスカート）＋横殴りの風＋寝起きで頭が回らずとりあえずアレンから貰った帽子を抑えるルゥ

＝天使の悪戯（パンチラ）

「水色と白のストライプ…だと……」

風が止むまでの僅かな時間、とりあえず全力でガン見である

「……（トントン）」

「ん？」

肩を叩かれる。アレンが振り返ればそこには右手が薄く発光したセリカがニッコリと

「……あ、あの、俺の勘違いじゃなければ……その、右手が光ってるような気がするんですが」

「あら、きっかけが見つかってよかったじゃない。……で、言いたいことはそれだけ？」

「……ストライプっていいよぬぐぁ」

第１１話　最強の片鱗（後書き）

タイトル詐欺もいいとこです。あと更新遅れてすみません

パンツの柄で１時間悩んだことに後悔はしていません

第12話　満身そぉい！

ドゴン、ズドン、そしてとどめにバキィッ

およそ人間からは鳴ってはいけない重低音のオンパレードと思わず目を覆いたくなる痛々しい光景が、もうかれこれ2時間程

「ルゥちゃん……俺まだ上半身と下半身くっついてる……？」

「い、一応は……」

打撲や擦り傷などで見るからにボロボロの身体を地面に預けているこの男の名はアレン。手にはこの間購入したばかりのロングソードが握られている

そして

「何やってるの。まだ終わりじゃないんだからさっさと立ちなさい」

「あ、悪魔め……」

腰に手を当てながら既にズタボロのアレンにドS発言をしている赤髪の女の名はセリカ。こちらは傷ひとつない綺麗な身体をしていた

この二人は修業と称して2時間ほど前まから実践稽古なるものを続けている。傍（ルゥ）からすれば一方的な暴行にしか見えないが、そこの

ところは双方の理解があるらしい

「……ったく、ちょっとは手加減してくれてもいいだろうに」

そう言いつつ、生まれたての子馬のように非常に危なっかしい足取りでよたよたとアレンは立ち上がる

「そんなことしたら修業の意味がないでしょ。それともあんたは手加減してもらわないと私に一撃も当てられないの？」

「――ナメんなァアアアアアア！！」

「そうこなくっちゃ……ねっ！」

数秒後、今日一番の嫌な音がした

第１２話　満身そぉい！

目に氣を集中させながらの実践稽古――セリカ曰く「こうした方が時間の短縮になるでしょ」ということらしい。確かにそれらをいっぺんにこなすことで時間の短縮にはなっているが、つまるところそれに伴う疲労もいっぺんに来るわけで

「……身体中から悲鳴が聞こえる」

回数にしてみれば５７回という度重なる特攻。そして同じ回数だ

けの粉砕

当たって砕けろなんて言葉があるが、砕け過ぎて粉微塵になってしまった場合はどうなるのか、それを知るのは今のアレンだけだ

一方のセリカと言えば、軽いジョギングを終えた後のように優雅にタオルで汗を拭いつつ

「じゃあ私とルゥは先に準備を始めてるから、アレンも動けるようになったらこっちを手伝って」

「おう……」

意志を持っての返事なのかというのはまぁさておき、もう太陽が山脈に隠れるように半分以上沈んでいる

今朝早くにレントリア領国を出た三人だが、次の街までは徒歩で約2日ほどの距離があり道中に立ち寄れそうな村もない。よって本日はアレンが旅を始めて最初の野宿である

いつものアレンならばここで無駄にテンションが上がってセリカに窘められていただろうが、生きてるか死んでるか微妙なラインの今のアレンにそんな元気はない

「（……今日から素振りの量を3倍に増やしてやる」

ただ、持ち前の負けん気だけは衰えることを知らない。いくら実力差があるとはいえ、こうも一方的にボコボコにされて触発されないわけがないのだ

動かない身体を広大な大地に横たえながらアレンは小さな決意を胸に秘める。正直3倍は言い過ぎたかもしれないという後悔と共に

「……ん？」

僅かにそよぐ風に乗り、なんとも胃袋を刺激する香りがアレンの鼻に届く。そしてその発信源にいたのはセリカとルゥの二人

身体が痛むと言っても三大欲求に人間は勝てない。よたよたふらふらとアレンは二人に近づき声をかける

「いい匂いがするけど、二人してなんか作ってんのか？」

「簡単なものばっかりだけどね。ほらお昼に近くの湖で魚を獲ったじゃない」

「あーそんなこともあったような……つーか腹減った」

パチパチと焚き火に当てられ魚に焼き目がつく様子は、嗅覚だけではなく視覚的にも美味しい。ルゥの方は茸のスープで、こちらも同様に美味しそうな匂いが漂ってくる

「んで、俺は何を手伝えばいい？　言っておくが料理は全く出来んぞ」

「最初から期待してないわよ。そうね……アレンは薪を拾ってきて」

「了解。流木みたいなサイズの奴拾ってくるわ」

「普通の薪でお願い」

へいへいという軽い返事を残し、アレンはセリカに言われたように薪を拾うべく森の中へ入っていく

と、それを心配そうに見つめるルゥは

「……アレンさん一人に任せていいんでしょうか？　さっきまであんなにボロボロだったのに……」

「大丈夫でしょ。ちゃんと手加減もしたし。……でもね、ひとつ気に食わないのが“アレンも私に対して手加減してた”ってことなのよ」

「……え？」

「見てて気がつかなかった？　あいつ一度も私の顔を狙わなかったのよ」

尤も、狙われたところで今のアレンの攻撃など簡単に防げはするのだが、セリカの思うところはそんなことではない

自分より遥かに上の実力の相手に対して手加減。表面にこそ出さないが、そう口にしたセリカの声音には確かな感情が篭っていた

その正体は怒り、そして呆れ。前者は手加減されたことに、後者は自分を女として気遣ってることに

「それはなんというか……アレンさんらしいですね」

ルゥは笑みを洩らし、セリカは溜息を吐いた

意識してのことか無意識でのことか。どちらにせよ不器用極まりない優しさである

「普段は全然そんな素振りを見せないくせにこういう時だけ女扱いとか……」

「でもやっぱり女の子として意識してくれてるって嬉しくならないですか？　少なくとも私は嬉しかったですよ？」

「……まぁ、否定はしないけど」

ニコニコと笑うルゥを見て若干セリカは言葉に詰まる。嬉しくないと言えば嘘になる。だけど、だけど、やっぱりどうしたって背中がこそばゆい

育ってきた環境もあってか、同年代の異性と交流すること自体少なかった。当然女の子扱いだなんて経験は殆どない。しかも普段のアレンがぶっきらぼうなだけに余計にタチが悪い

「……そろそろアレンも帰ってくるだろうしこの話はもう終わりね。わかった？」

「それはいいですけど……って、セリさんお魚が」

「へ？　……あ」

「いやー食った食った。腹いっぱいだ」

ポッコリ膨れたお腹を摩りながらアレンは言う。魚が少々炭化していたことを除けばとても満足のいく食事だったと言えよう

「……口の中が苦い」

「ほれみろ。俺が食ってやるって言ってんのに3匹も炭魚食うから」

「う、うるさい。失敗したのは私なんだから私が処理して何が悪いのよ」

「別に悪いとは言ってねーよ。いいから水飲んどけ水」

いつかのお返しだと手渡された水をセリカは渋々受け取り、コクコク喉を鳴らしながら呑むと、ようやく口の苦味が流れていった

「にしても、普通魚を焦がすまで話に熱中するか？　二人して一体何の話してたんだよ」

「――！？　ゴホッゴホッ、あ、アレンには関係のないことよ！」

「わかったから少し落ち着け。水の飲んで咽(むせ)てたら意味ないだろ」

どうどうと暴れ馬を宥めるように、アレンはセリカの背中を摩る。女二人の話の内容が気にならないわけでもないが、触らぬ神に祟りなしという言葉もある。関係ないというのならそうなのだろう。変に首を突っ込むこともない

セリカの呼吸が落ち着くのを確認すると、アレンは木刀を手に取りのっそりと立ち上がり

「よーし、じゃあ腹ごなしの運動といきますか」

「素振りも結構だけど、夜の森は魔物にとって恰好の狩場なんだからあんまり遠くに行かないようにね」

「おいおい。俺を誰だと思ってるんだ？」

「スライムに苦戦する程度の男」

「否定出来ないのが辛い」

事実であるだけにそれ以上は言い返せない。やはり素振りの量を3倍に増やすべきかもしれないと一人考えるアレンだった

＊＊＊＊＊

「……うーん、上手くいかん」

どうせなら素振りも目に氣を集中させながらやろうと画策していたアレンだが、木刀を掴んだまま小さく唸っていた

昨日のきっかけにより氣を見る感覚自体は掴めた。しかし、せっかく目に氣を集中させようとしても木刀がそれを邪魔する

「でも今更もうひとつの剣を持ってくるのは面倒だし……このまま

でいいか」

持ち前の適当さでアレンは納得する。そしていつものように木刀を上段に構え振り下ろすと、鋭い風斬り音が心地よく耳に響いた

寝る前の軽い運動というのも間違いではないが、夜、しかもわざわざ人気のない場所で素振りをする理由は実はここにある

「静かな空間に響き渡るこの音……やっぱ何回聞いてもいいな」

至極単純かつくだらない理由。どんなフェチだと問いたくなるところだが、アレンは満足気な表情でそのまま同じペースで１０００、２０００、３０００、４０００とほぼノンストップに振り続ける

「――っしゃあ５０００回ィ！！」

一区切りの意を込めて渾身の力を込めて振り下ろす。最近はいつもこのあたりで止めていたが今回は違う。ほぼ確実に実現は無理だろうが、一応目標は3倍の１５０００回である

幸いまだ余力はある。どうせならこのまま限界を超えてしまおうそうしよう的なノリで、セリカに注意されたことを完全にスルーのアレンはうおおおお！！と木々をざわめかせるほどの声をあげながら己の限界に向かってひた走る

「よし！　もう無理！　頑張った俺！」

そこから更に３００回振ったところでアレンは木刀を手放す。それと同時に膝から一気に力が抜けてアレンはへたり込んだ

目標には未だ遠く及ばないものの、昔より1日ごとに増やせる回数は多くなってきている。この調子ならば恐らくそう遅くならない内に達成出来るだろう

「あっちぃ……」

日中よりは涼しいがそれでも夏の夜は暑い。がむしゃらに振り続けたせいで全身は汗でビチャビチャ。不快度指数はマックスを計測している

だが、汗を流そうにも宿屋と違って風呂はない。服は着替えればなんとかなるかもしれないが汗はどうしようもない

「……そういえば近くに湖があったような」

ルゥに昼間見せて貰った地図では此処からそれほど遠くない場所に小さな湖があった。出来れば熱い湯船に浸かりたいが、この際贅沢は言ってられない

「――ヘックショイ！　んあ〝ー…そうと決まればこんなところでノンビリしてる暇はねぇな。このままじゃ風邪ひいちまう」

確かこっちの方角だったよなーと、曖昧な記憶を頼りにアレンは歩き出す。幸いなことに少し歩くだけで湖は発見出来た

アレンはすぐさま来ていた服を投げ捨てるように脱ぐと、少々高台になっている所から前方宙返りで飛び込んだ

着水と同時に盛大な水飛沫が上がり

「うおーやっべー超気持ちいい！　でも傷に染みて超痛ぇ！」

無駄に高いテンションでアレンはやんややんや騒ぎ立てる

「……あ、アレンさん？」

「はい、私がアレンさんです。……ってあれ？」

とっても聞き覚えのある声が背後、位置的には浅瀬の方から聞こえてきた。人間は一種の習性として呼びかけられれば振り返る。当然例に漏れることなくアレンも背後を振り返る

するとそこにはアレンと同様、一糸纏わぬ姿の白髪の少女が腰の辺りまで水に浸かった状態で呆然と立ち尽くしていた

「……き、奇遇だねルゥちゃん。そっちも水浴びだったり？」

少女の正体――それは癒し系狼少女と名高いルゥだった

雲ひとつない空に浮かぶ月の明かりに照らされた少女の裸体は神秘的な美しさを誇っていた。特に年齢通りに発育した緩やかなかつ女性的な身体のラインがこう――

「いやあああああああああああ！！」

「ですよねー！！」

しかし、それだけでは終わらない

「今の声は何!?　どうかしたの!?」

「アンハッピーセット！！」

ルゥの悲鳴を聞きつけ慌てて様子を見に来たのは赤髪の少女、というかセリカ。二人で水浴びをする予定だったのかこちらも肌に何も身につけていない

二人の少女の裸を目の当たりにするという正直爆発してもいいんじゃないかなってレベルの出来事に遭遇したアレンだが、当の本人はそれどころではない

「な、なんでアレンが此処にいるのよ！！　……まさか覗き！？」

「違う！　別に覗きとかそんなんじゃ――そうだ！　これを見ろ！　俺だって水浴びに来てたんだ！」

「「――――！？」」

誤解を解くためにアレンは仁王立ちで自分も裸であることを見せ付ける。そう、これは故意ではない、偶然が生んだ事故（エロハプニング）なのだと

ただ、必死になり過ぎて別のモノまで見せ付けてしまっていることにまでは気がついていない。これが馬鹿と呼ばれる所以である

「な、な……」

「よく見ろ全ては事故なんだ！　つかどうせならもっと近くで確認しろ！」

「――近寄らないでえええええ！」

「たわば！？」

水を掻き分けセリカに近づいたところで放たれるカウンター。アレンはそれを顔面にもろに喰らい水切り石のように１７回程湖面を跳ねた。結構な記録だった

第１２話　満身そぉい！（後書き）

１２話でお気に入りが９件ということは、つまり２４話なら１８件、３６話なら２７件、４８話なら３６件、６０話なら４５件ということに……なったらいいですね！

第１３話　それは素早く脱兎の如く

ぐぃーっと。寝起きの身体のスイッチを切り替えるようにアレンは盛大に伸びをする

日光を遮る厚手カーテンを開け、その奥にある窓も開ければ、篭った熱気と入れ替わるように新鮮な空気がそよそよ

そんな夏の空気を胸いっぱいに吸い込み、ぶはーっと吐いてから

「今日も暑くなりそうな天気ですなぁ」

早朝ということでまだお日様は本調子ではないようだが、あの煌きを見る限りではそれも時間の問題。あと数時間もすれば頼まれもしないのに熱光線を浴びせてくることだろう

夏自体は嫌いではない。むしろ世の女性たちが薄着になるのでその点に関してはお日様万々歳。でも自分が暑いのは御免被る――などという流石と言わざるを得ない持ち前の駄目人間理論を構築するアレンは

「さて」

胸に手を当て軽く一呼吸。次いで自分の頬をむにぃと摘む。痛い、やっぱり夢じゃない

「スー…スー…」

定期的なリズムで聞こえる寝息は方角的にアレンの背後からで、距離的にちょうどさっきまでアレンが使っていたベッド云々かんぬん

――最初は夢だと思っていた。というか今も半分くらい夢なんじゃないかと疑っている。しかし、頬に走る痛みがそれを否定する

「なーんで俺の部屋のベッドでルゥちゃんが寝てるんだろうね」

基本的な部屋割りはセリカ&ルゥとアレンの二部屋。昨日だってそのように部屋をとったはずなのだ。それがなんだってこんなことに

第13話　それは素早く脱兎の如く

――ドンドンドンドン!!

「ぬぅあ!?　な、なんだ!?」

鳥の囀りと寝息しかなかった部屋に突如舞い降りた爆音の連発。2W1H（何時、何故、どうやって）について悶々としていたアレンはいきなり楽器のように叩かれる扉に驚いた様子を見せるが

「起きてる!?　つか起きなさい!!　ルゥがいないのよ!」

扉の向こうから聞こえてきた声とその内容によって驚きは更なる

ものへと昇華した

――やばい

アレンの脳裏に最初に浮かんだのはそんな短い単語。しかし、その一言には結構な数の意味が含まれている

例えばアレンが今現在パンツ一丁であること。……といってもこれにはちゃんとした理由があって、アレンが不思議な感覚に目を覚ました時、その両腕に抱きかかえられるようにして眠っていたルゥは、ちいさな手でしっかりとアレンのシャツを掴んでいた

一応押したり引いたりつついたり揉んだり（ほっぺを）はしたものの、ルゥの手がシャツから離れることはなく、ひとまず着ているシャツを脱ぐということでＦＡ。仕方なくこのような格好になってしまっているというわけだ

次に例を挙げるとすると、現在進行形で男の生理現象真っ只中であること。こちらも仕方ないといえば仕方ないのだが、まだ少女と呼ばれる年齢の女の子がベッドで寝ている傍でパンツに山脈を形成している男――いや、うん、これはもう完全に無理だろう、無理無理。何が無理って説明するのも憚られるほどに無理である

しかもご丁寧に掛けたはずのない部屋の鍵が掛かっている。恐らく状況から察するにルゥが掛けたのだろうが、それが余計にアレンの首を絞める結果へ繋がっているのだからもう軽く涙目である

「ん……んぅ…」

「!?」

8ビートで刻まれる扉ドラム。音は波形で空中を進むのだから当然ベッドですやすやと寝ていた少女の耳に届いたっておかしくはない

寝るときは帽子を脱ぐのか、真っ白な毛で覆われている耳をぴくぴく動かしながら、ゆっくり上半身を起こし

「セリさんどうしたんですかぁ……？　ふぁあ……わふぅ」

「その声はルゥ！？　やっぱりそっちにいたのね！」

「あれ、声はするのにセリさんはいない……んー？」

未だに事情を把握していないルゥはキョロキョロと部屋を見回し同室の相方であるセリカを捜す。されど声は聞こえてもその姿は捉えられない

そして場所的にはその直ぐ下。ベッドと床と僅かな隙間に逃げるように飛び込んだアレンは

「（……咄嗟に隠れはしたけど、実際こっからどうすりゃいいんだろう）」

幸いにしてルゥに姿は見られていない。しかし、状況が沈静化したかと言えばそうではない。でもとりあえずナイス反射神経俺、と自画自賛しておく

「（だがこれは……思いの外キッツイな）」

何が？　ナニが

うつ伏せでベッドの下に潜り込んだ為に、バーニング中の愚息が割りとアレな感じになってしまっている。父親が生命のピンチだというのに何故もっと謙虚になれないのかと叱り付けたい気持ちで一杯、状況的にもいっぱいいっぱい。そんなアレンは１８歳になったばかり

「――ハァッ！！」

と、セリカの掛け声がしたかと思えば次の瞬間、部屋と廊下を区切るはずの扉が金具ごと弾け飛び、同時にセリカが「大丈夫！？」と部屋に乗り込んできた。拳か蹴りか、少なくとも扉は大丈夫ではないだろう

「わ、わ。そんなに血相変えてどうしたんですか？」

「どうもこうもないわよ！　なんでアレンの部屋にいるの！？」

「アレンさんの部屋……？」

言葉の意味を確かめるようにルゥは２回瞬きをして、それからもう一度ぐるりと視線を部屋一周させた。１人部屋も２人部屋も造りは同じ。だが、窓や壁の色、小さく置かれたテーブルやベッドの位置が記憶と一致しない

「……気づいたみたいね」

「な、なんで私はアレンさんの部屋にいるんですか！？」

「こっちが聞きたいくらいよ。……まぁ大方、夜中トイレに起きて

そのまま部屋を間違ったとかだと思うけど」

「（なるほど。俺の知らん間にそんなことが）」

ベッド下で一人納得するアレン。しかしこれからどうするアレン

アレンから見えるのはセリカの膝まで、ちょっと頑張ればスパッツまで見えないこともない。だがセリカが少し屈めばバッチリ目と目とが合ってしまう。警戒態勢のセリカの前ではヘタに動くことも出来ず、なすすべなくそしてやることもなく

「（……足でも見てよう）」

消去法を使い生脚を選択。だがそちらに目をやったばかりにアレンは大きな見落としをすることとなる

「で、肝心の部屋の主はどこに行ったの？」

「（貴様の足元におるわ！　って言えたら楽よね）」

言うも難し行うも難し。仮にこの状態で見つかったとすると多分ベッドごとグシャリ、である

「あれ……？」

意識することもなくただ普通に周囲の匂いを確かめたルゥだが、そこに僅かな違和感があった

アレンの部屋ということもありアレンの匂いが付いているのは当然のこと。何故かガッチリ掴んでしまっているアレンの物らしきシ

ャツからも一際濃い匂いがする。しかしその匂いの大本、セリカが現在進行形で捜しているアレン本人の匂いが自分が今いるベッドの下からするのである

「どうかした？」

「あ、いえ、その……多分トイレにでも行ったんじゃないでしょうか？」

「内側から鍵が掛かってたのに？」

「それは……そ、そこの窓から飛び降りたとか！」

「3階からなら大丈夫だろうけど、でもトイレくらいでわざわざ窓から飛び降りたりする？」

正論のオンパレード。もとい、とても常識的な意見がルゥを口ごもらせる

――自分の鼻が正しければ、アレンはベッドの下に隠れている

どういう理由でかは当人ではないのでわからない。けれども自分が今置かれている状況を最初からひとつずつ整理していくとおのずと答えは見えてきた

「……どうも変ね。ルゥ、何か隠してない？」

「隠してませんよ。毛も身も心も清廉潔白なんですから！」

「わ、わかったわよ」

普段は殆ど見せることのない強気のルゥに、セリカはたじる（たじたじになるの意）

そして肝心のアレンといえば

「（ほう……こうして見るとスパッツも……ほう）」

割と残念な感じだった

＊＊＊＊＊

「いなくなった猫の捜索……なぁ、セリk」

「駄目よ」

壊したのはセリカなんだからセリカ一人でいいんじゃないのか、というアレンの意見は当たり前のように聞き入れてもらえることはなく、ドアの弁償代も含め、これからの路銀の為に三人は朝食後に街の中心に位置するギルドに訪れ手頃な依頼を探していた

しかし今のようにアレンが依頼要項を持ってきてもセリカは一瞥することなく却下してしまう。というのもアレンが持ってくるのは新人或いは下級ランカーが受注するような簡単な依頼ばかりで、しかもその殆どが雑用となんら変わらないものばかりだったせいである

周知の事実ではあるが今一度説明しておくと、報奨金の高さは依頼のランク、危険度などに応じて変動する。同じ下級ランカー向けの依頼でも魔物討伐と薬草の材料採集などでは大きく異なるのはこのせいだ

その地に身を置き平穏に暮らしていくというのであればそれこそ低いランクの依頼を数こなしていけばよい。しかしセリカ達のように旅を続けるものからすれば、街毎でちまちまと小金を稼ぐより大きな依頼をひとつ受けたほうが何かと効率がいいのである

「うーん……」

冊子状になっている依頼要項をペラペラと本を読むように目を通しながらセリカは唸る

出来ることならば先日レントリア領国で受けたような手頃（セリカ的には）な依頼が好ましいのだが、街の規模と周辺の環境のせいかセリカの目に止まるようなものが見つからない。セリカ一人ならば仮にＢ＋やＡ－の依頼でもいいのだが、相方となるＧランク（先日の依頼で上がった）のアレンの実力的に無理なのである。ここ数日の鍛錬でなんとなく形にはなっているが、それでもまだまだ付け焼刃に過ぎず、仮に自分の身に何か起きたときに代わりにルゥを護らなければいけない立場としては少々心もとない

パタンと冊子を閉じてセリカは立ち上がる。疲れた目を解し身体を捻って固まった腰や背中を鳴らす。途中横からアレンに「年寄りかお前は」と言われたので殴っておいた

「ん？」

腰を鳴らした時にふと視界に入った掲示板に貼られた一際大きな紙。それに気づいたセリカは紙に目を走らせ、それから薄く微笑んだ

「おいおい、一体何見てにやけて――ハッ！？」

にやけるセリカに近づいたアレンはその視線の先を確認するやいなや顔を硬直させる。だが、そこからの行動は早かった。左足を一歩後ろに引き、自然な動作で身体を反転。蹴り出す右足に力を込めて、脱兎の如く地面を――

「何処に行くの？」

「えぼっ」

背後から襟首を掴まれ思い切り首が絞まる

「は、放せ！　俺は部屋に戻るんだ！」

「その部屋のドアを直す為に此処に来てること忘れてない？　というか少しは私の話を聞きなさいよ」

「そんなことしなくても今見てたそれが全てを物語ってるわ！」

アレンはぶらんぶらん宙吊りになりながら先ほどまでセリカが見ていた掲示板に貼られている紙を指差す

“武芸大会予選開催のお知らせ”――そう書かれた紙を

第１３話　それは素早く脱兎の如く（後書き）

全然余裕でしたし

マジやばい３１日に更新出来ないかもうわあああああとか思ってなかったですし

次回からようやくファンタジーっぽくなるような、ならないような

そんな感じの１３話です

第１４話　通りすがりのかませ犬

セリカが冒険者ギルドで見つけた　武芸大会の告示――その正式名称はキングベル武芸大会という。１年に１度、大陸中心にある王都キングベルで行われる由緒正しき武芸大会である

歴史は古く、最初に大会が行われたのは今から５０年程昔。当時のガランド大陸の東西南北それぞれを統括する国の王が自国の力を示す為に、実力者を集めて何処の国が一番か決めようとしたのが始まりと言われている

各国の代表が集まる武芸大会ということもあり、そこで優勝するとその名は大陸中に轟く。無論それだけではなく優勝した際には賞金が与えられることも約束されている。だが、やはりその分参加者の数も多く、今回のように各国各地方で予選が行われ、ある程度の人数まで篩いにかけられるというわけだ

「――では、セリカ・ロレンツ、アレン・フェンデの両名は２週間後に行われるキングベル武芸大会の予選に参加するということでよろしいですか？」

「はい」

「……はい」

「それではこちらが大会の規定となっておりますので目を通してお

いてください」

そう事務的に告げると受付の男性は「次の方どうぞ」と、後ろに並ぶ参加者にも同じような説明を始める。アレン一行は列から外れるとそのままギルドの外に出て

「すぅぅぅぅぅぅ……ばあぁぁぁぁぁぁぁ……」

貰った書類を手にアレンは魂まで吐き出してしまいそうな溜息をついた

「もーいつまで辛気臭い顔してるのよ。こっちまで気が滅入るじゃない」

「……誰のせいだと思ってんだ。セリカも見ただろあのメンズを」

申し込み締め切りが近いこともありアレン達の後ろにも結構な数の男達が杜撰な列を作っていた。剣や槍、斧に槌などを持っている者まで多種多様。しかしそれら全てに共通して言えるのは皆“強そう”ということである

武芸大会というくらいなのだから要はあの男達と戦うこともあるのだろう。だが、ランカー駆け出しというかそもそもスタートダッシュから波乱万丈だったアレンにとってそれはそれは憂鬱だった

「アレンはいちいち心配しすぎなのよ。ああいうのは結構見掛け倒しが多いんだから」

「そんなもんかね。俺にはとてもじゃないがそんな風には見えんかったが」

「人は見かけによらないものよ。どっちの意味でもね」

「ということは俺も向こうから見れば強そうに……ねぇなんで目ぇ逸らすのねぇ」

第１４話　通りすがりのかませ犬

ギルドで武芸大会の告示を見つけてから早数日、申し込みのこともあり三人はガランド大陸の西の代表を決める予選会が行われるロサナという街を訪れていた

此処ロサナは王国領の中でもかなり珍しい冒険者ギルドが自治する区で、その言葉に違わずギルドも他の街とは比較にならないほど巨大な建造物となっており、また実際に予選会を行うギルドに引けをとらない大きさの闘技場が存在する

そしてその闘技場へ続く大通り、これがまたとてつもない賑わいを見せていた。まだ昼間だというのに酒を片手に楽しそうに笑っている者、これを機にと３つも４つも屋台を出す店主やお互いの近況の情報を交換する行商人など、視界に入るだけでも様々だった

「毎年この時期になると武芸大会の予選参加者が各地から押し寄せてくるらしく、それでこんなお祭り騒ぎになっているんだと思いまふっ」

最後まで言い切る前についさっきそこの屋台で買ったばかりの骨付き肉にルゥは大きな口を開けてかぶりつく

「本番までまだ１０日くらいあるのにこの調子ってことは、当日はもっと凄いことになりそうだな」

「当日は闘技場の方に人が集まるらしいから逆にそうでもないらしいわよ？　祭りのピークは本番前日だって聞いたわ」

「まぁ前夜祭って言葉もあるしそんなもんか。……ん？」

出店や行き交う人々に適当に視線を巡らせていたアレンはその中に見知った影を見つけ、無意識の内に歩先をそちらへ向ける

「おーおー、どっかで見覚えあるなーと思ったらやっぱりあの時の人か」

「おや、あなたは」

以前と同じように大きな背負い鞄を横に簡易折り畳み椅子に座っていた青年はアレンを見て「お久しぶりです」と、あの時と変わらない香りでいうなら柑橘系のような爽やかな笑みを浮かべた

「見たところ行商人みたいだけど……この人アレンの知り合いなの？」

「知り合いっていうか、セリカとルゥちゃんにあげたアクセサリーはこの人から買ったんだよ」

アレンがそう言うと青年はぺこりと頭を下げ

「初めましてお嬢様方。行商人のクォーツと申します」

「ええ初めまして。私はセリカ。隣にいるのがルゥよ」

こちらも軽く会釈。ルゥもかぶりつくのは一旦中断して頭を下げる

「そして俺が巷で超絶イケメンと名高いアレンというものです」

「セリカさんにルゥさん。そして超絶イケメンのアレンさんですね」

「……どうしようセリカ。なんか凄く恥ずかしくなってきた」

「だったら最初からボケなきゃいいでしょ……」

「この時期にこの街にいるということはあなた方も武芸大会に出場なされるのですか？」

「あなた方もって、もしかしてクォーツさんも参加するのか？」

アレンがそう言うと青年は表情を崩さずに一言断りを入れてから

「私は行商人としてこの街に訪れたものでして。毎年この時期は物流や情報の交換が盛んになるので私のような行商人にとってはそちらのほうがより重要なんですよ。此処に来るまでも多くの行商を見かけませんでしたか？」

「あーそういえば確かに」

「皆、考えることは同じということです。ふふ、丁度いい機会です

し、また何か買っていかれてはどうですか？」

「おっとその手は食わんぜ。……というよりお財布事情が現在結構辛辣でな」

「それはそれは。ではそちらのお嬢様方はどうですか？　しがない行商ですかこれでも結構な数は取り揃えていますよ？」

青年の前には最初にアレンが見たときより更に色とりどりの宝石やアクセサリーなどが数多く並べられていた。以前は2つのアクセサリーを１０００ゴールドで買ったアレンだが、こうして見るとどれもこれも一級品のような輝きをしており、今更ながらにあの値段で買ってよかったのだろうかと思ってしまうほどだった

しかし、肝心の女性陣はというと

「私は別に」

「わ、私も特に欲しいものは……」

この有様である。もともとそういった物の類を身につけないセリカは勿論のこと、一応興味がないわけでもないルゥも、目の前に並べられた数々の宝石より右手に持っている肉が気になって仕方がない様子

「……なんか申し訳ない」

「いえ、こちらこそ無粋なことを聞いてしまって申し訳ありません。お嬢様方は既に素敵なモノをお持ちでしたことを失念していました」

ピアスと首飾り、それぞれを視界に捉えながら青年は苦笑する

「しばらくは此処に滞在してるんだろ？　なら今度財布に余裕がある時にでもまた寄らせてもらうよ」

「はい。そのときは是非ともよろしくお願いします」

ニコニコと笑う青年に少々罪悪感を覚えつつ、アレンは二人と一緒にそこを後にした

＊＊＊＊＊

「悪いな。うちはもう一杯なんだ」

「そう……わかったわ」

平坦な声でセリカは踵を返す。若干立て付けの悪い扉を開けて外に出ると、アレンが声をかけてきた

「どうだった？」

返事は溜息。アレンもそれだけで事情を察したのか困ったように頭をかきながら

「８件回って全滅か。参ったなおい」

日が傾き始めた頃、三人は今日の宿を決めようと周辺の宿屋に足を運んだ。しかし、予選参加者や商人で溢れかえる街の宿屋は既にどこも満室で、返ってくる言葉は「部屋は空いてない、余所へ行ってくれ」とのこと

「時期が時期だけに予想出来ないわけじゃなかったけど……日も暮れてきたし、このまま宿が決まらないなら今日も野宿になりそうね」

「どうする？　もう野宿用の買出ししておくか？」

「一応そうしましょう。でも出来れば屋根のある場所で寝たいわ」

「そりゃ俺だって同じだ。ま、買い物ついでに探すくらいの気構えでいこうぜ。何事も期待しすぎるのはよくねぇってな」

そうして街道を歩きながらその都度必要なものを購入。最後に食料品を買おうとそういう店が多く立ち並ぶ通りにやってきた三人だが、突如聞こえてきた男の怒声で順調だった足取りが止まる

「なんだなんだ。こんな往来の場で喧嘩か？」

「……残念。喧嘩なんかよりよっぽどタチが悪そうよ」

喧騒の発信源を見てセリカは眉を顰める。二人もつられてそちらに目をやると、いかにも悪そうといった風貌の男が地面にへたり込む少女に怒声を浴びせていた。少女は買い物途中だったのか、茶色の紙袋が地面に無造作に投げ出されていて、その中身である果物や野菜などがあたりに散乱している

「っざけってんじゃねぇぞ小娘が！！　俺様はキングベル武芸大会

の優勝候補だぞ！？　その俺様にぶつかっておいてゴメンナサイで済むわけがねぇだろうが！！」

「……あぁ、ありゃ面倒くさそうだ」

こちらは心底嫌そうに。少女はひたすらに頭を下げているのにぶつかったくらいであそこまで粘着するところを見ると明らかにイチャモンだということがわかる

人目もあるのでアレンとしては出来れば話し合いで冷静に納めたいところだが、厄介なことにアレン軍勢には正義感が強く血の気の多い女がいる。その女はアレンに手荷物を預けるやいなや台風の目へ飛び込んでいくと

「待ちなさい！」

少女と男の間にその身を割り込ませ、一回りも大きい相手に向かって正面切ってそう言ってのけた

「あぁ？　なんだテメェは。邪魔すんじゃねぇよブッ殺されてぇのか」

「話は聞かせてもらったわ。ぶつかったくらいであんた馬鹿じゃないの？　何回も謝ってるんだから許してあげればいいじゃない」

「うっせぇんだよ！！　俺の身体に傷ひとつでもついてたら責任とれんのかよ！！」

「あら、優勝候補だなんだって吠えてたくせに女の子にぶつかっただけで傷がつくような貧弱な身体してるの？」

「……吐いた唾は飲めねぇぞ女ァ。この俺に喧嘩売ったってことは覚悟は出来てるんだろうな？」

男の目が獰猛な獣のそれに変わる。腰に下げた剣を鞘から抜くと切っ先をセリカに向け

「冥土の土産に教えてやる。俺様の名前はウブゴァ！？」

「いちいち御託が長いのよ。えっと……ウブゴァさん」

間違いなくウブゴァさんではないと思うが特に気にすることもない。セリカはひょいひょいと散らばったものを拾い集めると、それを買い物袋に戻し呆然と自分を見つめる少女に手渡した

「怪我はない？　一人で立てそう？」

「え、あ……すみません、腰が抜けて」

「あんな目に遭った後だしね、無理もないわ。今助け（パシリ）を呼ぶからちょっと待ってて」

「呼ばれた気がして。俺はその子を運べばいいのか？」

「ええ、お願い。私はちょっと後始末してくるわ」

「……なるべく穏便に済ませろよ」

「善処するわ」

ひらひらを手を振り、セリカは蹴り飛ばしたウブゴァ（仮）に近づいていく。そして一言二言呟いたかと思うとウブゴァ（仮）は恐怖に全身を震わせ足を縺れさせながら全力で逃げて行った

「（……何言われたのか想像もしたくねぇな）」

あれだけ威張り散らしていた男が無様に逃げ出すのだからそれはもう想像を絶するほどの恐怖だったのだろう。それをわざわざ自分に置き換えてみるだなんてそんなそんな。言語道断絶対にお断りである。危ない橋は必要な時以外渡らない。それが男アレンのモットーなのだ

「あんなのが優勝候補だなんて大陸一番の武芸大会ってのもあんまり期待出来るものじゃなさそうね」

「ありゃどう考えても自称だろ。それよりこの子は何処に運べばいいんだ？」

「買い物途中だったみたいだしとりあえず家まで運んであげましょう。荷物は私が持つわ」

「はいよ。んじゃちょっと失礼――っと」

「へ？」

「おおすんげー軽い。そんで家ってどのへん？」

「あ、あ、あああのあの」

お決まりというかお約束というか。左腕は膝の後ろ、右腕は背中

に回したそれの名前はズバリお姫様抱っこ

「んー？」

「いえ……なんでもないです」

ぷしゅうぅぅ……と腕の中で赤くなる少女。腰が抜けて立てないとはいえ公衆の面前でこれは恥ずかしい。尤もやっている方は全然全く気にも留めていないのだが

「……（ゲシッ）」

「痛っ！？　何！？　なんで蹴られたの俺！？」

「うっさい。さっさと行くわよ」

「あ、待ってくださいセリさん」

「なんだあいつ……まぁいいや。ケツ痛ぇけど」

第１４話　通りすがりのかませ犬（後書き）

果たしてこの作品はファンタジーと呼べるのか。そう思っているのは私だけではないのか

というようなことを１４話書き終わった段階で思いました。イエスネガティブ！

第１５話　何事もほどほどに

少女から教わった通りに道を進んでいくと、一行はひとつの建物にたどり着いた

「ここが君の家？」

通りを外れ住宅が多く立ち並ぶそこに、老舗のような雰囲気を持つ酒場があった

「はい。あとその……そろそろ下ろして頂けると」

「まぁまぁ俺は気にしないし。えーと、こういう場合は裏から入った方がいいのかな？」

そういうことではないのだが。残念ながら少女の抵抗むなしくアレンは「失礼しまーす」と少女を抱き抱えたまま裏口から大胆に突入していく

すると店の準備をしていた一人の男性がアレン達に気づき

「お、帰ったか……って、母さん大変だ！　買い出しに行った娘が知らん男に抱えられて帰ってきた！」

「ま、待ってお父さん！　これは違うの！」

「女の成長は早いとは聞いていたが、まさか買い出しの間に大人になってくるとは……兄ちゃん、これでも大事な一人娘なんだ。大切にしてやってくれや」

「お願いだから話を聞いてー！」

第１５話　何事もほどほどに

「――つまり、暴漢に襲われそうになったところをこの人達に助けて貰ったと」

「……お父さんってば説明しようとしてるのに全然話聞いてくれないんだもん」

「ばっはっは。そりゃあ娘が男に抱えられて帰ってきたら驚きもするだろう」

「あ、あれは腰が抜けてたから……」

「どちらにしろ兄ちゃん達には礼を言わねぇとな。娘を助けてくれてありがとよ」

「いえいえ、たいしたこと（特に俺）はしてないですから」

日は既に傾き始め、買い物も少女を助ける為に途中のまま。宿がとれないことを考えるとそろそろ野宿に相応しい場所を確保する必

要があり、セリカも何か言いたげにアレンを見つめているので、長居は無用とアレンは少女の両親に軽く会釈をして立ち去ろうする

「待ってくれ。娘の恩人を黙って帰したとなっちゃ親父として申し訳がたたねぇ。急ぎじゃないならうちで飯でも食っていかないか？」

「あー……どうしようか？」

「本来ならお言葉に甘えたいところだけど……」

「困りましたね……」

「なんだ、何かまずいことでもあるのか？」

「それがですね……」

自分達が置かれている状況を簡潔に説明する。すると少女の父親は

「なら尚更都合がいい。うちは小さいが宿屋も兼ねていてな。ちょうど部屋も空いてるし予選が終わるまで泊まっていくといい」

「え、でもいいんですか？　というか何故大会に参加することを？」

「なーに、この時期にこの街に来る旅人なんざそれ目当てが殆どさ。……で、どうだ？」

「……おっさん愛してる！！」

「おおう、じゃ決まりだな。じゃあ俺は店の支度があるからまた後でな。案内は娘がしてくれるから夕食まで部屋でゆっくりしててく

れ」

男らしく豪快に笑いながら少女の父親はその場を立ち去る

打算の上での行動ではなかったが、情けは人の為ならずという言葉も案外馬鹿には出来ないものだとアレンは安堵の息を吐きつつそう思った

とにもかくにも、とりあえず宿に困ることはなくなった

「……」

なので当面の目標はこのなにやら不満顔のセリカをどうするかである。どうにもこの女はあの男と一戦やりあった後からご機嫌斜めのようで先程から背中に痛い視線をチクチク浴びせてくるのだ

「（腹でも減ってんのか？　ま、それなら晩飯食ったら機嫌も治るだろ、うん）」

人間は空腹時と眠たい時に機嫌が悪くなるという。アレンにも似たような覚えはあるので多分セリカもそれと同じような感じだろう

――

「と、思っていた時期が俺にもありました」

周りからは楽しそうな話し声や笑い声が聞こえてくるのに、アレン達のテーブルからは時折食器が擦れるような音以外そういう類のものが一切聞こえてこない

「（空気が超グラビティ）」

まずセリカが冷たい。まぁそれ自体は割といつも通りなのだが、今に限ってはボケてもいつものように突っ込みもしてくれない。完璧に面倒臭い人間への対応のソレである。ルゥにしても場の空気より並べられた肉達の方が気になるらしくアレンは面白いくらいに孤立していた

一体俺が何をした？　問いかけても答えは返って来ない。無論二人に同じ質問をしたところで結果は同じだろう

「……もういい知らん。　おっさん！　エールを大ジョッキで持ってきてくれ！」

「お、いくねぇ兄ちゃん。ちょいと待ってな」

注文して1分。「お待ちっ！」となみなみ注がれたエールのジョッキがアレンの目の前に置かれ、アレンはそれをゴキュゴキュゴキュゴキュー！っと一気に飲み干した

「――っぷはぁ！！　おっさんおかわり！」

「あいよ。そうくると思ったぜ」

「んぐんぐんぐんぐ……っしゃあ次ィ！！」

味わうこともせずどんどん胃に流し込んでいく。そうして10分も経つ頃にはアレンの前には大量の空のジョッキが所狭しと並べられていた

＊＊＊＊＊

セリカは一人溜息をつく

「（……なんでこんなにもやもやするのかしら）」

なんて小さく口に出してはみたものの、実のところ理由はわからなくもない。ただそれを認めてしまうと……つまり、そういうことになってしまう

セリカ自身、あの男に対しそのような感情は持っていないと断言出来る。出来るのだ

だから別にそんなあれくらいでやきもちとかあるはずもなくそもそも好きでもなんでもないわけだからやきもちなんていう大前提からして間違ってることになるけどもだとしたらこの胸のもやもやは一体なんなのか

「――セーリカっ♪」

「はいはい。考え事してるんだからもう少し静かに――ひゃあ！？」

言葉半ばにセリカの耳が生暖かいものに包まれた。瞬間、ゾクリと体に寒気が走り思いがけない声をあげてしまう

「な、なななな」

椅子ごと体が仰け反る。ずり落ちなかったのは不幸中の幸いか

「おいおいそんなに嫌がることないだろー？　耳を咥えるくらい軽いスキンシップのうちじゃないか」

「す、スキンシップって……あれ？　あんた妙に顔赤くない？」

「俺からしてみればお前の頭の方がよっぽど赤く見えるけどなぁ」

「うっさいのよ！　……じゃなくて」

もしかしてと、テーブルに目をやる。そこに鎮座するは１０は優に超えているであろうジョッキの数々。ルゥは酒は飲まないしセリカも飲んだ記憶はない。となると犯人はただ一人

「んぐんぐんぐ――っぷふぅ。あー…いい気分だ」

頬りなさげにふらふらとした足取りで。いつも以上にへらへらした顔で。アレンはセリカに近づく。伸ばされた手は頬の横へ。そのあまりに自然な動作にセリカは抵抗することを忘れていた

「セリカの肌はスベスベしてるなぁ。髪もさらさらだし触ってて気持ちいいぞこれ」

「え、あ、う……ひぅっ！？」

「おーおー耳だけじゃなく首も弱いんだな。こいつはいいことを知った。もっと触ったれ」

「や、やめ……ん、っはぁ。そ、そこは駄目だってば……や、っあ」

「わわわ……セリさんがすごくエッチな声を出してます……」

薄く上気した顔でルゥは二人を見つめる。騒がしかった周りの男達もいつのまにか静まり、何かを隠すような変な座りかたをしていた

「い、いい加減に……！」

「おっと」

「な――！？」

アレンの顔面に突き刺さるように放たれた拳は平然とアレンに受け止められる

「ったく危ねぇな。自分より弱い相手に平然と拳を向けるなんざちょっとお仕置きが必要かもしれん」

そのまま手首をつかまれぐいっとセリカは身体ごと引き寄せられた。近い。何が近いってフェイス。アレン，Ｓフェイス

「大体なんでお前今日そんなに機嫌悪いんだよ。俺がなんかしたか？」

「べ、別に機嫌悪くなんか」

「ほう。あくまで白を切ると。そうかそうか。そんなにお仕置きして欲しいか」

「ち、違――」

慌てて掴まれた手首を振りほどこうとする。しかし、全力に近いはずなのに肝心のアレン手はビクともしない

「別にお仕置きって言ったって痛いことをするわけじゃないんだ。大人しくしとこうぜ」

「この状況で大人しく出来るわけないでしょ！」

「んー…それもそうか。なら無理矢理大人しくさせるしかないなー」

スッと目を閉じ、アレンがゆっくり顔を近づけてくる

「（え、じょ、冗談……でしょ？）」

その冗談との距離は既に１０センチを切っている。アレンの吐息から漏れた酒の香りが鼻孔に届く。身動きのとれないセリカの視界は既にアレンの顔で埋め尽くされていた

「（あ……）」

ほぼ無意識に。いつのまにか抵抗も止め、セリカも目を閉じていた

そして、お互いの距離がゼロに――

――ポスン

「……え？」

感じる重さと暖かさにセリカは気の抜けた声を出す

「ＺＺＺ……」

「……寝、てる？」

セリカに身体を預けてアレンは穏やかな寝息を立てる。ゼロどころかマイナスになった距離。しかし、それを理解した瞬間セリカの顔は真っ赤に染まった

「（あ、あ、あああああああああああ危なかった！！　なにやってんの私！？）」

頭を掻き毟りたい衝動をギリギリのところで堪える。ほんの一瞬。だがその一瞬に僅かながら受け入れてもいいと思ってしまった

「ＺＺＺ…ＺＺＺ……」

「あんたも暢気に寝てるんじゃないわよ！　起きろこのー！」

「ちょ…もう食べれませんて……」

「どれだけベタな寝言なのよ！」

＊＊＊＊＊

「んぁ……？」

見慣れない天井だった。次いで自分がベッドに寝ていたことに気付く

「確か……あぁ、そうだそうだ。昨日から此処に泊まることになってたんだ」

悪漢に絡まれている少女を助け、その御礼にと酒場兼宿屋を経営する少女の両親に部屋を提供してもらった――うん、一応そこまでは覚えている

だが

「どうも酒を飲んだあたりからの記憶がないんだよなぁ」

ペースも考えず勢いとノリだけで酒をかっ喰らった為、その辺の記憶が曖昧になっている。いつ部屋に戻ってきたのか、誰かに連れられて来たのか、それすらもわからない

「……ま、そのへんはセリカにでも聞けばいいだろ。とりあえず今は水が飲みたい」

酒臭い服を着替えてから、軽快な足取りで部屋の扉を開ける

「え」

「あ」

パチクリと。ちょうどアレンと鉢合わせの形になったセリカは目を丸く見開いた――かと思えば、「……ッ！」と声にならない叫びようなものをあげると、アレンがおはようの一言を言う間もなくセリカは真っ赤な顔で走り去って行った

「……え、何？」

扉も口も開けっぱなしのまま、一人残されたアレンは頭に疑問符を浮かべる

今のセリカの反応は何なのか。唯一わかるのは怒ってはいないということだけ。でも逆に言えばそれだけしかわからない

ガチャリ

「あ、ルゥちゃん。おはよ――」

「あああアレンさん！？　お、おはようございます。しし、し失礼します」

遅れて部屋から出て来たルゥは挨拶こそしてくれたものの、セリカと同じようにアレンの顔を見るなり顔を染めて走り去っていく

「……マジで俺は一体何をしたんだ？」

第16話　知るも知らぬもどちらも仏

「――てな具合で、二人ともまともに目も合わせてくれなくて」

「なるほど、朝っぱらから辛気臭い顔してたのはそいつが原因か」

男二人が流し台に並び、溜まった食器の片付け片手にそんな会話を繰り広げていた

一宿二飯の礼というのはあくまで建前。わざわざ朝食後に手伝いを言い出したのは今朝のことを誰かに聞いて欲しかったに他ならない。同じ男として、人生の先輩として

「（つってもなぁ……）」

ある程度の事情を知っている少女の父親は言いよどむ。なにせアレンに酒を飲ませたのは何を隠そう彼なのだ

アレンは酒を飲んだあたりから記憶がないと言う。それはイコールあの公衆の面前での行為も覚えていないということ

世の中には知らないほうが、思い出さないほうが幸せなこともある。正に今がそれだ。伝えることは容易だが、決してそれが最善手とは限らない。むしろ時と場合によっては悪手にもなりうる

色々と頭の中で差し引いた上で彼はゆっくり口を開き

「……とりあえず俺から言えるのは、兄ちゃんはしばらく酒は止めたほうがいいってことだな」

第16話　知るも知らぬもどちらも仏

そうこうしているうちに片付けが終わった。となればアレンの足は自然と二人の部屋へ向かっていく

昨日のセリカのように機嫌が悪いだけならそれで構わない。怒りなんて膨大な感情エネルギーを使うものはそこまで長続きはしないし、最悪何もしなくても時間が解決してくれる

だが今朝のはなにかが違う。一見拒絶の意思表示にも見えたがそれに伴う感情に明らかな違和感があった

当然のこと、アレンにはよくわからない。もしかしたらこれも時間が解決してくれるのかもしれない。そういった期待もありきではある

「まずは部屋をノックしてー、と」

手首のスナップを利かせ軽めに2回

さてどちらが出てくるだろうか。セリカなら冗談半分でからかいつつ、ルゥならば紳士的に危機感を抱かせぬようにするか、うん、そうしよう

軽く深呼吸。――さぁ、カモン！

「はいはーい。あ、アレンさん」

「……あれ？」

意気込んだ矢先、部屋から出てきたのは目的の人物ではなくシーツやその他洗濯物を抱えた少女だった

アレンは慌てて扉にかかっているプレートを確認する。記憶はあやふやだが、それでも部屋番は間違っていない。この部屋はセリカとルゥの部屋だったはずだ

「あの、セリカとルゥちゃんは」

「お二人なら散歩に行くってついさっき出て行きましたよ？」

結構前の言葉を撤回。割と拒絶されていた

厚かましく着いて行くなんて言わない。でもせめて一言、一言は欲しかった

「……俺はもう駄目だ。死のう」

「窓枠に脚をかけてなにやってるんですか！？　危ないですよ！」

「放してぇ！　セリカはまだしもルゥちゃんにまで嫌われるとか私耐えられないのぉ！」

「興奮し過ぎて変な言葉遣いになってますからー！　少し落ち着いてくださいー！」

5分後

「はぁ、はぁ、君も頑張るね……」

「ゼェゼェ……め、目の前で飛び降りようとする人を、止めないわけにはいかないですから」

お互いに肩で息をする。冷静になってから思えばものすごく無意味な5分間だった。なにせ此処は2階なのだから。よほど変な着地でもしない限りいいとこ捻挫で済んでしまう

「そ、それでさっきの話ですけど、嫌われたってどういうことですか？」

「それがもう俺にもさっぱりで」

しかしアレンも言うほど馬鹿ではない。二人の態度が激変したのは昨日から今朝にかけて。アレンの覚えてる限りでは一日で機嫌が変わるような出来事はなかった。つまり記憶がはっきりしない――酒を飲んだ後に何かあったのだと一応の目星はつけていた

「うーん。私は昨日店には出てなかったので詳しいことはわかりませんが、酔いつぶれたアレンさんを部屋連れて行くお二人とはすれ違いましたよ」

「あの生粋ドSが俺を……？」

その時点で色々とおかしい。普段のセリカは仮にアレンが酔いつぶれていたとしても平気で放置をかますような女だ。わざわざ自分をベッドまで運ぶなんて天変地異の前触れとしか思えない

「……そのときのことをもっと詳しく教えてくれないか？」

「一言二言交わしただけなので特に話すようなことは……。あ、でもアレンさんを背負うセリカさんの顔がやけに赤かったのは覚えています」

「顔が赤く……あいつも酒を飲んでたってことか？　じゃないとその行動の意味がわからんもんな」

「事情は知らないですけど、少なくともアレンさんを嫌ってるってことはないんじゃないですか？」

「だといいんだけどね。……ま、時間もあるし俺も散歩がてらあの二人を捜してくるかな」

一人でうだうだしていたところで問題は解決しない。ならば当事者に直接話を聞くまでである。ぶっちゃけもう何をしたとかは興味がない。要は嫌われているかいないか、それが大事なのだ

そうとなれば善は急げ。少女に夜までには戻ると言い残しアレンは2階の窓から――

「だから危ないですってばー！！」

＊＊＊＊＊

木を隠すなら森の中。人を隠すなら大衆の中。そして大衆とくれば予選時期で賑わう大通り

途中見つけたオープンカフェでルゥと向かい合わせに座り、軽く一息

「……どんな顔して顔合わせろって言うのよ」

――ついたところで状況が改善などされないことはわかっている。むしろ冷静になった方が恥ずかしいのではないだろうか

一応と注文した紅茶とケーキも未だ手付かず。もったいないとは思いつつも手が進まない。ちらりと前方に目を向ければルゥも同じく落ち着かない様子で、それでもちびちび紅茶に口をつけていた

「置いてきちゃいましたね……アレンさんのこと」

「……仕方ないじゃない」

あんなことがあった次の日に何を話せばいいのかなど経験の薄いセリカにはわからない。同様の理由でルゥも駄目。結果的にこうするしかなかったのだ

「（だ、大体酔ったからってあんなこと……ううぅぅう）」

ケーキに乗るイチゴのように、顔全体を真っ赤にさせてセリカは低く唸る

耳を咥えられ、頬を撫でられ、首を弄ばれ、挙句強引にキスまでされそうになった。しかも驚いたことにそれを受け入れようとした自分がいる

「（これじゃあまるで私がアレンのこと……す、す）」

しかし待て、とセリカの脳内がストップをかける

これまで一緒に旅をしてきて幾度となくアレンの情けないところを目にしてきた。ぱっと浮かぶだけも十数個は堅い。反面、カッコイイと思ったところはあって2～3個。比率で考えるとそれこそマイナス要素がブッチギリではないか

「（そうよ…私があんな男を……）」

昨日は例外中の例外。普段見せない強引さにちょっと気圧されただけ。気の迷いもいいとこだ

既に温くなった紅茶を一口。いつもなら新しいのを頼むところだが、今はコレがちょうどいい。紅茶につられ顔の火照りが徐々に和らいでくる

「……うん。結構落ち着いてきたわ」

「私はもうちょっとだけ……」

「じゃあそれまでゆっくりしてましょう。戻るのはそれからでも遅くないわ」

「アレンさんには何て説明しましょうか？」

「変に意識するといらない誤解を与えかねないし、いつも通りにしてればいいのよ」

少し前の自分に文句を言いたいくらいには冷静になったセリカは、再度温くなった紅茶を啜った

「――あ、お帰りなさい」

あれからまったりと時間を潰し、セリカとルゥが宿に戻ったのは昼近く。裏口に回れば、丁度少女が洗濯物を干し終えていた場面に出くわした

「悪いわね。もう少し早く帰ってくれれば手伝えたのに」

「いえいえ、これもお仕事のうちですから。――あれ？　アレンさんは一緒じゃないんですか？」

「アレン？　なんで？」

セリカとルゥ、それぞれが首を傾げる

「お二人を捜すと言って出かけていったので、てっきり一緒かと…」

「それって何時頃？」

「そんなに時間が経った後でもなかったですし、恐らくお二人が出かけてから３０分後くらいだと思います」

「どうしますかセリさん？」

ルゥの正体を知らない人間の前なので直接的な表現は使わないが、その意味は自分の鼻を使ってアレンを捜すかどうかということ

今は人が多く精度も若干落ちるが、それでも時間をかければ見つけることはそう難しくない

だが

「入れ違いになっても面倒だしやめておきましょ。どうせ夕飯前には戻って来るわ。多分に似たようなこと言ってなかった？」

「はい。夜までには戻ってくると言ってました」

「やっぱりね。まぁ私達は帰ってきたばっかりだし焦ることもないわ。捜しに行くにしてもお昼を食べた後で大丈夫よ」

元はと言えば全てアレンが招いたこと。どうせなら反省の意を込

めて頭を冷やしてくればいい。そして疲れて帰ってきたところを一発蹴りでもくれてやればギクシャクした関係も元通りになるだろう

緊張がなくなったおかげか、胸の内にかかっていた靄がまるで嘘のように晴れていく。そうだ、最初からこうしておけばよかったのだ

「そういえばアレンさんとも話したんですけど、昨日の夜って何かあったんですか？」

「あー…ちょっとね」

セリカとしては昨日の夜のことについては気恥ずかしいものがあり、口にするのもやや抵抗がある

「――ん？　ちょっと待って？」

「どうしたんですか？」

「昨日夜のことについてアレンと話をしたのよね？　アレンからは何も聞いてないの？」

「はい。なんでもお酒のせいで記憶が殆どなくて、それで私に昨日の夜何があったのかという話を――って、セリカさん？」

＊＊＊＊＊

「ふふ……全然見つかりません」

どっぷりと日がくれた街並みを背に、アレンは己の行動の浅はかさを知る。赤と白を基調とした目立つ風貌の二人とはいえ、これだけの人込みの中でそれがどれほど役に立とうか

「せめてセリカの身長が3メートルくらいあれば……いや、それは駄目だな」

駄目なのはアレンの脳の構造でしょ。セリカいるならばそんな突っ込みも返ってきただろう。ルゥは苦笑いしながらフォローをしてくれただろう

――物足りない。いつの間にかそう感じるようになってしまった。勿論殴られるのは痛いけど。でも実はあれはあれで嫌いじゃない

「……帰ったらもう一回おっさんと話してみよう」

夕食までには戻ると言ってあるので捜索は一旦中断。ひとまず帰路につく

宿まで目と鼻の先。僅かに光で照らされたそこでふと、目に優しくない色が映りこんだ

「遅かったわね」

「……誰のせいだと思ってんだ」

「あら、元はと言えば全部あんたのせいよ？」

燃え盛る炎のような真紅の髪。それをスッと靡かせ、セリカは薄く笑う。昨日や今朝とは違いその雰囲気には余裕があった

おざなりに返事をするアレンもどことなく安堵した様子で、二人の間に穏やかな空気が流れる

そしてセリカが静かに一言

「……ねぇ、あんたって本当に昨日の記憶がないの？」

予想が確信へ。わかりきった質問にアレンは心の中でやっぱりかと呟く

……だからだろうか。ちょっとからかってやろうかと思ってしまったのは

「どうなの？」

「――実は記憶があるって言ったらどうする？」

「んな――っ！？」

「嘘だボケ。記憶があったらわざわざこんな真似するかってんだ」

「あ、あんたって男は……！」

わなわなとセリカは怒りと共に拳を震わせる。しかし直ぐに呆れたように息を吐いた

「……もういいわ。とにかく夕食にしましょ」

「全面的に賛成だがその前に俺からも質問がある」

「ルゥが目を輝かせながら待ってるんだから手短にね」

「セリカは俺のこと好きか？」

次の瞬間、盛大にセリカがコケた

「こんな何もないところで何してんだお前……ひくわぁ」

「いきなり変なこと言うからでしょ！　大体何よその質問！」

「個人的に大事なことだ。俺だって答えたんだからお前も答えるのが筋ってもんだろう？」

「うぐ……」

正義感に満ち溢れるセリカにとって筋とかフェアとか公平とか、その辺の言葉はかなり効果的に作用する

確かにアレンの言い分は正しい。だからってどれだけタイムリーな質問をぶつけてくれれば気が済むんだこの野郎

「（好きか嫌いかで言ったらそれは……）」

しかし、不器用にも真面目に答えようとするセリカは再び頭を悩ませる

好き？　……否

嫌い？　……それも否

「（どっちでもないっていうのは何か負けた気がするし……そうだ！）」

先程アレンにやられた手口を思い出す。さらっと軽口で肯定して、アレンがなんらかの反応を見せたら冷たく否定する

「（見てなさい……！）」

内心ほくそ笑みながら、セリカはごく自然に口を開く

「えぇ、好きよ」

「そっか。ならよかった」

……うん？

「ちょ、ちょっと待って！」

「あー腹減った。俺も今日はルゥちゃんに倣って肉中心でいくかなぁ」

「待ちなさいって言ってるでしょ！　何なのよその反応は！？」

「手短につったのはセリカだろうが。そっちこそなんだってんだ。俺の答えに文句あるのか？」

「だ、だって……ひ、卑怯よ！　そう卑怯！　私だってあんたみたいに……」

「ただいまー」

「無視するなァァァァ！！」

第１６話　知るも知らぬもどちらも仏（後書き）

べ、別に感想が欲しいとか思ってないんだからね！

勘違いしないでよね！

第17話　空からの襲撃者（前）

気温差によって霧もうっすらと確認出来るまだ日も昇りきってない早朝

宿屋の前で左右に首をコキコキと2回鳴らしたセリカは澄んだ瞳に力を宿らせる

「本当に行くんですか？　もう予選まで一週間ないんですよ？」

ご丁寧に見送りに来ていた少女が心配そうに口を開いた。尤も過ぎる言葉。それくらいセリカも理解はしている

しかし

「魔物討伐って言っても所詮はCランクの依頼よ？　特に心配することはないわ。それにそろそろ実践の感覚も思い出しておきたいしね」

数回手を握ったり開いたりを繰り返し、そして再びギュッと握って答えた

その程度がなんぼのもんじゃい。そういった気迫が細かい仕草からも伝わってくる。そこまで言われてしまっては少女も言い返せない

「じゃ、馬車を待たせてるし私達は行くわね」

「……はい。頑張ってください」

少女が一礼し、つられてルゥも一礼。どことなく微笑ましいセリカは顔を綻ばせる

「おう。二人とも頑張ってな」

ガシッ

「あんたはこっちでしょ。何さり気に見送る側になろうとしてるの」

「嫌あああああああ放してえええええええええ――――！！」

悲痛なドッププラー効果を残し、アレンの長い一日は幕を開けた

第17話　空からの襲撃者（前）

「……セリカって実は俺のこと嫌いだろ」

手綱を引くセリカの後ろ。馬車の荷台で不満げにアレンは口を開く

今更ながらアレンのカースト位置はものっそい低い。頂点をセリカ、次点をルゥとした場合、アレンはその下の下の下の下といったところである

だから今回の依頼を決める時のように「せめて薬の材料探しとかにしよう!?　な!?　な!?」とアレンが必死に抗議もとい懇願したところで結果はこれだ

「別に？　アスパラと同じくらいよ」

「お前昨日アスパラ嫌いって言ってたじゃん。俺の皿に全部移してたじゃん」

「ちょっとは食べたもん」

「何が食べたもんだコラ。少しは自分の歳を考えてぐえッ」

ワーワーギャーギャー。これから魔物を討伐しに行くというのに、緊張のきの字もないその相変わらずの騒がしさに誰も突っ込むことはない

喧嘩をするほど仲がいい。この言葉が正しいならばアレンとセリカは既に夫婦を名乗ってもおかしくはないのではと思うほどに、二人はくだらない小競り合いをする。昨日だって目玉焼きに何をかけるかで朝から３０分近く揉めていた

「――んで、今回討伐対象になってる小飛竜（ワイバーン）についてだけど」

気を取り直すように、アレンは依頼について今一度の確認をする

基本的には山岳地帯を住処としてその周辺を狩場とする小飛竜。場所が場所なだけに本来ならば人間がその被害に遭うこと自体稀なことなのだが、今回は運悪く国同士を繋ぐ山間の道付近に住み着いてしまったらしい

そこは交易でも非常に重要な場所で、その道が使えないとなると山ひとつ分を迂回をすることになり双方の国にとってその分の損害がでる。中にはそれでもという行商もいたが、同様のケースで既に十数件の被害が確認されている。ある程度手練れの護衛をつけていたにも関わらず、だ

「……なんかおかしくね？」

アレンは首を傾げる

ギルドが指定する依頼のランクは魔物の強さ、そしてランカーの実力を加味してのものだが、ギルド職員の話を聞いた限りではついていた護衛は基本的にＤ－～Ｃ＋のランカーだった。しかし、それでも殆どが撃退も出来ずに逃げ帰ってきたという

一般基準としてランカーは自分の上下マイナス一段階を基本に依頼を受けるのが妥当とされている。とはいえランカーによって実力差はあるので全員が全員それに準じたり、ということはないが、にしたってＣ＋のランカーが手も足も出せずに逃げ帰る依頼がＣランクというのは如何なものか

「順当に考えるなら、依頼した国がギルドに申請する時に故意にランクを下げたってところでしょ」

「なんだってまたそんなことを。それじゃいつまで経っても小飛竜は討伐されないだろうに」

「財政難……とまではいかないでしょうけど、小飛竜によって多くの被害が出てる今、出来ることなら出費は少なく――って考えなん

だと思います。依頼のランクが高くなればなるほど支払う報奨金は多くなりますから」

「ただ、あんまり低くしてもギルドに受理されないから本当にギリギリのレベルまで引き下げてるわね。小飛竜っていっても一応竜種ではあるし、本来ならBランク程度の依頼であることは間違いないわ」

「Bランクってお前……そんなもん雲上の世界の話じゃねーか」

実力を明確に示す分、その脅威がアレンに重く圧し掛かる

戦力として自分は期待されていない。そんなことは端からわかっている。しかし、その代わりルゥを護るという、下手すれば戦闘より余程重要な役割を担うのだ

「アレンさん？」

気づけばルゥが心配そうな顔で見つめてきていた。アレンはそこで初めて顔が強張っていたことを知る

「（はー…いかんいかん。こんなのは俺らしくない）」

不安な感情ごと吐き出すように深呼吸。それを数回行えばあっという間に普段の自分に元通りである。……表面上は

「小飛竜が出るっつう場所まであとどのくらいだ？」

「一番近い被害場所であと３０分くらいね。ルゥ、そろそろ周囲の警戒を始めてくれる？」

「わかりました」

ガタゴトガタゴト。馬の蹄が地面を蹴る音と車輪が回る無骨な音だけが静かに響く。ルゥだけではない。セリカとアレンも各々気を張って慎重に辺りを見回す

そのままどれくらいの時間が経っただろうか。ルゥが今まで閉じていた目をゆっくり開くと

「――見つけました。方角は北北西。距離は５００。数は３――間違いありません。小飛竜です」

「こっちに気づいた様子は？」

「１体が真っ直ぐ、２体が旋回するように左右から距離をつめてきています」

「じゃあ、戦いやすいところまで誘きよせるわよ」

瞬間、馬車の速度が一気に上がる

アレンが背後を見れば水色の中に１点、不自然な黒い影が見えた。セリカはある程度ひらけた場所で馬車を止め、脇に繋ぐ

「さ、ここからはおふざけなしだからね」

ふー…っと息を吐いて精神集中。腕に、脚に、体内を廻る氣を纏わせる

黒い影は速度を緩めることなく3人の元へ。はっきりと現れたその姿は小飛竜とはいえ竜そのもの。手と一体化した翼を羽ばたかせ、その大きな口から放たれた咆哮は大気をビリビリと震わせた

「――これが、小飛竜」

「ひとまずあいつは私が引き付けるから、その間にアレンとルゥはどこか安全な場所に避難してて」

「あ、あぁ……」

「……はぁ」

溜息ひとつついてセリカは片手を振り上げる。次の瞬間、びしゃり！　と大きな音と共にアレンの背中に衝撃が走った

「ば、ぎ、ぐ……痛っっっってぇぇぇ！！？」

「なーに緊張してるの。あんたの後ろにはルゥがいるのよ？　そんな不安そうな顔してたら安心して任せられないじゃない。そんなんじゃ今度からヘタレンって呼ぶわよ？」

「……っ、だ、誰がヘタレンだ！！　ちょっと面食らってただけだっつーの！！」

「脚、震えてるわよ」

「これは……その、アレだ。武者震い、うん」

クックックと堪えきれずにセリカは笑いを漏らす。負けず嫌いで

意地っ張りで、本当にこの男は扱いやすい

小飛竜がゆっくり飛び立ち、それと同時にセリカも臨戦態勢をとる。それが合図だった。セリカは小飛竜に向かって、アレンとルゥの2人は反対へ駆け出した

炎が吐けるわけでもない。雷を落とすわけでもない。水を操るでもない。しかし、竜族の中でもトップクラスのスピードを誇る小飛竜は向かってくるセリカに中空から襲い掛かる

「――フッ！！」

セリカは恐ろしい速度で飛来する小飛竜の一撃を避ける。それによって舞い上がる砂埃の先、しかとその影を捕らえたセリカは拳大の石を手に取ると渾身の力で投げつけた。しかし小飛竜も空中で器用に回避する。だがこれでいい。今のは端からダメージを与える為のものではない

「（完全に意識がこっちに向いた……後は迎え撃つだけ！！）」

セリカ一人を敵と見做し再度小飛竜が飛来する。生憎セリカは空を飛ぶ魔物に対しての攻撃手段は持ち合わせていない。なので勝負は向こうが地上にいるこっちに向かって来た時だ

神経を研ぎ澄ませ、小飛竜の動きに合わせて得意のカウンター一閃。しかし、放たれた拳は寸でのところで回避された。やはり竜族、一筋縄ではいかないらしい

「――なんてやってる間に団体様ご到着ってね」

さんざめく翼の音が更なる敵の出現を告げる。ルゥが言っていた通り小飛竜は全部で3体。低い唸り声がセリカを取り囲んだ

だがセリカは焦らない。こういう時こそ冷静に状況を判断し、的確に行動しなければならないことを知っている

「（……どうやら2人には気づいてないみたいね）」

自分に意識が向いていることを確認するとセリカは軽く安堵する。とはいえ一気に3体相手は流石に骨が折れる。望ましいのは各個撃破だが、果たして相手方はそれを承認してくれるだろうか？

答えは直ぐに返ってきた。1体がその長い尾を振り回し、1体が上空からセリカを狙い、1体がその合間を縫ってギラリと光る牙を突きたてようとする

「っ！？」

慌てて地面を蹴る。単体なら避けることは容易いが、一斉攻撃となるとそんな余裕もない。転がるように全ての攻撃を回避すると、セリカはすかさず体勢を立て直し次の攻撃へと集中を切り替える

今度はそれぞれ空中から突進攻撃。竜種にしては小柄な体躯が空を切ってセリカを狙ってきた

「（避けたほうが……ううん、ここは――）」

スッとセリカの目が細くなる。纏う氣は一瞬にして膨れ上がり、鎧のようにセリカの身体全体を包みこむ。そして正面1体を見据えると無謀にも自分から突っ込んでいった

今度の一撃も所謂カウンター。しかし先程と違う点は“防御を一切無視した分の攻撃力”が加算されているということ。内気功によって硬化した身体は一定以下のダメージをゼロにする――が、それでも小飛竜の攻撃全ては防ぎきれない

「――ハァッ！」

けれども、セリカは止まらない。ダンッと大地を踏みしめると1人と1体の加速が乗った拳を小飛竜のどてっぱらに叩き込んだ。力の逃げ場もなくその身に全ての衝撃を受けた小飛竜は、開いた口からいっそう低い掠れた声をあげて地面に倒れこむ

「……ま、無傷ってわけにはいかないわよね」

ようやく1体――そう安心する間も無くセリカに連続して鋭い痛みが走った。背後から迫って来ていた2体が鋭い鉤爪でセリカを切り裂いたのだ

内気功のおかげで傷自体は深くない。しかし、肌にはじんわりと血が滲む。以前街で男に斧で斬りかかられたこともあったが、こっちも同じ氣の篭ってない攻撃であるにも関わらずその破壊力は人間の力を軽く凌駕していた。こんなものC＋程度のランカーの手に負えるはずがない

セリカは上空を見上げる。残るは小飛竜は2体。だが今の一連の流れを見ていた小飛竜らは不用意にセリカに近づくようなことはしない。1体は大きく息を吸い込むと、体内で圧縮し魔力を練りこんだ空気の塊をセリカに向かって次々と吐き出した

「また厄介な攻撃を……！」

迫る脅威を華麗なフットワークで避けていく。ひとつひとつがセリカの一撃と同程度の威力を誇る気弾は着弾と同時に地面や木々をまとめて吹き飛ばす。威力はあるがスピードは並、避ける方に専念すれば造作もない。それがセリカの抱いた感想だった

だが

「（まずい、そっちは――ッ！！）」

セリカのかわした一撃が偶然にもアレンとルゥが隠れている方向へ。身を隠す盾となっていた木々はいとも簡単に破壊され、顕わとなった2人の姿が小飛竜のぎらついた瞳に映りこんだ

「ゲホッ、ゲホ、ルゥちゃん大丈夫？」

「は、はい。ですが……」

「……だよね。完璧に目ぇ合っちゃってるし」

飛んでくる気弾には気づきなんとか回避はしたものの、今自分達ははっきりと敵の視界に入ってしまっている

「（せめてルゥちゃんだけでも逃がしたいところだけど……）」

こちらを見る小飛竜には一切の隙がない。それこそ背を向けて走りだした瞬間に狙われてしまうだろう

「2人とも怪我はない！？」

離れた場所からセリカが声を掛ける。本当は直ぐにでも駆け寄りたいところだが、アレンと同様の理由でそうすることが出来ないでいた

「一応怪我らしい怪我はしてない……が、ちょっと状況的には厳しそうだ」

戦闘の経験地が圧倒的に足りないアレンは次にとるべき行動の指針がない。そしてその隙を逃さず2体の小飛竜が気弾を放つ。狙いは当然――アレンとルゥ

「――ッ、走るよ！」

ルゥの手を引きアレンは走り出す。飛来する気弾は次々と着弾し、少し前まで2人が立っていた場所を無残に蹂躙する。背後から押し寄せる衝撃の余波にアレンは背筋が冷たくなるのを感じた

回避どころか行動不能にまで陥りそうな威力が内包されている。一撃でもまともに喰らえばそこで終わり、動かない的など恰好の獲物にしかならない

小飛竜は再度アレン達に向かって気弾を放とうと狙いを定める

しかし

「させないわよ！」

セリカが最初にも見せた投擲、それが今度は1体の小飛竜の横っ面に直撃した。氣の込めてない一撃なので勿論ダメージは殆ど通っ

ていない。だが、小飛竜を怒らせるには十分過ぎるほどだった

明らかに憤怒が見える咆哮の後、再びセリカ目掛けて突っ込んでくる

自分の土俵にあげてしまえばこっちのもの。氣を張った脚で地を蹴り相手を上回る爆発的な速度で接近すると、懐に潜り強烈なアッパーカット。そしてそのまま脚を掴み、自身の加速も利用して乾いた大地に叩きつける。セリカの流れるような一連の動作は、声を上げる間も無く小飛竜の意識を簡単に暗闇へと誘った

「悪いけどあんたに時間をかけてるほど私も暇じゃないの」

地に沈んだ小飛竜を背にそう言い放つと、残る1体へと視線を向ける

「……ん？」

不思議な光景に僅かにセリカは声を漏らす。味方が全滅したせいなのか、既にアレン達への攻撃は止んでいた。ただ、何かを確認するように上空で翼を羽ばたかせている

逃走の意志も攻撃の意志も感じられない。それどころかこちらに意識すら向いていない。セリカが2人と合流してもそれは変わらなかった

「あれは一体どういうことなの？」

「……わからん。なんか急に攻撃が来なくなったと思ったら、それからずっとあの調子だ」

アレンとセリカは揃って宙に浮かぶ小飛竜を見上げる。よくよく観察してみれば、小飛竜はある一点を凝視しているようにも見えた

――だが、間も無く3人は知ることとなる。そのあまりにも絶望的な事実を

「……え？」

いち早く気づいたのは人間の数万倍もの嗅覚を持つルゥだった。小飛竜が向いている方向から援軍の可能性も考え、もしやと思い索敵をしていたのだ

でも、そんなまさか。信じられない現実にただでさえ白いルゥの肌から更に血の気が引いていく

「……どうしたのルゥ？　顔が真っ青よ？」

ルゥの異変に気づいたセリカが心配そうに覗き込む。注意して見ると異変は顔だけではなく、細くか弱い身体までもが小刻みに震えていた

「お、おい、あれ……」

次いで何かを感じ取ったのは意外にもアレンだった。こちらは小飛竜に注意していたが、その小飛竜が今になって急に行動を起こしたのだ

まるでに何かに怯えるように、まるで訪れる脅威を振り切るように、大きく広げた翼を羽ばたかせ、小飛竜は飛び去った。……いや、あれは逃げ出したと言った方が正しいかもしれない

しかし逃げるとしても一体何から？　セリカにすら臆することなく立ち向かったあの小飛竜が怯えるものなど早々いないはず――とアレンが考えたその矢先、今まで自分達を照らし続けていた陽光が、空を横切る大きな影に突如遮られた

「な――――！？」

あまりにも短い間の出来事。だがそれ故に与える印象は強烈だった。逆光のせいもありはっきりとその姿は確認出来なかったが、それでもわかってしまうほどに強大で

「……大空竜（スカイドラゴン）」

カチカチ鳴る顎を必死に抑え、ルゥはその名を口にする

ルゥが怯えるのも無理はない。先程まで戦っていた小飛竜は風属性の下位竜種、ランクにしてＣ＋～Ｂランクの魔物だが、別名空の支配者とまで呼ばれる大空竜は風属性の上位竜種。その強さはギルドの暫定ランクでＳ－。訓練された兵士の大連隊が３つあってようやく互角に持ち込めるかどうかという強さである

「なんでそんな奴がこんなところに……」

大空竜に限らず、その殆どが有名である上位竜種はそういった情報に疎いアレンですら、というよりこの時代に生を受けているならば誰でも知っている

――出会えばまず命はない、と

「と、とにかく逃げ――」

「無駄よ」

アレンの言葉を遮ったのはセリカだった。その直後、逃走経路を塞ぐようにズズン……と音を響かせて大空竜は降り立った

「……嘘だろ」

声音は絶望。大空竜の口に咥えられてるもの――それは先程までアレン達を襲っていた小飛竜だった。そして何の気なしに投げ捨てられ、動かなくなった肉の塊がびたんびたんと数回地面を叩いた

「……大空竜の飛行速度は、竜種を含めた全魔物の中で最速なんです」

「これでわかったでしょ？　逃げるなんて最初から不可能。この状況で唯一生き残る方法があるとするなら――」

流れるようにセリカの顎から一滴の水が重力に従い落ちる。決して武者震いなどではない拳を握り締め

「この喧嘩に勝つ。それだけよ」

第17話　空からの襲撃者（前）（後書き）

文章力がないので戦闘描写は嫌いです

でも悔しい書いちゃう……ビクンビクン

第18話　空からの襲撃者（後）

ゴクリ、と。飲み込んだ唾液はとても粘ついて嫌に喉に絡んだ

空気の壁すら切り裂く大きな翼。生半可な攻撃の一切を弾く白い竜皮に包まれた一振りで何もかもを薙ぎ倒す尾。人間の頭ほどありそうな牙が並ぶ強大な顎。それら全てが竜種たる所以で、空の支配者たる所以だった

「……クソ」

アレンは悪態をつく。そうでもしないと押し寄せる恐怖にへたり込みそうだった。それでもかろうじて耐えられたのは後ろにいたルゥの存在が大きい。みっともないところは見せられない――そんな僅かに残ったプライドが彼の身体の中心に1本、筋を通させた

「無理しなくていいわよ。アイツの相手は私がする」

震える腕で剣を抜こうとするアレンの横、ゆっくりとセリカが一歩前に出る

普段なら、普段のアレンならここで文句のひとつでも言っていたかもしれない。だが、あまりにも心情を見透かされた言動に、開いた口からは言葉が発せられることはなかった

「私は私に出来ることをするから、あんたは自分に出来る役割を全

うしなさい」

アレンより頭半個分小さいその背に負うのは2人分の命。それがセリカの責任であり義務である

自身の最大出力の気を全身に漲らせ、セリカは眼前に聳え立つ大空竜を視線で貫く。並の魔物ならば逃げ出すほどの殺気。だが大空竜に効果はない。それどころかまるで挑発のように翼を広げ咆哮をあげる

「かかって来いってことかしら？　じゃあ……お言葉に甘えてッ！」

内気功によっておよそ人体の限界を超えた速度を発揮し、セリカは真っ直ぐ、ただ真っ直ぐに一撃を叩き込むべく大空竜との距離を詰める。挑発とわかっていても選べる選択肢はこれだけ。向こうから攻撃を仕掛けられては防戦一方になること必至。そうなってはただでさえ薄い勝ち目が更に薄くなってしまう

――ゾクリ

「！？」

高ぶる感情を冷酷に突き刺す感覚。これまで数多くの戦闘を経験してきたセリカだからこそ“それ”に反応出来た。攻撃態勢だったセリカは反射的に己の身を護ることを優先する。瞬間、視界の外。完全なる死角から飛んできた大木のように太い尾がセリカを身体ごと薙いだ

第18話　空からの襲撃者（後）

声を上げる間も無かった。大空竜の尾に弾き飛ばされたセリカは受身も侭ならず大地に全身を打ち付けられた

「セリカ！！」

「……大、丈夫、だから」

まさかこれほどまでとは、とセリカは皮肉めいた表情を浮かべる。まともに喰らっていれば意識も刈り取られていただろう

苦しさを無理矢理心の深い所に押し込んでセリカは立ち上がる。護れる力があるなら、無様に倒れている暇はない。今度は尾の動きをしっかり警戒しつつ、セリカは駆ける

大空竜は接近は許さないと言わんばかりに小飛竜も使っていた気弾をセリカに向かって1つ、2つ、3つ。掠りでもすれば五体のどれかは持っていかれそうな攻撃が肉薄する

状況とはさっきとは違う。避けることは可能だが避けるだけでは近づけない。最小限の動きで避けつつ、脚だけは前へ前へ。再び尾が振り回されるがそれは予測済み。緩急をつけて回避すると握る拳に力を込める

打てば地を穿つ。いくら硬い竜皮で覆われた竜種でも耐えられはしない――そう考えていたセリカだったが、その拳は竜皮より数セ

ンチ前、鈍い音をたてて“展開”された魔力障壁によって拳は阻まれた

「な――、……ッ！！」

驚きに目を見開くも、セリカは間を置かず更なる攻撃を仕掛ける。何度も何度も。だがそのどれもが障壁に遮られ本体まで届かない

「（あの障壁……生半可な攻撃じゃまず通らない）」

後退するように一度距離をとってから息を吐いて吸う。それは呼吸を整える為でもあり、覚悟を決める為のものでもあった

移動の為の最低限分の氣を脚へ。そして残る全ての氣は右腕へ、破壊の意志を持たせる。単純な比率で言えば攻撃９防御０移動１の超攻撃型。氣を攻撃に割く分当然一撃の重さは増す。だが薄くなった防御面を狙われればどうなるか。それは完全に諸刃の剣。だがそうでもしないとあの障壁は破壊出来ない。それほどまでに、強固な壁だった

烈風が駆け抜けた。同時に氣の装甲がなくなったセリカの身体に幾つもの裂傷が浮かび真っ赤な鮮血が飛び散る。なるほど、風が操れるということは真空の刃すらも作れるのかと、セリカは佇む大空竜を見据える

人間風情に微塵も負けると思っていないような傲岸不遜なその態度。――実に気に食わない

己の傷など顧みず走り出した先は大空竜の懐。セリカの拳と障壁が再度衝突すると、剣同士が打ち合ったような甲高い音と衝撃が波

となって辺り一面を揺るがせた

「く、前が……」

舞い上がる砂埃、両足で踏ん張らなければ押し負けてしまいそうな衝撃波。打ち合いだけでこの規模だ、渦中のセリカと大空竜は一体どうなったのか。数メートル先すらも見えない状態で、アレンはそれでもひたすらに前だけを向く

――その時、ふとアレンの横を何かが通り過ぎた

風か、小石か、木っ端か。一瞬の出来事だった為に、それが何だったかはっきり確認するまでには至らなかった……はずなのに、一瞬の中の更に一瞬、１００００分の１秒にも満たない時間をご丁寧にも、脳内でコマ送りのように思い出そうとする

次の瞬間、背後から耳を塞ぎたくなるような凄まじい音が――例えるなら人間サイズの物が思い切り大木に叩きつけられたような音が、アレンの鼓膜を叩いた。そして遅れて届いた消え入るような苦悶の声

「せ、セリさん……？」

その名前を呟くルゥの声が、やけに澄んで聞こえた

「ぅ、ぐ……」

「――セリさん！！　セリさんしっかりしてください！！」

駆け寄ったルゥはセリカを抱きかかえて今にも泣き出しそうな声

で呼びかける

ルゥの腕の中。真空の刃によって切り裂かれた身体から今も血を流し続け、セリカは浅い呼吸を繰り返していた。一見外傷の方が酷いように見えるが、咽るように吐き出した血がむしろ内臓や骨へのダメージの方が酷いことを物語っている

だが、セリカは勝ち誇ったような笑みを浮かべ

「ふ、ふふ……見なさい。一発、くれてやったわ」

大空竜の苦しそうな声。いくら強力な障壁といえど捨て身とも言えるセリカの一撃は耐えられなかったようで、セリカとぶつかり合いになった部分は竜皮を貫き大きく抉れていた

しかし、結果的に見れば両者痛み分け。それにセリカと大空竜ではダメージと疲労の蓄積量が違う。最早一人で立つこともままならない身で、それでも出来ることがあるからとボロボロの身体に鞭打って立ち上がるセリカに対し、大空竜は直ぐに体勢を立て直し、殺意に満ちたような目をギラつかせながら次の攻撃へ移ろうとしていた

「……」

風の刃か、それとも気弾か、あるいは自ら突っ込んでくるのか。攻撃パターンがあとどれほどあるのかは知らないが、ひとつだけわかることがある

「何、してるの？」

大空竜とセリカの中間、遮るように割って入ったアレンにセリカ

は至極単純な質問を投げかけた

「見ればわかるだろ……こ、こっからは、俺が戦う」

「戦うって……あんた馬鹿じゃないの！？　相手は上位「うるせぇ！！」……ッ！？」

「……そりゃ俺だって怖くて仕方ねぇよ」

恐怖で震えが全身に走る。本来なら武器として立派にその役割を全うするはずだった、だが自分の“せい”で役立たずに成り下がったそれは腰に吊り下げた状態でカタカタ鳴っていた

少なくともこの状況で笑っていられるほど彼は豪胆ではない

だが、このままセリカがやられるところを黙って見ていられるほど非情でもなかった

敵う敵わないじゃない。それを言ってしまえばセリカだって勝ち目が殆どないことくらい薄々感じていたはずだ。勇敢と無謀は違う——あぁそうだ、その通りだとも。反論の余地もない。だが、そんなことはもう関係ない。問題はそれを理解したうえで、そこから先に向かっていけるかどうか

「——だがな」

感情が高ぶる。そしてそれに押されるように下腹部から熱い何かが溢れ出しアレンの全身を駆け巡る

「男には――意地っつうもんがあるんだよ！！」

その瞬間、大地が震え、大気がざわめいた

纏う、というよりは全身から溢れ出しているような。肉眼でも確認出来るほどに密度が濃く不安定に揺らめくそれは、紛れもなく彼自身の“氣”だった

「……なに、これ」

戦おうという戦意そのものを打ち砕く圧倒的な威圧感。大空竜相手にも一切怯むことのなかったセリカが、そのあまりにも強大な氣の圧力に負け、ルゥと共に力なくその場にへたり込んだ

アレンが人並み外れた量の氣を保有していることは知っていた……が、実際にそれを目の当たりにしてそんな生易しいものではなかったことを知る。現に一帯の魔物は突如現れた得体の知れない恐怖に怯え姿を消していた。唯一逃げ出さなかった大空竜も、自身を超える脅威にたじろぐ様子を見せていた

「……なるほど。これが内気功って奴か」

その中で1人、冷静に己の身体を確認するアレンの姿があった

――この感覚は知っている。以前セリカに“氣”の概念を教えてもらったときに経験したあの感覚だ。ただあの時とは違い、頭部、右腕、左腕、右脚、左脚、果ては内臓のひとつひとつ毛細血管の隅

々までに熱を感じる

しかしそれもほんの僅かな時間。平静を取り戻した大空竜が今度は練りこまれた魔力もその規模も桁違いな大きさの気弾がアレンに向けて放つ

「ッ！？　よ、避け――」

そう口にしながらセリカはアレンが自然な動作で剣を抜いたことに気づく。一体何をするつもりなのか。早く避けなければ今すぐにでも明確な“死”が押し寄せてきてしまう

だがそんなセリカの心配を他所に構えを上段に。それは１０数年続けた一番慣れ親しんだ型だった

「――ォオオオオオオオオッ！！！」

唸りをあげて押し寄せてくる気弾に向かって一歩踏み込み、渾身の力で一刀両断。中心から真っ二つになった気弾はそれぞれ左右に進路を変え、地殻を削りながら遥か後方で炸裂した

無論それで終わりではない。たん、と軽く地面を一蹴り。たったそれだけでアレンはその場から姿を消した

現れたのは大空竜の背後。そのあまりの速度に大空竜は障壁を展開する間も無く、斬ッ！という音に続いて巨大な右の翼がボトリと地面に落ちた

耳を劈く悲鳴が大空竜の口から漏れ出す。だが、それでも上位竜種。一瞬の内に攻撃を受けた位置から逆算してセリカの時と同じよ

うにアレン目掛けて尾を叩きつけた。だが、まるでそう来るのがわかっていたかのようにアレンは軽々と攻撃を回避すると、膨大な氣が練りこまれた剣を魔力障壁に袈裟に振り下ろした

最強の矛と最強の盾――軍配が上がったのは矛の方だった。障壁を突き抜け、先程セリカが抉った場所を更に深く切り裂いた

「……」

顔に飛び散った鮮血に僅かながらアレンは眉を顰めた。……が、その目には一切の躊躇もなかった。アレンは膝を曲げると、全身のバネを使い身の丈１０メートルはあろうかという大空竜を超えるほどの跳躍をしてみせた

当然大空竜は空中のアレンに狙いをつけようとするが、それより早く、そして鋭い一撃が肩口から一気に振り下ろされた

「……悪いな」

アレンが短くそう言い切ると、空の支配者とも呼ばれた大空竜は声もなく地に沈んだ

＊＊＊＊＊

「う、嘘……本当に……あの大空竜を……？」

あまりにも信じられない光景に呆然とした口振りでセリカは口にする

Aランクの自分でさえ勝てなかった相手を、つい先日ランカーになったばかりのアレンが倒した。それも、以前ふざけるように言っていた隠された力を本当に発揮して

……夢物語だと言われても信じてしまいそうだった。それくらいたった今目の前で起きたことが現実離れしていたのだ

「か、勝った……？」

尤も、誰より困惑していたのは彼において他ならないわけだが

感情の高ぶりは大空竜を倒したことにより静まりを見せていて、ただただ目の前の現実を突きつけられるばかりだった

「――って、あああああああああ！？」

「な、なに！？　どうしたの！？」

ビクゥッとセリカは驚きに身体を強張らせる。見れば酷く残念そうにアレンは手元を見つめていた

理由はその握られている剣にあった。強大な力のぶつかり合いに耐え切れなかったのか刀身には見てわかるほどのヒビが幾つも入っていた。少なくとも剣として使い物にはならないことが容易に見て取れた

「これまだ全然使ってないのに……うあぁぁぁごめん武器屋のお

っさん本当ごめん。俺が不甲斐ないばっかりにせっかくの剣が……」

「……仕方ないわよ。いくら内気功で強度を上げたからって武器には限界があるもの。……それより身体はなんともないの？」

「身体？　別になんとも……お、おお？」

「アレンさん！？」

急にバランスを崩し前のめりに倒れこむアレンをルゥが慌てて全身で受け止める

「な、なんぞ……？」

踏ん張ろうにも思うように膝に力が入らない。それどころか四肢が今になって痙攣を始めていた

「慣れない内気功のせいで筋肉に負担が掛かってるのよ。単純に言えば筋肉疲労ね。個人差はあるだろうけど1日2日も休めば治るわ」

「マジかー…って、そうだ。セリカこそ大丈夫なのか？」

「心配ない、と言いたいところだけど……実は私もしばらく動けそうにないのよね」

怪我の度合いで言うなら正直アレンよりセリカの方がよっぽど酷かった。そこまで傷は深くなかったおかげか既に血は止まっていたが、呼吸をしようとするだけでズキズキと身体の内側が痛んだ

経験上そこまで酷いとは思えなかったが、最悪肋骨の2、3本は

覚悟した方がいいかもしれないかなと、セリカはひとり溜息をついた。やっぱり痛かった

「瀕死2人に天使1人か……今魔物に襲われたら多分生きては帰れないだろうな」

空を仰ぎながら、アレンは酷くネガティブな発言を口にする

「まーその時は天使が3人になるだけだし、別にいいんじゃない？」

「え？　え？　そ、それっていいんですか？　というか私が天使ってどういう――」

「あ〝ーやばいこれ無理全然動けない。ルゥちゃんちょっと膝枕よろしく」

「あ、はい。私でよければ……って、そうじゃなくてですね？」

「何言ってるのよ。ルゥの膝は私だけのものよ。あんたは向こうに転がってる大空竜の脚にでも頭乗っけてなさい」

「あれ竜皮でゴツゴツしてんじゃん。あんなんに寝たら顔に痕つくわ」

「少しは私の話を聞いてくださいよぅ……」

第１８話　空からの襲撃者（後）（後書き）

ギリギリ……正にギリギリ……ッ！！

ということで後編でした

第19話　好奇心の果てに

アレンは自室の窓から通りを見下ろしていた

街全体がお祭り状態ということもあり誰も彼も忙しなさそうで、けれどもその表情に憂いは一切感じられなくて

「平和だなぁ」

こんな台詞をしみじみと言えるくらいには、穏やかな朝だった

硬くなった筋繊維を解すように伸びれば身体のあちこちから軽快な音がした。完全に身体が鈍っている証拠である

「ここ数日ロクに動けなかったもんな。そりゃそうなるか」

内気功による筋肉疲労は、時間と共に筋肉痛となって彼を苦しめていた。トイレに立つだけで歯を食い縛るなど久しくない記憶だった

心配していたセリカも内臓や骨に異常は見られず、全身打撲ということで医者に数日の安静を言い渡されただけで済んだ。尤も一昨日の段階で怪我自体は殆ど回復していたようで、ルゥと街に出掛けたりもしていたらしいのだが、それを知らされたのは昨晩のこと。完全にハブである

「……腹、減ったな」

気づけば結構な時間経っていたらしく、起床と同時に活動を開始した胃袋が低い唸り声をあげた

時計を一瞥した後、彼は踵を返した。腹が減っては戦は出来ぬという。いや、全く持って戦などする気はないのだが、健全な1日を過ごす為に朝食は必要不可欠であることに間違いはない

「ん、お、っとと？」

上手く前に出なかった脚に縺れバランスを崩す。だが心配することなかれ、直ぐ手の届く位置に扉がある

「ねぇ、ちょっと――」

「あん？」

神懸かりとも言っていいタイミングだった。救いを求めた右手は急に開けられた扉に触れることなくそのまま宙を泳ぎ、頼りの支えを失った彼の身体は吸い込まれるように扉を開けた人物の胸元へ

――ポスン

「……へ？」

「……」

この男。基本的には馬鹿だが、応用的には頭の回転がいい。具体的には今のように自分が危機的状況に陥った時とか

気の抜けた可愛らしい声、そして甘い香り。こうして触ってみなければわからないが、女性特有の膨らみも確かに感じる。これだけヒントを与えられて答えが出せないわけがない

冷静に、極めて冷静に、彼は口を開く

「ははっ、なんだセリカ。意外に胸あっｔ」

第１９話　好奇心の果てに

肩幅程度に広げた脚で大地をしっかり踏みしめ、拳同士を合わせ深く息を吐き出す。教わった通り意識は丹田から全身へ熱を廻らせるように

――集中。風鳴りも木々のざわめきも鳥の囀りもその瞬間はゼロになる

「……」

しばらくの無言の後、アレンは構えを解いた

「うーん……やっぱりあの時の感覚には程遠いな。そっちはどうだ？」

その様子を真剣な面持ちで見つめていたセリカも答えは同じと首を横に振った

内気功が成功していればこちらからでもわかる。アレンが大空竜と戦っていた時は肌でその圧力を感じたほどだ

「だよなぁ。俺も全然それっぽい感じはしねーもん」

アレンはどっかりとその場に座り込む。慣れないことをするとどうにも疲れが溜まるのが早い

「以前も説明したと思うけど、内気功に限らず氣を操るには結構きっかけが大事なのよ。アレンの場合はこの前の大空竜との戦いね。荒削りだったけどあれは確かに内気功だったわ。そして大体は1回コツを掴めばなんとなく出来るようになっていくの」

「そうは言うがな。現状はこんなんだぞ？　それにあの時だって無我夢中だったからどうやったかなんてよく覚えてないし」

「だから今その練習をしてるんでしょ。明日はもう予選なのよ？そこんとこちゃんとわかってる？」

セリカの言葉通りキングベル武芸大会の予選までは既に２４時間を切っている。アレンがその事実を知らされたのは今朝赤い通り魔に襲われた時だった

本来なら修業に費やす日を休養にあてがってしまった為に時間がないのだという。詰め込むように朝食を胃に収め人気のない此処にやってきたのは少し前だ

「（……そりゃ本当に一朝一夕で出来るとは思ってないけど）」

セリカ自身がまともに氣を扱えるようになるまで丸2年。それを昨日今日修業を始めたばかりのアレンに出来るようになれというのは無理な話だということは本人もわかっている

だが、あの時の力の5分の――いや、10分の1さえ発揮出来ればいいと、そう考えていた

「――セリカは時々ああやって難しそうな顔をするよな。一体何考えてるんだか」

「セリさんは聡明な方ですから。きっと色々複雑なことを考えているのでしょう」

「頭がいいってのもいいことばかりじゃないよなぁ。……ところで前々からちょっと気になることがあったんだけども」

「どうかしましたか？」

瞳を丸く、何の疑いもないような視線がアレンに向けられる

本人に自覚はないのだろうがその様子はとてもある動物に似ていて、少しずつ増大していたアレンの好奇心は今になってついに耐え切れなくなり

「ルゥちゃん。――お座り」

「わんっ」

その言葉を受け、ルゥはごく普通に地面にぺたんと女の子座りをした

「「……」」

沈黙。しかし双方とも同じ沈黙のようで実は意味は全く違っていた

アレンの方はまさか本当にといった驚愕の沈黙で、ルゥの方は身体が反射的に動いてしまったことに対する困惑だった

「……お手」

一瞬の思考の末、好奇心に負けたアレンは再度実験を試みる

恐る恐る指し伸ばした手。まぁ流石にこれは無理だろうと半ば諦めていたのだが

「わんっ」

ぽすん、と。ルゥの小さい手が乗せられた

「……え、え？　なんで？　どうして？」

行動に理解が追いついていない。少女の様子は正にそんな感じだった

本能的なものか、反射的なものか。しかしそのどちらにしろ、アレンの好奇心を更に刺激してしまうことに変わりはない

「おかわり」

「わんっ……って、私は犬じゃないんですよ！？　こ、こんなこと」

「伏せ」

「わんっ。……うぅぅぅ！」

おおお……っ！　と声にならない感動がアレンを支配する

この少女、狼というより犬のそれに近いと思っていたが、まさかここまでとは思いもよらなかった。涙目で睨まれるが最早それすらも喜びに変わる

もっとこの少女を虐めたい……そんな感情が生まれ、アレンは禁忌の一言を口にする

「じゃあ最後に……ちんｔゴブゥ！？」

調子に乗りすぎた男に天罰が下った瞬間だった

「ちょっと目を離した隙にあんたは何をやってるのよ！」

「せ、セリカ……？」

怒りでわなわなと拳を震わせた鬼がそこに立っていた

「ふぇぇ…セリさ～ん……。アレンさんが、アレンさんが私を犬扱いしますぅ……」

「よしよし、もう大丈夫よルゥ。……それで、何か言い残すことは

ある？」

真っ黒いオーラを漂わせながら、とっても素敵な笑顔で辞世の句はあるのかと、そう告げられる

「正直やりすぎたとは思ってる……が、一切の後悔はしてない！あ、でもやっぱり痛いのは嫌というかそんな全力で殴る体勢をとるのはちょっといただけないんじゃないかなと僕は思うのですがすみません今更謝っても遅いですよねだけどあれは仕方ないでしょだって健全な思考してたら絶対やりたくなるってうわぁ全然聞く耳もってくれてないやこれギャアアアアアアア――！！」

＊＊＊＊＊

「……おや、これはまた随分と素敵なお顔をしていらっしゃいますね」

「己の欲望を貫き通した代償にちょっと、な」

そうですか、とにこやかに青年。だが、それ以上深入りしてくることはなかった

――此処は大通り。頭冷やすついでに御使いしてこいと修業を中断して文字通り蹴り出されたアレンは、最初に出会った時と同じ様に露天を開く青年、クォーツを見つけ、なんかぐだっていた

「しかしこんなところで時間を潰していてよろしいのですか？　確か今は御使いの途中だったのでは？」

「大丈夫大丈夫。どうせ戻ったって1，5倍増しくらいにキツイ修業が待ってるだけだから」

わははーとアレンは笑う。果たして何が大丈夫なのかは青年には分からない。そして勿論アレンも分かっていない

「修業といえば、そういえば貴方は明日の予選に出るんでしたね。どうですか？　勝てる見込みなどは」

「それが全然でなー」

青年の隣に座り道行く人々を眺めるアレンだが、先程からやけに屈強そうな男達の姿が視界を横切るのだ。あんな連中と戦って勝てるか？　うふふそんなの無理に1票である

「例年そうですが今年は特に参加者が多いですからね。きっと面白い大会になると思いますよ」

「へー、そうなのか。そんなに歳は違わなさそうなのによく知ってるんだな。流石は行商人」

「……フフ。当日は街も人気が少なくなりますし、貴方の応援に行くのも面白そうですね」

「おう、クォーツさんさえよければどんどん応援してくれ。そして無様に負ける俺を笑ってくれ。――それで話は全く変わるんだけど、あの人だかりは何なんだ？」

通りを占拠するように集まった人だかりを指差し、アレンはクォーツに問いかける

実はここに来た時から気にはなっていた。出店に並んでいるわけでもなさそうなので、純粋にあそこに何かあるのだろう

「あぁ、なんでも予選に参加するランカーの1人が上位竜種を倒したとかで話題になってるみたいですよ」

「あの上位竜種を？　うわー…そんな奴が予選に出るのかよ。ますます勝てる気がしなくなってきたわ」

「自分で優勝候補と豪語してましたからね。やはりそれなりの実力は有しているのでしょう」

「……ふむ、どうせだから俺もちょっと顔を見てこようかな。そんで予選で戦うことになったら棄権しよう」

「前向きな後ろ向き発言ですね。恐らく話題の人物は人だかりの中心にいると思いますよ」

「よし、じゃあ行ってくるか！」

人だかりに向かって突貫――ではなく普通に歩み寄る。それにしたがって輪の中心から恐らくその人物であろう声が聞こえてきた

「――正に白熱した戦いだったぜ。奴らに硬い竜皮の前じゃあ普通の攻撃なんて1寸も通りやしねぇからな。俺じゃなきゃ勝てなかっただろうよ」

その言葉に周囲の人間がおおーっと声をあげる

「（わかるわかる。あれ硬かったもんなー）」

その中で1人その言葉に同意するアレン

しかし声は聞こえど未だに姿が拝めていない。これは別に自分の身長が小さいわけではなく、人が多いからである。断じてそうである

人込みを掻き分け掻き分け、ようやく顔が拝めるくらいに中心に近づいたかと思えばドンと何かに背中を押され、飛び出すような形でアレンは輪の中心に弾き出された

「あ痛ててて……誰だよ背中押した奴は……」

「あ〝ぁ？　なんだテメェは？」

突如現れた珍客に、中心いた人物は威圧的な声をぶつける。やばいやばいとアレンはすかさず

「別にどこも怪しくない通りすがりの一般人でござ……あれ？」

見上げるような形になって、アレンはそこで意外そうな声をあげる

この声、この風貌。……はて？　どこかで見たような気が

「おい、テメェ俺が一体誰だか――」

「――あ、そうだ！　この街に来た日に見たんだった。えーと名前

は確か……ウブゴァさん、だっけ？」

「誰だウブゴァだ！　俺はウブ――って、てことはテメェはあの時の女の仲間か！」

あの時の女というのはセリカのことだろうか。それなら答えはイエスである

しかしまさかあのウブゴァ（決）が中心にいるとは。――あれ、ということは上位竜種を倒したのはウブゴァ（決）ということになるのだろうか

「いいか！　あの女に伝えとけ！　テメェは絶対に敵に回しちゃいけない男に喧嘩を売ったんだってな！」

剣を抜きアレンに突きつける。それによって周囲には緊張が走った

だが、現に剣を突きつけられたアレンは多少の焦りはあるものの、恐怖といった感情は一切感じていなかった。ダークオーラを背負ったセリカの方がよっぽど怖かったんじゃなかろうかといった具合である

と、男は懐から何かを取り出した

「――これが何か分かるか？　こいつはあの上位竜種である大空竜の牙だ」

周囲がざわめく。しかしそれは無理もない

男が取り出したのは大空竜の牙は手のひらサイズにも及んだ。大

型の魔物といえど此処までのサイズのモノはない。この牙を持っていること――それ即ち上位竜種を倒したことに他ならないのだ

だが、アレンは

「（大空竜の牙ってこんな小さかったっけか。俺たちが持ち帰ってきた奴は肘から先くらいまであったような気が……。あっれー？でもこのサイズだったような気もしなくもないんだよな）」

牙をまじまじと見つめながらそんなことを考えていた

しかし男はそれを呆然としているように受け取ったのか、妙に勝ち誇った笑みを浮かべると

「よかったなテメェ。今の俺は機嫌がいい。本来なら侮辱罪として叩っ斬ってやるところだが、今回だけは見逃してやる」

「……ん？　あぁ、うん。ありがとなウブゴァさん」

「だから違ぇって言ってんだろうが！！」

「――というわけで、ただいま」

「おかえりなさいませ。なにやらとても盛り上がっていたみたいですね。こっちまで声が聞こえてきましたよ」

「盛り上がってたっていうか……うーん、説明しづらい」

どちらかというと向こうが一方的に捲くし立ててきたに近い

まぁ結果がどうであれ、あの牙は本当に大空竜のものなのだろう。
それにしては気迫というか大空竜を相手にしたときのような威圧感はなかったが

「さて、やることやったしそろそろ御使いに戻ろうかな。あんまりダラダラしてると帰ってからセリカにド偉い目に遭わされそうだ」

「そうですね。それがよろしいかと。」

「クォーツさんも長々とつき合わせて悪かったな。お詫びになんかアクセサリーのひとつでも買っていくよ」

「いえいえ、私も有意義な時間でしたから。お詫びと言うのであればまた暇な時にお話相手になってくれませんか？」

「え、そんなんでいいのか？　わかった！　俺なんかでよければいつでも付き合うぜ！」

じゃーなー！　と子供のように手を振るアレン。それを見送りながら

「ふふ……本当にあの方そっくりですね」

青年は薄く微笑んだ

第１９話　好奇心の果てに（後書き）

更新が遅れました

更新が遅れました

大事なことなので２回言いました

本当に申し訳ございませんでした

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4652s/

Dreams don't come true ～夢も希望もありゃしない～

2011年12月13日05時46分発行